
僕達の惑星へようこそ

篠森京夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕達の惑星へよつて

【ZPDF】

N1609D

【作者名】

篠森京夜

【あらすじ】

いつものように『処刑』を終え、独り街を歩いていた夜。雨の中、僕は彼女に出会った。魔女の名を語る彼女との出会いが、この街に生きる僕達の運命を変えていく。『処刑』グループのリーダー、リヨウの。『ビジネス』を嘗む女子高生、カナの。……そして、誰にも心を開けずにいた、僕の。

第一話「彼女の銃と僕のビデオカメラの話」 - 1

PM・11・44

ビデオカメラのモニターの中で、おじさんの灰色のコートがはためいた。

何度も足をもつれさせながら、冷たいアスファルトの上を走つていぐ。

おじさんが街灯の下を通過する度、薄汚れたコートが奇妙に白くモニターに映つた。

年齢は多分五十歳くらいだ。職業はサラリーマンだろうか？ 体格は貧弱で顔には皺が多く、頭髪もかなり薄い。僕らがおじさんについて知つてているのはそれくらいであり……それ以上知る必要もないだろう。

ここは古びた工場脇の細い道路だ。何処までも続いていそうな灰色の塀の向こう側に、高い煙突が影絵のようなシルエットを浮かべている。

この工場は数年前に潰れてから取り壊されることもなく放置され、この時間帯に訪れる者などまずいない。もつとも、数十メートル先まで行けば小さな商店街がある。前方にぼやけて見える緑色の光は、まだ開いている店のネオンの光だろう。

もしもあそこに辿り着けたら、このゲームはおじさんの勝ちだ。でも、辿り着けなかつたら……。

おじさんの左側の闇から長身の男が身軽な動作で現れ、おじさんを追い抜いた。そして男は、サッカーボールでも蹴るようにおじさんの足を払つた。

おじさんは咄嗟に避けようとしたようだが、バランスを崩して頭から地面に滑り込んだ。

地面に服が擦れる嫌な音と共に、小さな悲鳴が響く。おじさんは

受け身をとることもできず、傷めたらしい右腕を庇う形でうずくまつた。

長身の男に続いて現れた数人の男達が、素早くおじさんを取り囲む。何処にでも見られるような服装だが、全員がマフラー やサングラスで顔を申し訳程度に隠している。

おじさんは地面に這いつくばりながらも明かりの方に進もうとしたが、男達の足が彼の進路を塞いだ。男達が楽しげにおじさんを蹴りつける。

最初におじさんの足を払った男が短く声を放つた。男達が統制のされた獵犬のように一斉に動きを止め、再度おじさんを囲む壁のように並ぶ。長身の男は走つて乱れた長めの黒いコートを整えると、ビデオカメラを構えている僕の方を振り返り、髪をかき上げながら言った。

「ちゃんと撮つてるだろ？ これからがいいところなんだからな」

「……ああ。ちゃんと撮つてるよ、リョウ」

僕はモニターから目を離して答えた。ずっとモニターからの映像に集中していたので距離感が狂い、地面が揺れる感じがする。

長身の男……神野涼は僕と同じ二十歳だ。

浅黒い肌に軽く脱色した長めの髪、それと両耳につけた銀色に輝く大きな逆十字のピアスが特徴的だ。顎立ちは彫りが深く、頸の辺りに生やしたヒゲが、その輪郭を更に強調している。切れ長な目から覗く黒い瞳は、猛獸のようでいて不思議な程に透き通っている。リョウはビデオカメラに視線を向けながら、おじさんのそばへと進んだ。そして地面にうずくまつているおじさんの姿を一瞥すると、アメリカのテレビ番組の司会者のように大袈裟な身ぶりで話し始めた。

「さて、皆さん

たっぷりと余韻を残し、再び口を開く。

「これから、お楽しみの『処刑』の始まりです。ええと、時間は

……

「十一時十五分前」

薄明かりの下で腕時計の文字盤を見ようとしていたリョウに代わって、僕はモニターのデジタル表示を読み上げた。

「ああ、時間は十一時四十五分だ」

リョウは頷くと薄笑いを浮かべてこちらを見た。

彼はこの辺りではかなり名の通ったグループのリーダーだ。言わずと知れたことだが、その地位は彼自身の運動能力の高さとカリスマ、そして気に入らない者に対しては容赦なく拳を振るう暴力性によって成り立っている。他の要因としては、彼がとある大手会社の社長の一人息子だというものもあるが。

更に言うと、彼は有名な私立大学の経済学部の二年生で、クラブでDJをやっている。本人は将来役者になるつもりだと語っているが……まあ何にしても大学受験に一度も失敗し、既にやる気もない二十歳のしがない浪人生には関係のない話だ。

まだ現役の大学受験生だった頃、当時通っていた地元の予備校で僕はリョウと知り合った。僕らの間にはまったくと言つていいくほど共通点がなかつたのだが、彼は僕のことを気に入つたらしい。二人の関係が今も続いているのがいい証拠だろう。

しかし、僕は未だにリョウとの関係が続いていることを不思議に思う。さつきの時刻のことにして、他の誰かが同じことをすれば、殴られはしないまでも雰囲気は悪くなつたはずだ。

勿論僕にしても完全に対等というわけではない。もし僕が不用意に彼の領域に踏み込めば、二人の関係はすぐさま崩壊するだろう。僕らの関係は常にリョウの方が強者であり、僕は無礼講の許された道化に過ぎない。

もつとも、僕がその辺りのことを理解しているからこそ、彼は僕のことを気に入っているのかもしれないが。

「さて、今日の獲物は……」

リョウは右手の人指し指を立てて、おじさんを上から覗き込んだ。

おじさんは大きく息をつきながら怯えた目でリョウを見上げた。かなり薄くなつた白髪が、汗ばんだこめかみにへばりついている。

「た、助けてくれ……」

おじさんが掠れた声で呴いた時、リョウの瞳に一瞬危険な色が浮かんだ。

次の瞬間、リョウの黒革のブーツがおじさんの腹部にめり込み、おじさんの体が跳ね上がった。

おじさんは腹を押さえながら地面に這いつぶつた。大きく開かれた口からは叫び声の代わりに不透明な胃液が吐き出されている。リョウは引き攣つた薄笑いを浮かべ、おじさんの懐から抜き取った定期入れを開いた。

「ええと、なになに？　田島亮介、五十三歳……係長……最悪だな」

リョウは定期入れを指の間で弄んで眺めていたが、ふと何かに気づいて目を止めた。

途端、リョウは何か嫌な物でも見たかのように定期入れを投げ捨てた。定期入れは地面を転がって僕のそばで止まり、汚れた表面を見せた。

「さあ、始めようか？」

一瞬浮かんだ表情の乱れを打ち消すかのように、リョウは気取つた仕草で彼の忠実なる部下達の方に手を振つた。

「……どうして？」

男達と共におじさんの周りを取り囲もうとしていたリョウが、驚いたように振り向く。不意をつかれたせいか今度は薄笑いを浮かべておらず、その貫くような攻撃的な視線のみが残つていた。

「……何だつて？」

明らかに不機嫌な声で、リョウが尋ね返す。

まずかつた。今の質問は明らかに彼の不文律を乱すものだった。「いや……つまり……ちゃんと『理由』つても言つておいた方がいいんじゃないかなってね。ほら、何故処刑をするのかってさ。

『パルプフィクション』のサミュエル・L・ジャクソンみたいにね……』

しどもどろの弁解だったが、リョウは機嫌を直したようだ。僕はモニターの上に再び彼の薄笑いが浮かんだので安心した。

それにしても、何故僕は彼の行動の理由など聞きたくなつたのだろう？

リョウは再び司会者の雰囲気を纏うと、そばにいた年下の男に尋ねた。

「どうしてだと思う？　どうしてこいつを処刑するんだ？」

年下の男はジンと言つて高校を出たばかりのフリーターだ。ピンク色の短い髪と黄色のダウンジャケットが夜でも目立つ。彼はリョウの右腕的存在で、いつも行動を共にしているのだ。そして僕に対しても最も態度が厳しい。

ジンは不意の質問に戸惑つたようだが、僕の方を見るとあからさまに敵意のこもつた表情を浮かべて吐き捨てた。

「決まつてんだろ。こいつが間抜け面して歩いてたからだ。俺はこういう死にかけの奴が大嫌いなんだ！……わかったか？」

ジンは御丁寧に僕の目の前まで近づいて来て、ビデオカメラのレンズを覗き込む形で最後の台詞を言い放つた。脂分の多い肌がモニターいっぱいに映り、剥き出しの敵意が肌に伝わつてくる。

同じグループの仲間だとは言つても、僕はジンのような連中は嫌いだ。勿論彼らにしても、僕のような人間がいるのは不愉快だろうが。

ジンの暴力的な視線がモニターを通して僕の目に届く。直接見ればこの視線に勝てるはずもないのだが、モニターを通して見ると不思議とテレビで猛獣でも見ているような気分になつてくる。

僕に屈服した様子がなかつたからだろう、ジンはまだ何か言いたげだつたが、リョウに呼ばれて忌々しそうに僕を見ながら元の位置に戻つた。

リョウは右手の人指し指を僕の方に突き出した。

「わかつたか？ こいつらはいるだけで俺達の街を汚しているんだ。つまり蠅やゴキブリと同じだ。ゴキブリを潰して罪になるか？ いやならないね、ゴキブリがいると不潔だし不快だ。だから潰す……」

・衛生学の基本ってやつだ

同じ指に弾かれた逆十字のピアスが、澄んだ金属音を響かせる。リョウは満足げに頷くと僕に背を向けた。

……道化とのお喋りの時間は終わり、ということか。

おじさんの周りでは、王様の許可を得ずに、彼の兵隊達が処刑を始めていた。

『一般的に個人の嫌う物を見れば、その個人がどのような嗜好や性格、又は生活状態であるのかを判断できる。ただしここで問題なのは、その物が直接的に個人に危害を与えるのではなく、個人の恐怖の象徴である場合があることである』

これは心理学の基本というやつだ。簡単に例を挙げると、円形の物が嫌いな人間は、円形の物そのものが恐いのではなく、円形に開いた井戸に落ちたことがある等の過去の経験が恐いのだ。この場合、円形は痛みや孤独、暗闇に対する恐怖の象徴ということになる。勿論、そんなに単純な話は稀だが。

ゴキブリや蠅は確かに伝染病などの恐怖の象徴だ。では五十三歳のサラリーマンは、街の王様にとって何の恐怖の象徴なのだろうか？ 一度目の受験に失敗した僕がリョウと再会したのは半年前のことだ。

その頃、僕は親元を離れてこの町の予備校に通っていた。僕は昔から社交的なことが嫌いで、その時もまったく知り合いというものはないなかつた。

いや、作らなかつたと言つた方が正しいかもしない。

しかしそれでも限度というものがある。流石に孤独感に悩まされ始めた頃、僕は街で偶然リョウと再会した。

どうしてリョウが予備校で数回会つただけの僕を覚えていたのかはわからない。しかし不思議なことに、僕らの関係は続いた。

数ヶ月後、僕は彼から『処刑』の話を持ちかけられることになった。

処刑は続いた。

おじさんは見るも無惨な姿となつており、ほとんど意識もないようだ。リョウはおじさんの襟元をつかむと、顔の近くに引き寄せた。

「おじさん。俺のことが恐いかい？……それとも憎いかい？」

おじさんの小さく開いた口から、わずかな言葉が漏れた。

「……家に……帰して……くれ……」

リョウが無言のまま手を放し、おじさんが再度地面に突つ伏す。

リョウは軽くため息をつくと、僕の方を見て……少し微笑んだ。

リョウは時々、僕に向かって奇妙な笑みを浮かべる。まるでこれから悪戯をしようとしている子供みたいに……。

リョウはコートのポケットから無造作に短い棒状の物を出すと、それを軽く振った。

ガチャリという金属音と共に、青白く光るナイフの刃が彼の手の中に出現する。あれはリョウがいつも持っている外国製のナイフで、彼が骨董品屋で見つけたという代物だ。骨董品と言つても、時の流れを感じさせないほどに抜群の切れ味を誇るナイフだ。現にリョウは一度、対抗するグループのリーダーの腕をあれで切り裂いたことがある。

彼はナイフを軽く弄ぶと、いきなりおじさんに突きつけた。

「ちょっと待て！ 殺すのはまず……！」

僕は反射的に叫び、ビデオカメラのモニターから目を離した。

ナイフはおじさんの首の直前で止まっていた。おじさんが今にも氣絶しそうな表情で目前の刃を見つめている。

「……やるわけないだろ？ 何びびってるんだよ」

リョウは器用にナイフを一回転させて刃をしまい、立ち上がった。

ジンが安堵とも笑い声とも判断のつかない短い息を吐く。

リョウはナイフをポケットに入れると、僕の方を見て言った。

「こんなことでびびつてゐよひじや、お前もこいつと同じ腰抜けだ。……こいつとな！」

振り上げられたリョウの足が、大きな弧を描いておじさんの腹部に直撃した。おじさんは大きな布の塊のように転がると、道の端で動かなくなつた。

取り巻きの中から低い感嘆の声が上がる。

リョウは面白くなさそうに周りを見回すと、短く処刑の終了を告げた。

取り巻きの男達は皆、冷めやらぬ興奮に身を包みながら、緑の光溢れる商店街の方に歩き出した。商店街までは数十メートル、……そこまで行けば皆、常識の世界に戻る。

あの中に入れば、僕達は一応の秩序を纏つて生活することになる。少なくとも人に暴力を振るえば咎められる世界。しかしここは闇の世界との境界だ。一度こちら側に入ってしまえば、この世界の支配者が秩序を決めることになる。

リョウは僕の肩に手を置いて耳元で囁いた。

「いいか？ 一人だけいい子にならうとしてるんじゃないぞ……見てるお前だつて同罪なんだ。くだらない常識なんかここでは何の役にも立ちはしない。ただ喰うか喰われるかだ。お前は頭がいいんだ、そこら辺のことはわかつて來ているだろ？ この世界を楽しめよ。みんなやつてるんだ……」

そして彼は忠実な部下であるジンの所に行きながら言つた。

「ビデオは明日までに編集しておいてくれ、夜の九時から『スケアクロウ』だ……遅れるなよ」

リョウは僕にビデオで撮るよつて言つと、歩きながら大袈裟な身ぶりで叫んだ。

「それでは皆様、また明日御会いしましょ？ See you

tomorrow！」

モニターの中の彼の姿が、黒いコートと一緒に黙って大きく揺れる。

最後の台詞を言い終えると、リョウは少し照れ臭そうに微笑んで僕に手を振り、ジンと共に闇の中に消えた。

リョウが消えたのを見計らい、僕は足元の定期入れを拾つて中を開けた。

それは確かに何の変哲もない、ただの古ぼけた黒皮の定期入れだった。ただ、その内側には小学校高学年くらいの女の子……鼻筋がおじさんにそっくりだと、その横で恥ずかしげに微笑むおじさんのピンク色のプリクラが貼つてあった。

……どうやらこれは、編集ではカットしておいた方がいいものらしい。

僕は定期入れを持ったまま、おじさんのそばに近づいた。おじさんは気を失っているようだが、幸いかろうじて呼吸は続いていた。

僕は定期入れをおじさんのそばに置くと、ポケットから携帯電話を出した。

そんなことをしてもお前だつて同罪だ。

頭の中でリョウの声が響く。

「…………わかつてるよ、そんなこと…………」

咳き、僕はビデオの電源を切ると、携帯電話の番号ボタンを二回押した。

第一話「彼女の銃と僕のビデオカメラの話」 - 2

PM・0・55

さつきまで勢いよく降っていた雨が、少し小降りになつた。絶えず生まれ続ける水滴が、一瞬のためらいを見せた後、呆氣なく落ちる。そして小さな波紋を起こし、また大きな流れに飲み込まれていく。僕はコンビニの前にしゃがみ込み、突き出した屋根の縁から落ち続ける水滴を眺めていた。

あの後、救急車が来るのを見届けてから一人で街を歩いていた僕は、雨が降り出したことここで雨が止むのを待つことにした。雨が降っているせいかコンビニに客の姿はなく、店員も奥に引っこんでしまつていて。道路にも人の姿は見えず、時折車が目の前を通り過ぎていく。僕はもう一度辺りに人がいないのを確かめると、ビデオカメラの電源を入れた。

僕は昔からカメラマンになりたかった。

何故かと言わると答えられないが、昔から見られるよりは見る側の人間だったことは確かだ。実際、リョウにカメラマンを頼まれた時は、『処刑』に参加しなくていいという安堵と共に、ビデオカメラが使えるということに少し……いや、かなり心が動いた。

リョウの言う通り僕だって同罪だ。

モニターにはさつきの処刑の様子が映っていた。地面に転がるおじさんと、それをまるで人間ではない何かのように痛めつけているリョウ達……さつきまで本当に体験していたことなのに、モニターを通して見ると遠い国の出来事のように見える。

しかし、やがてさつきの嫌な感じが映像から解凍されて伝わってきたので、僕は電源スイッチに指を伸ばした。

このビデオカメラは決して楽な生活を送っているわけではない僕が、バイト代を使い果たして衝動的に買った唯一の物だ。僕にとつ

てビデオカメラは世界から僕を守る防波堤であり、また僕を世界につなげる唯一の目だ。この手のひらに収まる小さなレンズとフィルムの固まりによって、僕は『見る側』の位置を保っている。

だからこのレンズに映るものは、リョウだろ？とおじさんだらうと……道行く他人も落ちている空き缶も、僕にとっては『被写体』であり僕とは違う世界の存在となるのだ。

僕はモニターの再生映像を消すと、録画することなしに周りの風景をモニター越しに見つめ始めた。

……と、雨が上がり、雲の隙間から丸い月が覗いた。

月の光は薄くかかった雲をくすんだ虹色に染め、アスファルトを白く輝く波のない海へと変えた。その上を、苛立つ心を抱えた人々を乗せた車が、オレンジと黄色のライトの尾をはためかせながら滑っていく。

その時、不意にモニターの画像が乱れ、ブラックアウトした。

僕は反射的にモニターから田を放して、ビデオカメラをチェックした。浅ましいようだが、使い慣れた物が壊れるのは自分の一部がなくなつたようで嫌なものだ。それに……これは高かつたのだ。

ところがレンズを地面に向けた途端、モニターに光が戻った。

「…………あれ？」

確かに元に戻つたのは嬉しいが、やはり異常があるかもしれない。僕はもう一度周りを撮つてみることにした。

コンビニの明かり、その前のゴミ箱、駐車場の白線、歩道脇の街路樹、ガードレール、遠くの信号、砂漠の嵐……あれ？

道路の方にビデオカメラを向けた僕は、また画像が乱れたので眉をひそめた。

そう言えば、さつきも「ちにビデオカメラを向けた時に画面が乱れたのだ。ということは、この方向に異常の原因がある……ということになるのだろうか……？」

およそ結論とは言い難い結論に達し、モニターから田を離した僕は、意外なものを見ることになった。

そこには女がいた。

……女がいたのだ。

ただ……少し変わっていた。

女はかなりの長身で、長い黒髪が更にその長身を際立たせていた。月の光に遮られて顔立ちははっきりしないが、輪郭は白く輝き、痩せた体つきで手足は長い。この時期、夜はもう寒いというのに、赤い薄手のワンピースの上から大きめの薄汚れたコートを羽織つているだけの服装だ。

まだ雨は霧雨となつて少し降つていたが、女は雨よけの物は一切持つていなかつた。いや、それどころか雨のことなどまったく気にしていないようだ。何故か素足で、肩にかけた手には赤いサンダルがぶら下がつている。

女は濡れた黒髪を額からかき上げ、水滴を払い除けた。そして僕の視線に気づいたのか、目線をこちらに向けた。

僕はその情景の異常さと……美しさに魅せられていた。しかし女と田が合つたので、少し焦つてしまつた。

見るということは、その対象と同じ条件の情報の世界を共有するということである。言い換えれば、同じ遊戯盤の上にいるということだ。だから特殊な機具（望遠鏡や写真機、ビデオカメラなど）を用いない限り、見る側と見られる側の立場は常に変化する可能性がある。ボールの位置で攻撃する者と防御する者が変化するドッジボールのように、見る側は常に見られる側になる危険性があるのである。そして僕は見られるのが好きではない。特に女性には……。

女は僕の思惑などおかまいなしに、こちらに向かつて歩いて来た。黙つたままの僕の前を通り、雨のかからない場所に入る。そして小さくため息をつくと、体を曲げて手にしたサンダルを地面に放り投げ、僕の隣に座り込んだ。

顔はうつむき、体に張りついた長い髪から雨が絶えず落ちている。

間近で見ると肌がなめらかな褐色であることに僕は気づいた。

「……濡れてるけど、寒く……ない？」

「…………別に……」

やはり何か話しかけるべきだつて思つて考えた質問に、女は簡潔に答えた。

低い囁くような声で、少し背筋を撫で上げられたような気がした。

「……ああ、そう……それは良かつた」

それだけ言うと、僕は黙り込んだ。ここまで不愛想に反応されると、どう続けていいのかわからない。

その時、不意に女がこちらに顔を向け、微笑んだ。

間近で見る女の顔はとても美しかった。少し面長な顔立ちに、切れ長で大きな……ネコのような目が輝き、眉は黒く弧を描いている。鼻筋は整い、その下の唇には寒さの為か血の氣がなかつたが、それが却つて彼女の美しさを際立たせている。

僕は微笑みの意味をつかみかねて……またその美しさに心奪われて、しばらくの間少しも動けなかつた。女は僕のそんな様子を見て、もう一度小さく微笑むと、顔を戻した。

それと同時に我に返つた僕は、自分がかなりみつともない表情であつたことに気づき、今更ながら焦つた。

「靴。どうしたの？」

僕の問いに、女はこちらに顔を向けることなしに、地面に転がつたサンダルを指差した。そのサンダルはヒールが高い物だったが、片方のヒールが折れていた。

成程……いや、納得している場合ではない。

「何処から来たの？」

僕が続けた質問に女は面倒そつに答えた。

「西から……」

「……何処に行くの？」

「東へ……」

「…………そう」

ダメだ、会話のきっかけがつかめない。

しかし沈黙を苦痛としているのは僕だけのようで、彼女は僕の存在を忘れたように体に張りついたワンピースを触っている。ワンピースは上に着ている古い……おそらくは男物のコートとは違い、かなり高価そうな物だ。東洋風の細かな模様が刺繡されている。コートに隠れていて見えないが、多分、形としては袖がなくキャミソールみたいに肩紐でとめるタイプだろう。

と思っていたら、彼女がコートを脱いだので、いきなり褐色の肌の肩と背中の上部が露になつた。僕は慌てて視線を逸らした。女は立ち上るとコートを叩いて水気を切り始めた。

何をやってるんだか、僕は。

ふと自分の行動が可笑しく思えた。僕と彼女は初対面で、たまたま同じ場所にいるだけだ。彼女のように互いを無視しても悪いことではないし、無理に会話をすることもない、双方が迷惑でない距離を取ることができればそれでいいはずだ。

どうも僕は他人との距離を取るのが下手だ。

自分が何を他人に求めているのか自分でもよくわからないのだ。まったく人とコミュニケーションできないのは恐ろしく嫌だし……でも、人が自分に近づくと拒絶してしまつ。

時々、自分は本当に人との繋がりを求めているのか、と疑問に思つてしまつ。

やがて、雨が完全にあがつた。空は闇と言つより深い青に近く、月は雨で洗い流されたかのように透明な光を放つていて。

「……月が、綺麗だな」

僕は特に誰に言つつもりもなく呟いた。

「そうね。綺麗な月……」

驚いたことに、女が返事をした。コートを腕にかけて空を見上げる彼女の背中で、まだ乾き切っていない黒髪が月の光を浴びて淡く輝いている。

「アタシ、今日何処で寝るか考えてたんだけど……決めたわ

女は淡々とした口調で呟き、僕を見てからかつよく微笑んだ。

「貴方の家に泊まるわ」

「…………え?」

『え』と言づよじは『へ』に近かっただろう、間の抜けた声で僕は聞き返していた。

「だから、貴方の家に行くつて言つてるのよ。もしかして家がないの?」

「…………いや、あるけど……」

「ならいいじゃない」

「…………ちよ、ちよつと待つてよ」

僕は混乱した頭で考えながら言つた。自分でも声が上ずつているのが情けない。

「それはつまり……僕と寝たいってこと?」

「別に貴方と寝る必要はないわ……それに」

女はコンビニの硝子窓にもたれかかり、僕から見て向こう側の脚を上げると、指をワンピースの裾にかけて少し捲り上げた。彼女の美しい太ももが、月の光の下に露になる。

次の瞬間、彼女の目が冷たく光つた。

「アタシは穢便に話を進めたいの」

彼女の太ももの内側には、革のバンドで何かが括りつけられていた。

それははどうやら何か黒い金属の物体と、そのホルダーで……そしてその金属の物体は……どう見ても小型の拳銃だった。

彼女は鮮やかな手つきで銃を引き抜くと、折り畳んであつた銃身を伸ばして僕に突きつけた。

「…………さあ、案内してくれる?」

女が相変わらずの低い声で囁く。

銃の銃口は丸くて黒く、その奥は見えなかつた。視線をずらすと銃口の向こう側に女の黒い瞳が光つっていた。

「これ……本物?」

「試してみる？」

彼女の申し出は僕によつて丁重に却下された。それに何と言つか、

彼女の乱雑な銃の扱い方や持ち方に不思議な真実味があつたのだ。

「…………わかつた…………案内する」

僕は顔の前に突きつけられた黒い銃身を見ながら呟いた。こんな状況なのに、頭の中は妙に落ち着いている。いや、正確には、僕はこの状況を完璧に把握しきれていなかつた。まるで夢の中にはうな曖昧な感覚が全身を覆つている。

女は僕の返事を聞くと、銃を構える手を降ろした。

近くにはコンビニの入り口があつた。走れば数秒で中に逃げ込めんじやないかと思つたが、中で一人の店員が雑誌を見ながら笑つていたので、僕はその考えを却下した。

別に人道的立場から考えたわけじゃない。すぐに追いつかれるだろうと思ったのだ。それに突然「銃を持った女に追われるんだ、助けてくれ！」などと言つたところで信じてくれるかどうか……少なくとも僕なら信じない。

顔を戻すと、女は楽しそうな微笑みを浮かべながら僕を眺めていた。

「…………ところです……」

僕はビデオを持ち上げて言つた。

「これで君を映そつとしたら動かなくなつたんだ。どうしてかな？」

女は銃口でこめかみを搔くと、少し申し訳なさそうな顔をした。

「ああ、それアタシのせいね。そういう体質なのよ。心配しないでいいよ、アタシ以外はちゃんと映るから」

「…………何なんだ、それは？」

僕はビデオの電源を切り、レンズを彼女に向けた。

「それじゃあ、もう一つ質問してもいいかな？…………名前は？」

「…………ドロシー…………」

第一話「彼女の鏡と僕のピートオカメラの話」 - 3

AM · · · ?

夢を見た。

夢の中で僕は、曇つた暗い空の下、砂漠をさまよっていた。地面には細かい砂が風によって波状の模様を作り、それは徐々に大きくなうねりとなつていった。そしてそれは、地平線の彼方まで続いていた。

砂は柔らかく、一歩ごとにぐるぶしの上まで足が埋まる。僕は何かに追われるようになつて、必死になつて進んでいた。

不意に足下の感覚が変わり、僕はアスファルトの上に立つていた。周りを見回すと、そこは無人の遊園地の中だった。

時刻は夕方だらうか？ 青く曇つた空の下、色とりどりの電飾を

つけた無人のアトラクションが、賑やかな音楽と共に動いている。

僕が遊園地の中を進んで行くと、大きなメリーゴーラウンドがあつた。暗い遊園地の中で一際明るい光を放ち、カラフルな木馬や馬車がゆつくりと回転している。

僕が周りの鉄製の柵に手をかけて眺めると、ちょうど僕の前を赤い目をしたピンク色の木馬が通り過ぎていくところだつた。

何か嫌な感じがする。早くここから逃げださなければ……僕は何故かそう思った。

その時、高らかに電子音のラッパが吹き鳴らされ、木馬の回転するスピードが一斉に速くなつた。

僕が驚いて辺りを見回すと、メリーゴーラウンドの向こう側から人の乗つた木馬が現れた。空色の角を生やした白馬……その上に乗つていたのは、薄汚れたコートを纏い、頭から血を流した、あのおじさんだつた。

おじさんの禿げかけた白髪が強い光を浴びて更に白く輝き、こめ

かみから流れた血は、そこだけ強調されたように赤かつた。

おじさんは流れる血にかまうことなく僕を見ると、楽しそうに笑い手を振った。

僕の心臓の動悸が激しくなり、背筋に汗が流れるのが感じられた。そして逃げ出したい欲求は更に強くなつた。

しかしおじさんは僕とは対称的に、本当に楽し気に手を降つて笑いかけている……僕は反射的に柵を握り締めていた手を放し、おじさんに手を振つた。

……しなければ殺されそうな気がした。

おじさんは僕が手を振つたのを見て嬉しそうに微笑むと、木馬から両手を放し、深呼吸でもするように体を反らして、僕の前を通過して行つた。

僕は泣きたくなつっていた。しかしどういうわけか、逃げ出さうとしても足はその場所から動くことしない。

逃げ出さなければ！　ここから早く！

僕が両手で柵をつかみ体を動かそうとしている間に、おじさんの乗つた木馬は視界の向こう側に消えた。

多分、おじさんはもう少しで反対側から出て来て、もう一度僕に手を振るだろう。

そうしたら、僕はもう一度手を振り返さなければいけないのだろうか？

それは嫌だ、早くここから逃げ出さなければ！

「畜生、あの時助けるんじゃなかつた！　あんな奴……やっぱり死ねばよかつたんだ！」

僕は柵をつかむ手に力を込めながら叫んだ。

途端、僕は世界崩壊の序曲にも似た振動に襲われ、辺りが真っ暗になつた。頭の中を滅茶苦茶に搔き乱されるような感覚と共に、目の前の映像が凄まじい速さで変わつっていく。

目が覚める瞬間、水浸しの部屋の中に立つ髪の長い女の姿が見え

た。部屋は暗く、天井からは滝のように水が流れ落ちている。女は腰まで水につかりながら両腕を広げていた。

AM・10・15

目を開けると天井が見えた。

僕の部屋の天井はだいぶ痛んできている。天板にはヒビが入つてあり、まるで切れ長な魔女の目のようだ。

壁の時計は十時半を示している。あの時計は確か十五分くらい進んでいたはずだから、今は十時十五分か……。

僕を起こしたのは携帯電話のバイブレーションだった。僕はソファーに寝たまま腕を伸ばし、机の上で踊っている携帯電話を取った。電話はリョウからだった。

『何だよ、寝てたのか?』

『どうも寝ぼけた声を出してしまったらしい。僕はさつきの夢の内容を思い出しながらその通りだと答えた。

『いつまでも寝ぼけてるんじゃないねえぞ、俺なんか……』

その時電話の向こう側で、女の甘える声と、それを追い払うリョウの声が聞こえた。

「……女がいるのかい?」

『ん? ああ、まあな

リョウの話によると、昨夜あの後二人組の女の知り合いと会つたので、一人とも部屋に連れ込んだらしい。

「寝たの?」

僕の質問にリョウが苦笑した。

『当たり前だろ? 何言つてるんだよ、女が部屋に泊まりたいって言つてるんだ、やるに決まってるじゃないか』

僕はソファーに座り直すと少し考えてから返事をした。

「……ああ、そうだよね……うん、僕もそう思つよ」

リョウは僕の口調の変化にはかまわず続けた。

『ところで、アコミとはどうなったんだ?』

その名前を聞いた途端、携帯を握る僕の手の力が強くなつた。

あの女……か。

「どうして……どうにもなつてない。あれつきりだよ自分でも声に力がないのがわかる。

『何だ、そうなのか』

リョウは教師が物わかりの悪い生徒に話すように続けた。

『お前さあ、何を恐がつてゐるんだよ。やりたいようにやればいいじゃないか、お前は遠慮し過ぎるんだ。そんなことじや……』

『うるさいな、放つておいてくれよ!』

受話器の向こう側で、リョウが驚いたように息を呑む。……しました。

僕は一瞬ひどく後悔したが、

『悪い悪い、そんなに怒るなよ……ところで、昨日のことなんだが僕は思わず安堵のため息をつきそうになつた。どうやら彼の怒りには触れなかつたらしい。

リョウの持ち出した話題は、昨夜の処刑のことだった。

『あのオヤジ、死んだかな?』

リョウは天気の話でもするかのように軽く話した。

『……さあ、どうだろうね? ……でも死んだらまずいよね』

僕は慎重に言葉を選んだ。

すると、リョウは意外なことを言つた。

『死んじやしないよ、誰かさんが救急車なんか呼んだからな』

『……知つてたのか』

『ああ、今朝ジンに見に行かせた。あいつ怒つてたぜ、あのオヤジが俺達のことを話したらどうするんだつてな』

黙つてしまつた僕をからかうようにリョウが続けた。

『人道的処置つてやつだな。まあ今回は大目に見てやるよ。だがジンに殺されたくなつたら、そういうことはやめるんだな』

電話の向こうで女が呼んだらしくリョウが動くのが感じ取れた。

『くだらないな、あんな奴生きてて何になるんだ。ああ、心配するなアイツは訴えたりなんかしないぞ、そんな勇気もない負け犬だ。もし警察が動いても……親父が揉み消すぞ』

台詞の最後の部分を、リョウは吐き捨てるように呟いた。
女の声が更に大きくなつた。かん高い笑い声が転げ回る。どうやらリョウも移動しているらしい。リョウの演説は続いた。
『この世の中には無駄な人間が多過ぎるんだよ。結局世の中弱肉強食で動いているんだ、だから弱い人間は何をされても文句を言えやしないのさ』

受話器からシャワーの音が聞こえてきた。

『どうして人を殺しちゃいけないんだ？ 僕達は都會に生きる獣だ、自由に生きて自由にやるんだ……そして羊には羊の役割がある。お前だってジンギスカンになりたくはないだろ？』

リョウがシャワーの中に入つたらしく声が聞き取りにくくなつた。しかしそのリョウの台詞は、低い声で呴いたにも関わらず、はつきりと聞き取れた。

『俺に従え、それが生きる道だぜ』

……電話が切れた。

僕は再びソファーに寝転がつた。窓の外の太陽が眩しい。リョウの言うことももつともだ。どんなに綺麗事を言つても、今の世の中正しいことが必ずしもうまくいくわけではない。
そして僕にも欲望はある。

僕は天井を眺めながらしばらく物思いに耽り、やがて立ち上がった。

僕の下宿先は昨夜のコンビニから少し離れたワンルームマンションだ。お世辞にも広いとは言いがたい部屋のほとんどを、ベッドとソファーと机と椅子が占領している。

壁には趣味で買ってきた絵葉書や自分で撮つた写真が何枚か張ら

れているが、それ以外はガランとした部屋だ。

……ただし、今朝はいつもと違うものがあった。

僕はベッドの前に立つて、それを見下ろした。

ベッドには、あのドロシーと名乗った女がいた。僕の方に顔を向ける形で、毛布にくるまつて眠っている。寝相は悪く、長い脚はほとんど剥き出しだ。僕はベッドの脇に身を屈め、彼女の寝顔を覗き込んだ。

昨夜、僕に案内されてこの部屋に入った彼女は、さつさとベッドを占拠して眠ってしまった。

勿論何もなしだ。僕もソファーに座っている間に眠ってしまったらしい。リョウが聞いたら何と言つだらう？

……そうだね、リョウ。僕もそつねうよ。

ドロシーの寝顔は意外とあどけなく、小さく開いた唇の隙間から微かな寝息をもらしている。僕は音をたてないように、慎重に彼女の下半身の方へと移動した。

ドロシーの褐色の脚は朝日を浴びて鈍く輝き、白いシーツの上になまめかしい曲線を描いている。

ワンピースはハンガーにかかつたままだ。

僕は一瞬ためらった後、意を決してドロシーのなめらかな右脚に指を這わせ、毛布に隠れた部分へと指を滑り込ませた。

舌の表面が痛いくらいに乾いている。と、

「……おはよっ」

明らかに寝起きのものとは思えない、はっきりとした声と共に、僕の頭に銃が突きつけられた。

「何してたの？」

ドロシーは慌てて指を引つめた僕を見ながら上半身を起こした。勿論、銃は依然として僕に向いたままだ。

「……ああ、これを探してたの？」

僕が銃を見つめているので、ドロシーは銃を軽く持ち上げた。

「寝る時は枕の下よ……貴方みたいな人もいるしね」

それからドロシーは毛布を手際よく体に巻きつけベッドから降りた。一瞬、毛布の隙間から褐色の背中と白い下着が覗け、僕の動悸が激しくなった。

ドロシーはそんな僕を横目で見ると鼻で軽く笑つてからかうようになつた。

「それとも違う物を探してたの？」

つづづく勘に触る女だ。僕は平静を装いながら返事をした。

「まさか。何で君なんかに……」

「へえ、傷つくなあ……アタシつてそんなに魅力ない？」

ドロシーは無断でキッチンの冷蔵庫の中を物色しながら言つた。

「そういう台詞は冷蔵庫を開ける前に言つてほしいね

「ゴメンゴメン。ところでこれ食べていい？」

ドロシーは少しバツの悪そうな顔で振り返ると、手にしたパンの袋を振つた。

ドロシーはよく食べた。

僕の部屋の机は脚の長い大きめの机で、椅子も一つついている。はつきり言って一人暮らしの狭い部屋には不釣り合いな物だ。

しかし、やはり今朝はいつもと違う。

普段はガランとしている机の上は、大量の食べ物と食器と、そしてインスタント食品のパックに占拠されていた。

「……君は何者だ？ どうして銃なんか持ってるんだよ」

僕は目の前の不格好な目玉焼きを見ながら呟いた。

テレビをつけてみたが、銃を持つた女がうろついているなんてニュースはやつていなかつた。

……少年達による暴力事件もだ。

代わりにアメリカで起きた爆破事件の速報が流れていた。

ドロシーは一枚目のトーストにこれでもかと言いくらいにイチゴジャムを塗りつけると、

僕に朝食は摂らないのかと尋ねた。

「食べない……いやそうじゃなくて質問に答えてくれ」

ドロシーは楽しげに笑うと、トーストを食いちぎった。

「さあね、何でしょ? ……もしかして魔女だったりしてね」

ダメだ、答える気がまったくない。

僕は机の上を軽く叩きながらできる限り嫌味っぽく言った。

「僕の友人が話してたよ、もし女が来て部屋に泊めてくれと言つたら普通は寝るものだつて」

ドロシーは皿玉焼きの皿に手を伸ばすと、ナイフとフォークで器用に切り分けながら言った。

「それはそいつが今までに寝た女の話でしょ? アタシはアタシよ」

「それはそうだけど」

銀色のフォークがタンポポ色の黄身の膜を突き破り、半熟の黄身がドロリと流れ出す。

「それにさあ、貴方……なんて言つかあまり性的な魅力を感じないタイプだしね。色も白いし、顔も可愛いし……」

ドンッ!

卓の上に乗っていたジャムの瓶が、衝撃でひっくり返り床に落ちた。ドロシーが撲たれた猫のように硬直し、神妙な顔をして素直に謝る。

「悪いこと言つたみたいね……」「めん、謝るわ」

「……いいや、気にしなくていいよ」

僕は痛む手を摩りながら呟いた。

ドロシーは食事を終えると、ハンガーにかけてあったワンピースを取つて着替え始めた。頭からスッポリと被り、皺を気にしながら背中のボタンを留めていく。

時々、自分でも自分の感情が抑えきれなくなる時がある。最近の言葉を借りると『キレる』というヤツだろうか……だが僕のそれは、ジン達のそれとはまったく違うもののような気がする。

まるで自分の中に、自分とは違う化け物が住んでいるよつな……。

ふと、僕は机の上にドロシーの銃が置いてあるのに気がつい

た。

テレビでよく見るリボルバーで、昨日はやけに長く見えた銃身にはどうやら消音機がついているらしい。こぼれた卵の黄身とトーストの肩の横で朝日を浴びて黒く光っている。

「これが安全装置だつけ？……これでいいのかな？」

振り向いたドロシーは、僕が銃を構えているのを見てもそれほど驚かなかつた。それどころか軽く微笑むと、顔を戻して背中の最後のボタンを留め始めた。

つけっぱなしのテレビでは昔風の刑事ドラマが流れていた。犯人は人質を取り、銃を片手に立てこもつてしているようだ。

『手を挙げる。おとなしくすれば命だけは助けてやる』

登場人物の台詞に合わせて、僕はドロシーに銃口を向けた。

しかしドロシーは気にする様子もなく、ボタンを留め終わると僕の方に視線を向けた。彼女の黒い瞳がまっすぐに僕を見つめている。

『生物界では基本的に優れた能力を持つ個体が生殖し子孫を残すことができる。しかし人間の場合、それは更に複雑な条件を持つことになる』

僕は銃を構えたまま何かの文章を思い出した。そうだ、この前の模擬試験の問題文だ。

ドロシーは銃を気にする様子もなく歩いてくる。相変わらず僕をまっすぐに見据えたままだ……瞳は冷たく透き通っている。僕はグリップを持つ手に力を込めた。

『……人間とは文化を持った生物である。その為生殖の条件は運動能力や身体的な条件のみではなく、経済的能力や、社会的な地位も有効な条件となる……』

ドロシーの歩みは止まらず、僕らの距離はほんの一メートル程度

となつた。この距離だつたら幾ら素人の僕でも外すことはないだろう。

『……また文明の発達に伴う様々な武器の開発は、運動能力のない者でも能力に優れた者に対しても勝つ可能性を高めることになった。そしてそれは銃器の発達によって一層大きくなつてきている……』

ついに僕と彼女との間に残された空間は、手を伸ばせば届くほどのものとなつた。

僕は彼女の視線を感じながらもそれを無視した。僕の視界にはドロシーのほっそりとした下半身のみが見えていた。

「……ひざまずけよ……命乞いをしろ……僕の方が強いんだぞ……」
僕はドロシーの下腹部に銃口を押しつけた。彼女の弾力が銃を通じて伝わってくる。

「それを返して。お願い」

頭の上から穏やかなドロシーの声が聞こえた。

見上げると、そこには穏やかな黒い瞳があつた。

僕は駄々をこねるような気持ちで彼女を見つめていたが、不意に体から力が抜けた。

「…………わかった……返すよ」

僕の手から銃が奪われ、頭の中が真っ白になつた。

テレビの中では、立てこもつた犯人が刑事役の主人公に射殺されていた。

AM・11・25

「出かけようか?」

太ももに銃を縛りつけながら、ドロシーが言つた。

「…………何処へ?」

僕が力なく尋ねると、ドロシーは玄関に干してあつたコートを抱

えて振り返った。

「そうね、とりあえず靴を買いに行こうかなって思つてるんだけどドロシーは踵の取れたサンダルを指でぶら下げて笑い、ドアを開けた。

外はよく晴れており、正面のマンションのクリーム色の壁に陽光が反射して眩しかった。

第一話「彼女の銃と僕のビデオカメラの話」 - 4

PM : 1 : 27

空は高く青く澄み、天上から伸びた白い雲のハンカチが灰色の影をつけながら空を舞っている。

太陽は白い光を放ち、黒く伸びた電線が空を区切つている。高いビルは影絵の背景のように道行く人々の上にそびえ立つている。

「どう？ 似合う？」

歩道橋の上でビデオカメラを構えて取り留めなく風景を撮つていた僕は、声をかけられて振り返った。

そこには、さつき買ったカウボーイハットを被つたドロシーが立っていた。彼女と二人で繁華街までやつて来た僕は、彼女の買い物につき合わされることになつたのだ。

「……君の体質、防犯カメラにも効くんだね」

僕は歩道橋の手すりにもたれかかった。

「さつきのお店、いきなりビデオカメラが故障したから大騒ぎしてたよ……」

「そうだっけ？ 気づかなかつたわ」

「………… そうだろうね」

街に出てきて最初に入った大きな洋服店で、ドロシーは店員の騒ぎにかまうことなく店中の靴を一時間以上かけて物色し、最終的に赤いエナメルのサンダルを購入していた。そして彼女は、展示用に飾られているカウボーイの人形にも目をつけたのだ。

「ほら、やっぱり銃はこうやつてしまふのがいいよね」

ドロシーが戦利品を見せびらかす。それは西部劇でよく見る、腰に巻くタイプの銃のホルダーだった。展示用だつたせいか、ベルトには意味不明な銀の星形の飾りがついている。

今のドロシーを例えて言うなら、さしづめファッションショーカ

ら抜け出してきたカウガールといつたところか。

「いいのかな？ それ展示用だろ？」

「いいのよ、お金は払ったんだし、お店の人だつていって言ってたわ」

「もしかしたら、防犯カメラが壊れたからそつちに気を取られてたんじゃないかな？」

「そうかもね」

ドロシーは楽しげに笑うと、僕の隣で手すりにもたれた。確かにドロシーは金を持っていた。正直な話、あの古いコートのポケットから札束が出てきた時には自分の目を疑つたが。何だつて彼女があんな大金を持つてるんだ？

もつとも、尋ねれば魔法で出したのだと答えそうなので聞くのはやめておいた。

ちなみにコートとヒールの折れたサンダルは店に引き取つてもらった。勝手に置いてきたと言つた方が正しいかもしれない。札束を何処にしまったのかはわからない。

「ところで、何を撮つてたの？」

僕はドロシーに尋ねられて口籠つた。

「……町の風景……かな」
「ふーん……」

ドロシーは頬が触れるかと思うくらいに僕の顔に顔を寄せ、手すりの上に体を乗せて下の方を覗き込んだ。しかし特に撮るべきものが見当たらなかつたのだろう、少し戸惑つたような表情で僕の方を向いた。

「……で、何の辺りを撮つていたわけ？」

ドロシーの横顔に見とれていた僕は慌てて返事をした。

「だからね……」

何が『だから』なのかよくわからないが、僕はインテリ臭く少し気取つて説明を始めた。

これは僕の悪い癖で、人に対して自分の考えを述べる時に何故か

気取った態度をとつてしまつのだ。特に気取るようなことを考えているわけでもないのに。

「……だから、別に風景を撮るからと言つても、山とか海とか……

『特別』な所を撮る必要はないんだ。いつも見慣れているような町の風景でも、光の加減や角度によつてとても綺麗になる瞬間がある。例えば、道端に捨てられた空き缶や、その上を通る人の影なんかでもね」

更に良くないことに、僕は話し慣れていないので、一度話し始めるとき相手の反応を伺うこともせずに話し続けてしまう。少なくとも女の子に対しても絶対にやつてはいけないことだ。

「だから、僕はそんな風景を見つけ出して撮るのが……」

僕はそこで、ドロシーがこちらを向いていないことによつてやく気づき、話を中断した。

ドロシーは手すりに両手をついて町の風景を眺めていた。そして僕の方を振り向くと、目を輝かせて笑つた。

「凄いね。貴方の話を聞いてると、まるで自分が御伽噺の世界にいるみたいな気がしてくる。でも、なかなかそんな風景は見つけられないな」

「……まあ、これは僕の考えだし……人によつて見つけられる物は違うと思うよ」「むう」

ドロシーを飽きさせてしまつたのならばかり思つていた僕は、彼女の真剣な表情に驚いて慌ててつけ足した。

ドロシーが僕の話を聞いていてくれたのは嬉しかつた。何か心の奥底に溜まつっていた物がすつきりとしたような気がする。人に自分の考えを話すだけで心が軽くなるとは驚きだ。

もつとも、話してしまつてから自分の考えが片寄つた頭でつかちなものだといふことに気づいてしまい、かなり恥ずかしい思いもしたが……彼女が喜んでくれたことを考えれば、それも決して悪くない。

「僕は結構、夕方の空を見るのが好きだな。夕焼けの色は毎日違う

し、綺麗な夕焼けに会えるところはとても運のいいことなんだ

「夕焼けか。悪くないわね」

「それと綺麗な女人を見るのも好きだ」

「正直ね」

「……相手によるさ」

僕はドロシーに向かつて微笑んだ。

その時、大学生風の男が歩道橋の上に現れた。
男はタバコをくわえながら、いかにもだるそうに歩いていたが、
僕の方を見ると眠そうな目を開けて声をかけた。

「よお、久し振りだな……どうしてるんだ？」

「…………何だ、斎藤か？」

斎藤は僕の高校時代のクラスメイトで今はこの町の大学に通っている。僕とは特に親密な交流があつたわけではないが、お互いに嫌つていてるわけでもない。

実を言つと、僕は彼が歩道橋の上に現れた時から彼のことに気づいていたが、あえて話しかけようとしなかつた。つまり、無視していたのだ。

Q・理由は？

A・…………言いたくない。

「今はこの町の予備校に通つてる。そんなに勉強はしてないけどね」「僕はできる限り平静を装つて答えたが、斎藤は僕より隣のドロシーの方に注目していた。

ドロシーは僕達の会話に興味はないといった様子で空を眺めていたが、斎藤はドロシーと僕がそれほど深い仲でないのを感じ取つたらしい。

「やあ、どうも、俺、斎藤つて言つんだ。あいつとは高校からの知り合いで……」

僕を無視してドロシーに近づき、馴れ馴れしく声をかける。しかし、ドロシーの返事は素つ気なかつた。

「……アタシはドロシー。よろしく……」

「君、綺麗だね。もしかしてモデルとかやつてる?」

「……やってない」

「やりたいとは思わない? 僕の知り合いに業界の奴がいるんだけど

「……別に」

僕の時と同じだ。まったく会話のきっかけがつかめないでいる。しかし斎藤は僕とは違い、そう簡単に諦める気にはならないらしい。いきなり蚊屋の外だった僕の方に話し始めた。

「しかし、こいつがこんな美人を連れてるなんて意外だなあ。知ってる? こいつ高校の頃は凄く頭が良かつたんだぜ」

斎藤が僕の肩に手を置いた。タバコの嫌な臭いが漂つて来る。

「でも不思議だよなあ、大学は全部滑っちゃったんだろう? 滑り止めも全部ダメだつたんだつけ? あれはどうしてだ? 風邪でもひいてたのか? ……まあ、あれだよなあ、幾ら頭が良くても本番に弱ければダメつてことだよなあ」

どうしてこんな奴にそんなこと言わねなきやいけないんだ?

僕の視線が足下の石で止まってピントがぼけた。目の前が暗くなる感じがする。

「……関係ないだろ!」

僕の腕が振り上げられ、斎藤の腕を振り払つた。自分で出した声の大きさに自分で吃驚する。

斎藤も驚いたようだつたが、口元に軽薄な笑みを浮かべると謝つた。

「悪い悪い、気に触つたか? それはすまなか……」

斎藤の笑みを目にした瞬間、薄暗かつた僕の視界は急速に狭まり真っ白に反転した。そしてまるで誰かが僕の体を操つてゐるかのように、僕の腕が斎藤の襟元に伸び襟をねじり上げた。

頭の中には斎藤に対する言ひようのない殺意があった。でも隅の方にはやけに冷静な部分があり、自分自身の行動を眺めていて……そう、こんなことしても何にもならないことがわかつていた。

斎藤はしばらく軽薄な笑みを浮かべていたが、僕が真剣なことに気づいて表情を変え、僕の腕をねじり上げにかかった。ろくに運動もしていない僕が腕力で敵うはずもなく、あっさりと腕を取られる。途端、顎の骨に鈍い衝撃が走り、頭の中が揺れた。僕は背中から手すりに激突し、倒れ込んだ。

「何いきなりキレてんだよ！ 気持ちワリいなあ！」

斎藤は血走った目で僕を見下ろし吐き捨てた。

「……すまない」

僕は目を伏せて呟いた。頭と体の奥底には、まださつきの衝動が後味悪く残っていたが、痛みのおかげで何とか落ち着けた。

「お腹が減つたな。何か食べに行こうか？」

顔を上げると、ドロシーが近くまで来ていた。

「ああ、それなら俺がいい店を知ってるからそこへ……」

斎藤は僕を無視してドロシーに手を伸ばした。しかしドロシーは軽く斎藤の手を払うと僕の方に手を伸ばした。

「立てる？」

僕は道端の石になつたような気がしていたが、ドロシーに声をかけられて信じられない物を見るように彼女を見上げた。

「なあ、そんな奴にかまつてないで俺と一緒にに行こうって」

斎藤が馴れ馴れしくもドロシーの肩に手をかける。しかし、ドロシーは振り返りもせずに斎藤の手を振り払った。

「……勝手に触るな、気持ち悪い」

ドロシーの台詞に反応して、斎藤は乱暴に彼女の肩に手をかけ強引に自分の方を振り向かせた。血色の悪い顔が大きく歪んでいる。

「何だつて……？ もう一回言つてみろ」

ドロシーは面倒臭そうに髪をかき上げた。

「別に大したことは言つてないわ。アタシは勝手に体に触られるのは嫌いだし、自分の昼食の相手は自分で決める。何か失礼なことを言つたのなら謝るけど。これだけは譲れないわ。ごめんね」

「……！ バカにしやがって！」

齊藤はもう一方の手で彼女の肩を押さえつけた。瞬間、ドロシーの右手が凄い速さで動いた。気がついたとき、ドロシーの右手は人指し指と親指で銃を形作っており、銃口は齊藤の右目の直前で止まつていた。

「言つたはずよ、触られるのは嫌いだつて。一度ならともかく一度目は許さない……目を潰されたくなかつたら失せなさい」

齊藤は凍りついたように立ち尽くしていたが、ドロシーの肩を離してフラフラと後退ると、一目散に歩道橋の上から消えた。

「……やれやれ」

ドロシーは僕の方を振り返り、微笑んだ。

「みつともないとこ見せちゃつたね」

僕は足下を見ながら呟いた。多分、ドロシーは僕のことを軽蔑しだろう。できれば彼女には、こんな自分は知られたくないかったのだが。

「そうね、かなりみつともない」

ドロシーは僕の前に立つて素っ気なく言つた。そして僕の横を通り過ぎながら僕の背を軽く叩いた。

「さあ、行こうか」

「……何処へ？」

一瞬、何を言われたのかわからなかつた僕が驚いて尋ねると、ドロシーもまた不思議そうな顔をし、

「……だから、何か食べに行くのよ」と答えた。

第一話「彼女の銃と僕のピートオカ梅ラの話」 - 5

PM : 2 : 07

「人を殺したいと思ったことはあるかい？」

歩きながら、僕はドロシーに尋ねた。

「殺したこと、じゃなくて？」

ドロシーの返事は、僕の予想を遥かに上回っていた。

週末のせいか人通りが多い。とは言つても、気をつけてさえいれば、まず人にぶつかることはなかつただろう。

しかしドロシーの返事に戸惑っていた僕は、正面から歩いてきたサラリーマン風の中年の男とともにぶつかってしまった。

「あっ、すいません」

「バカ野郎、気をつけろ！」

反射的に謝った僕に対し、中年の男は振り返りもせずに吐き捨てた。僕は去っていく男の背中を見つめながら答えた。

「……ああ、殺したくなつたこと……だ」

「貴方は人を殺したいと思ったことがあるの？」

「あるよ、幾らでもある。ついさっきもそう思つた」

僕はあまり他人に自分の考えを言うタイプではない。しかし、何故だかドロシーには話したくなつた。

彼女なら答えを出してくれそうな気がする。僕が閉じ込められている、この問題に。

「自分でも些細なことだとは思つんだ。誰かが僕の悪口を言つたり、嫌なことをしたり……酷い時には、そいつがそこに『いる』というだけで殺したくなつてしまふ。勿論、僕は本当にやつたりはしないけど……いや、それが可能な状況でさえあれば、僕だって人殺しをするかもしれない」

僕の脳裏に昨夜のおじさんの姿が映つた。

そして、お前も同罪だと呟いたリョウの顔も……。

「嫌ならやめれば？」

ドロシーは車の行き交うスクランブル交差点の前で立ち止まり、斜め向かいのファミリーレストランを見ながら言った。

「僕だつてやめたいよ、だけど止まらないんだ。まるで自分の中に化け物がいるみたいだ……何か嫌なことが起きた瞬間、そいつは僕を支配するんだ。そして僕はそいつに逆らうことができない」

僕はドロシーの横に並び、車の流れを見つめながら呟いた。

「……でも、どうして僕は人を殺したくなるんだろう？」

すると、ドロシーが僕の方を見て言った。

「気持ちいいからよ」

「…………何だつて？」

僕はドロシーの言ったことが理解できずに聞き返した。ドロシーは冷静な顔で続ける。

「怒るつていうのはどうこう行為だと思つ？」

「さあ。何だらう？」

「怒るつていうのは結局、ストレスの解消よ」「ドロシーは車の流れに視線を戻して言った。

「人間は物事がうまくいかなかつた時、自分の欲求が受け入れられなかつた時、それを解消したくて『怒る』のよ。目の前の障害を擊ち破る為にね。幼稚園児のお菓子の取り合いから核戦争まで、争いの原因はほとんど変わらない」

「…………まあ、そういう考え方もあるよね……」

僕の曖昧な反応を気にせずドロシーは続けた。

「怒りに暴力が伴うのは、それがストレスを解消する最も簡単な手段だから。相手と面倒な交渉を続けることなしに権力や腕力で相手が行動できないようにすれば……ねえ、とっても気持ちいいと思わない？」

「…………それがすべてじゃないと思つよ。世の中には、もっとちゃんととした理由で怒っている人だっていると思う」

僕の反論に、ドロシーは物わかりの悪い生徒に向けるような微笑みを浮かべた。僕は最近、人からこういう態度をとられることが多い。

「アタシだつてそう思つ。でも、それは少なくとも貴方のことじやない」

信号が青に変わり、ドロシーは僕を残して歩き出した。

「人殺しは最も簡単な問題の解決法よ。だつて、相手がこの世から消えてなくなるんだもの、面倒な交渉を続けることも相手の要求を飲むこともない……素晴らしいことよね。でも気をつけた方がいいわよ、殺すつてことは問題に対してもう一方で相手に勝つことができないつて自分で認めたようなものだからね」

僕はドロシーに追いついて言った。

「……君はこう言いたいのか？ 僕は現実の問題に対して何もできない人間で、僕は……それを認めたくないから人を殺したくなるんだつて？」

「へえ、頭いいじやない。その通りよ」

ドロシーが振り返りもせずに答える。その声は楽しきだった。
頭の中がカツと熱くなつた。

僕の求めていた答えはこれじやないと思つた。

僕は乱暴にドロシーの肩をつかみ強引に振り向かせようとした……正直、殴つてやろうかとさえ思つた。しかし振り向いたドロシーの手にはいつの間にか銃が握られており、それが僕の眼前に突きつけられた。

瞬間、意識が混乱した。すぐ目の前にいるはずのドロシーの声が、ひどく遠い所から響いてくるようだ。

「アタシはさあ、キリストじやないから人を殺すなとは言わない。殺されそうになつた、レイプされた、本当に大切なものを傷つけられた……これならまだ仕方ないと思えるわよ。でも、貴方には人を殺すだけの理由はないわ。まさか貴方のちっぽけなプライドが『大切な物』だなんて言うつもりはないでしょうね？」

「……君はそう言つけど……僕はそれがないと生きていけないんだ」
喉の奥から絞り出すように、僕は呟いた。

「ちっぽけなプライドでもそれがないと生きていけない。僕は……」

「僕は不幸なんだ……」

僕らの周りを沢山の人達が通り過ぎてゆく。
混乱した頭の中で、どうして誰もドロシーを止めないのだろうと
考えた。白昼堂々、女が道のど真ん中で銃を構えているというのに。
……誰も本物の銃だと思っていないのだ。僕は気がついた。ドロ
シーの格好はまるで撮影中のモデルだし、僕は小型のビデオカメラ
を持っている。多分、みんな何かの撮影カリハーサルだとでも思つ
ているのだろう。

「幸せな国ね。銃を構えても誰も言わない

ドロシーも同じことを考えていたらしく、周りを見回して呟いた。
何故かその声はとても優しかった。不意にドロシーは銃を腰に戻し、
微笑んだ。

「まあ、アタシにも貴方を殺す理由はないし……それに昨日は泊め
てくれたしね。ありがと、礼を言つわ」

そう言うと、ドロシーは僕に背を向けて歩き出した。しばらく突
つ立っていた僕は、ドロシーとは逆を向いて、家の方向に戻ろうと
した。

これでいいんだ。僕は思った。……やっと逃げ出せたのだと。

大体、あの女は半ば強引に僕の世界に入つて來たのだ。そして僕
の一一番見られなくなつた所を暴き立てた。もうこれ以上、あいつ
と関わり合いになる必要なんてない。

僕は横断歩道を渡りきつた。

信号は点滅して赤になりかけている。

その時、振り向いた僕の視界に小さくなつてゆくドロシーの後ろ
姿が飛び込んできた。

今でも、何故あんなことをしたのか自分でもわからない。実際、やつてている途中だつて自分が何をしているのかわからなかつたのだから。

順を追つて話すとこうだ。

僕はいきなり短く舌打ちをすると方向転換して、元来た横断歩道に走り出たのだ。横断歩道は五十メートルくらいの距離があり、信号はとつぐに赤になつていた。そして僕が渡ろうとした道路の車は、信号が青になつたのを見てアクセルを踏んでいた（当然のことだ）……そこに僕が飛び出したのだ。

幸運だつたのは、すべての車のドライバーが僕に気づいてブレーキをかけてくれたことで……僕はこの国の交通マナーの良さに本当に感謝しなければならないと思う。今後、水たまりの泥水を跳ね飛ばされたくらいでは怒つたりなんかしないと、その時誓つたほどだ。話を戻すと、横断歩道に飛び出した僕はブレーキとクラクションの音と誰かが怒鳴る声を完全に無視して走り続け、あらうことか横断歩道に突き出す形で止まつた車（この人も僕の姿を見てブレーキを踏んでくれたのだ！）のボンネットの上を踏み越えて横断歩道を渡り切り、ドロシーの姿を追つて人混みに突っ込んでいった。

僕が今願うことは、その車のボンネットがそれほどへこんでなくて……運転手が僕の顔を覚えていないことだ。
そして、僕はドロシーに追いついた。

「…………何してるの？」

ドロシーは息を切らして歩道に座り込んでいる僕を見て言つた。

「…………言われっぱなしつてのも……僕のプライドが許さないんだ……」

僕はやつと立ち上がると笑いながら言つた。

「それに、せつとき肩に触つて悪かつたね……触られるの、嫌いなんだろう？」これじゃあ斎藤のことを悪く言えないな

「ドロシーは悪戯っぽく笑つて答えた。

「相手によるわよ」

「気がつくと、手にしていたはずのビデオカメラがなくなっていた。走った時にベルトが外れたのだろうか？ 高かったのに……僕は思つたが、不思議と悔しくはなかつた。

「ところで、今思つたんだけど」

「何？」

「僕は不幸なんだ、って台詞は何か変だよね？ ……妙に笑えるな

あ

「ドロシーは僕の顔をまじまじと見つめ、呟いた。

「何だ。本気で言つてたの」

第一話「黄色い煉瓦で造られた交差点の話」 - 1

PM・2・37

昼時を過ぎたせいか、ファミリーレストランの中には少なかつた。

適当な席を探そと店内をざつと見回した僕の耳に、ラジオの洋楽番組の音に混じつて、不意に聞き覚えのある声が聞こえてきた。「ええっと、sinの「乗足す」との「乗は」であつて……」

見ると、窓際の四人掛けの席に一人の少女が座っていた。陽の光に背を向ける形で頬杖をつきながら参考書を読んでおり、短めに揃えられた黒い髪が濃紺のブレザーの上に影を落としている。テーブルの上には何冊かの参考書とコーヒー カップが置いてあつた。

少女は僕の視線に気づいたのか、少し吊り目っぽい大きな目をこちらに向けた。

「あっ、ウソ、先輩じゃないですか！」

「やあ……カナちゃん、久し振り」

僕は女子高生……若松加奈に手を振った。

カナは僕と同じ予備校に通っている、名門私立女子高校の三年生だ。彼女は通っている高校の名前と、それにつり合つだけの姿で有名だった。

実際、彼女の姿はテレビなんかで見る同じ年頃のアイドルやタレントと比べても見劣りしないほどで、色白の肌にかかるストレートの黒い髪と控えめな宝石のよつた瞳……それと薄桃色の小さな唇がとても魅力的な少女だ。

彼女に誘われ、僕はドロシーの同意を得て三人で同席することになつた。

「すごい、美人！ ねえ先輩、この人先輩の彼女ですか？」

カナはドロシーを見て歎声を上げた。

「違うよ、こいつは宇宙人で僕の命を狙つてるんだ」
僕は着席しながら真面目な顔で言つた。

「アハハハハ、そうなんですか？」

戸惑うかと思つたが、カナは笑い出した。普段は落ち着いた子だが、今日は妙にはしゃいでいる。

「そんなところね。よろしく、地球人さん」

ドロシーも席に座つてカナに微笑んだ。もつとも彼女の場合、先にメニューの方に手が伸びていたが。

「宇宙人っていうと、何処から来たんですか？ バルカン？」

「多分、クリンゴンだ」

「……それ、酷いですよ」

僕とカナが交わした会話の響きから、ドロシーは自分がからかわれていることに気づいたらしい。少し怪訝そうな表情でメニューから目線を上げた。

「ああ、クリンゴンっていうのは映画に出てくる宇宙人なんです。
怪物みたいな戦闘民族の……」

カナの説明を聞いて、ドロシーが僕を睨みつける。僕はウェイトレスが運んできたコップに手を伸ばすと、誤魔化すように音をたてて飲んだ。

「……すいません、何か気まずい雰囲気ですね。先輩は私につき合つてくれただけなんですよ」

カナは僕らの様子を見て心配そうに言つた。

「私、トレッキーなんです。ああ、トレッキーっていうのはスター・トレックのファンのことなんんですけどね、でもなかなか詳しい人がいなくて。それで先輩とはよくスタートレックについて話すんですよ」

しばらく説明を続けた後、カナは照れたように笑つてつけ加えた。「個人的にはDS9のシリーズが好きで……あ、シスコ艦長は理想のタイプなんです」

力ナに興味を抱く男は多かつたが、力ナの方は一向にそんな連中には興味を示さなかつた。彼女は本当に気に入つた相手にしか心を開かないタイプだつたからだ。まあ、その態度が却つて彼女のの人気を高めているのだから美少女とは得な生き物だと思う。

しかし、多くの人は彼女が良家の子女だからこのような態度をとるのだと思っているようだが実際には少し違つ。これは僕を含めて数人の人間しか知らないことだが、彼女は非常に変わつた……いやユニークな思考回路を持つているのだ。

「数学の先生がですね……あ、そいつタコみたいなおじさんなんですけどね。明日いきなりテストをするって言つんですね。しかも三角数の！ 私達は文系なのに、まつたく何を考えてるんでしょうね？ あの先生、禿げてて夏なんか頭から湯気出してるんですよ。いつも『暑い、暑い』って、こっちが暑苦しくなっちゃいますよ。それに細かいことばかり注意してネチネチ苛めるんです。私のクラスに髪の毛染めてる人がいるんですけどね、その人なんか可哀想ですよ。あの人未だに髪の毛染めてる奴は不良だーなんて思つてるんですね」

力ナはそこまで一息に喋ると冷めたコーヒーを飲み干した。口調は悪いが、それほど惡意のこもつていらない喋り方で、話をすることを楽しんでいる感じだ。

「髪の色とか服装とかで、人間が悪いかどうかなんてわかるわけないじゃないですか。ねえ、そう思いません？」

「まったくだよ」

僕は力ナに解答を頼まれた数学の問題に目を通していた。問題自体は簡単なものだったが、僕は参考書を見つめながら別のことを考えていた。

「……で、どうなの？ 仕事の方はうまくいってる？」

僕の言葉に、力ナの目がスッと細くなつた。

「……ま、ボチボチですね」

僕達の雰囲気が変わつたので、ドロシーが不思議そうな顔をして

力ナと僕を見つめた。

力ナは小悪魔のような目でドロシーを見ると、隣の椅子に置いてあつた鞄を持ち上げてテーブルの上に置いた。

一見すると普通の通学用鞄だが、よく見てみれば素人目にも相当に高価なものだということがわかる。力ナは鞄の蓋を開けると、表紙に『K&K』と書かれた分厚いファイルを取り出した。

ファイルには、よく集めたなと思うくらいにスタートレックのシールが貼られており、中にはびっしりと細かい文字が並んでいた。「今週は月曜日と水曜日に一人ずつ、木曜日にがんばって三人……」この日は学校が創立記念でお休みだったんですよ。それから何と今日の午前中に一人！ 私つて本当によく働いてますよね」

「……大したものだよ」

僕が思つたままに呟くと、

「そんなこと言つてくれるのは先輩だけですよ…………」

力ナはファイルを眺めながら呟いた。

ドロシーは横からファイルを眺めていたが、どうやらその内容に気づいたらしい。

「……売春……か」

力ナはファイルを閉じると、花がほころぶように微笑んだ。

「ビジネスです」

PM : 2 : 45

「最近は法律ができちゃつて、仕事がしにくいんですよ。おじさん達も怖がつてるんですね……それで友達に頼んでネットでお客さんを探してます。まあ、その分お金の払いはいいから、こつちは楽なんんですけどね」

料理が運ばれて來たので一時中断した話は力ナによつて再開された。力ナは僕達と一緒に頼んだケーキをフォークで壊しながら話を続けた。先程の彼女の台詞ではないが、その口調は有能な実業家の

ようだ。

「知り合いには大きな組織に後ろ楯をしてもらつて集団でやつてる子もいるんですけど。やっぱり恐いですからね、そういうの。でも、個人でやるのも大変なんです」

「何か企業努力でもしてるのかい？」

僕は運ばれてきた定食を申し訳程度に口に運びながら尋ねた。今日は朝食も抜いたし運動もしたので珍しく空腹だったのだが、カナの話を聞いていると食欲がなくなつてくる。

僕の隣では同じ定食を一つ注文したドロシーが平然と食べている。多分、このペースでいけば僕より早く食べ終わるだろう。

……一体どういう胃袋をしてるんだか。

「そうですね。やっぱり、他よりサービスがいいんじゃないですか？ 色々と……ね。でも、同じ相手とは何回もしません。愛人とかそういうのは嫌いなんです。あ、そうだ先輩、この制服どうですか？ 専門店で買って来たんですけど、やっぱり男の人の意見も聞かなきやいけないとと思うんですよ。おじさん達は可愛いって言つてくれたんですけど、あんまりアテになりませんからね」

道理でいつも制服が違うと思つた。

「そうだな……うん」

僕は返事に困つて何気なく呟いた。

「君は凄いね……いつもそう思つよ。でも」

「でも。何ですか？」

瞳を覗き込むように尋ねられ、僕は自分でもよくわからない返事をした。

「……僕は、女の子は砂糖とスパイスができると思つてたよ」

えつと、これは何だつたつけ？

……そうだ、確かにマザーグースの歌の一節だつたよつな気がする。まずいな、嫌味だと思われるかもしねない。

しかしどういうわけか、カナは虚ろな目をして呟いた。

「……私も、そう思つてました。やっぱり先輩も、青春なんかして

る子は変な子だと思いますか？」

「いや、別にそうは思つてないよ。ただ、一歩間違つと危険な仕事だし……君の体のことも気をつけないと」

「体にはちゃんと気をつけてます！ 避妊だつて完璧だし、エイズだつて、ちゃんとチェックしてます！」

力ナは強い口調で反論した。大きな目が更に見開かれ、色白の肌に赤みがさす。力ナは一瞬息を止めると白い糸きり歯を噛み合わせた。

「私の体は私の物です。どうしようと私の勝手じゃないですか！」

力ナの声がどんどん大きくなる。まるでこらえていた感情が爆発したように。今までの力ナがとても明るい態度だったのと、僕は余計に驚いた。

「それとも何ですか？ 将来の結婚相手の為に綺麗な体でいろいろと言ふんですか？ 僕はお前を愛しているから他の男と寝るのは許さない？ それって変だと思いません？ 愛つていうのは恋人の体を所有することですか？ それは私の体を買うのとどう違うんです？ 私の体は私の物です、親の物でも恋人の物でもありません。どう使おうと勝手じゃないですか！」

力ナは凄まじい勢いで捲し立てる。力尽きたようにうなだれた。店内の他の客や従業員が、僕の方を盗み見ながら何事が囁きあつてている。

「……何かあつたのかい？」

僕は可能な限り穏やかに尋ねた。普段の彼女はこんなに感情を表に出す方ではない、どちらかと言うと感情を隠す方だ……こんな彼女は初めて見る。

力ナは不意に顔を持ち上げると唇を歪めた。

「今朝の客がですね、こう言つたんですよ。身体を売るなんて最低だ、お前みたいな奴がいるからこの国は悪くなつたんだ、つて……お前なんか死んじまえって」

力ナはしばらく口を噤んだ後、再び唇を歪めて笑顔を作り、強い

口調で吐き捨てた。

「こんな朝早くから女子高生を買つてる奴に言われたくはないですね！」

それから力ナは僕の隣に視線を向け、ドロシーに尋ねた。

「……ねえ、貴女はどう思いますか？」

ドロシーは一旦食事の手を休め、箸を口元に寄せて「こんな」とを言つた。

「貴女はどうして売春をしているの？」

「……お金……かな？」

少し考えてから、力ナが答える。ドロシーは納得したような表情を見せると、再び定食に箸を伸ばした。

「金儲けの為だつたら、密に何を言われても我慢しなさい。それがビジネスつてものよ。もつとも、自分には売春婦としてのプライドがあるつて言うんだつたら話は別だけどね」

力ナは少し口籠つたが、しばらくして微笑んだ。

「……そうですね、私も甘いこと言つてましたね」

力ナはため息混じりに呟いた。

「でもね、お金だけじゃないんですよ。私、夢があるんですよ」

「初めて聞くなあ。何なの？」

僕の問いに、力ナはいつもの笑顔に戻つて答えた。

「笑わないで下さいね、私、エンタープライス号に乗りたいんですよ」

力ナは不覚にも少し笑い声をもらしてしまつた僕を軽く睨むと、テーブルの上の参考書を指で叩いた。

「人生で大切なことって何だと思いますか？ 数学の問題を解くこと？ いい学校に進むこと？ それとも結婚して家庭に入つて専業主婦になつて、子供を生んでオバサンになつて夫の我慢に耐えること？ 「冗談じゃないですよ」

力ナはしつかりとした口調で続けた。

「私、思うんですよ。折角の人生なんだから、自分の好きなように

生きてみたいって。女だからとかそういうんじゃなくて、自分の能力で何処まで行けるか試してみたいじゃないですか。私、高校を卒業したら家を出て、貯めたお金で海外に行こうと思つてるんです。それで今、英語を勉強してるんです

「それは凄いなあ」

僕は本心から呟いた。

力ナは薄く微笑むと遠い目をして呟いた。

「でもやつぱり、理想の職場はエンタープライス号だな。だつて、地球の危機が救えるんですよ？　あーあ、あれに乗れるなら私、物理だつて勉強するのに」

一つ目の定食をほぼ食べ終わつたドロシーは、そんな力ナを見て微笑んだ。

「いい夢を持つてゐるわね。でも、それだつたら売春はやめておきなさい」

「どうしてですか？」

「女を買つようなバカと一緒にいるとせつかくの夢が汚れるわ。大丈夫、急がなくても貴女はちゃんと成長できる。バカな男の金なんか貴女の夢には必要ないわ……そうでしょ？」

「……そうでしょうか？」

力ナは少し考え込んでいたが、やがて瞳を輝かせて言つた。
「そうですね！」

PM・3・28

「……さつき言いかけたことだけじで……」

「何でしたっけ？　さつきの話つて？」

力ナは僕のそばに寄ると首をかしげた。

僕達は遅い昼食を終えてレストランを出でいた。ドロシーは少し離れたガードレールの上に座つてゐる。

「ほら、さつき、君が変だと思うか？　つて聞いて僕が答えた時の

「ことだよ」

「……ああ、体に気をつけろってやつですか？あの時はすいません、私、ついカツとなつて……」

「いや、それはいいんだ。で、あの時言おうとしたのは健康のことじゃなくてさ、君自身のことなんだよ」

「……私自身のこと？」

「そう、君のこと。僕はさ、君のことは本当に強いし頭もいい子だと思うよ。社会に出ても絶対に成功すると思う……だからこそ、青春はやめた方がいいと思うんだ。だつて勿体ないじゃないか。もし何かあつたらどうする？君が今朝会つたつていう男もそうだけど、世の中には君が考えている以上に変な男がいっぱいいるんだ。そういう連中は、君が体を売つているバカな女だと思つて何をしてもいいと考えてるんだよ。もし殺されでもしたら取り返しのつかないことになる。だから、悪いことは言わない、今は安全な仕事をした方がいいよ」

カナは途切れ途切れに呟いた僕の言葉を真剣に聞いていたが、ふとこう尋ねた。

「私……ちゃんと立派な大人になれるかな？」
「どうしてなれないって思うんだい？」

「…………」

「大丈夫、僕がカーク船長だつたら絶対に君をスカウトするよ」
カナは僕の言葉に微笑み、それから少し悲しそうな瞳で僕を見つめた。

「先輩の言葉はアテになりません。私、先輩がリョウさん達正在いる」と知ってるんですよ」

「…………」

カナは体を寄せてきた。彼女の黒髪が僕の胸に当たり、暖かな体温が伝わってくる。

「……私、先輩のこと心配です。先輩は人には優しいけど、自分のことなんかで縛つてはいるようで……私、さつきの先輩の言葉は先輩

自身に一番必要なことだと思います。何て言つか……先輩はもっと我僕になつてもいいと思うんです

「そう言つと、カナはパツと僕から離れて微笑んだ。

「御忠告ありがとうございます、先輩！ 私、もう売春はやめます！」

カナは『売春』という言葉が誰かに聞かれてはいけないと慌てて周りを見回す僕を見て、本当に可笑しそうに笑つた。

「ねえ先輩？ 私がもしエンタープライス号に乗ることになつたら、先輩も一緒に来てくれますか？」

僕の心中に甘いピンク色の光が射した。……彼女と僕と一緒に行くつて？

だが僕の答えは、最初から決まつていた。

「……僕にそんな資格はないよ……」

カナは一瞬寂しそうな顔をしたが、すぐに元の表情に戻つた。

「先輩、今日はスケアクロウでパーティーがあるんですよね。私も行きますから待つて下さいね」

そう言つと、カナは用事があるとかで去つていった。

PM・3・36

「…………うん…………そつの、やめるの…………こら辺が引き際かなつて思つてさ。うん…………ありがと、いきなり言つてごめんね。…………ううん、そんなことないよ。ねえ、今度遊びに行こうね、クミも部屋に閉じ籠つてちゃダメだよ。…………そうだ、さつき先輩に会つたよ。ほら予備校でいつも窓際に座つてる人…………そうそう、結構カッコイイ人…………えっ？ リョウさんつて…………やめときなさいよ、クミはヤバい男ばかり好きになるんだから。だから拒食症になんかなるんだよ。…………アハハ、ゴメンゴメン…………でもさあ、今思つたんだけど、リョウさんと先輩つて似てるよね。…………うーん、そうだなあ」

歩道を歩きながら携帯電話をかけていたカナは、足を止めて空を

見上げた。おぼろげにオレンジがかり、薄く雲がたなびいている。

「……うん、目が似てるかな？ 二人とも寂しそうな目をしてるね。まるで檻に閉じ込められた野生の獣みたいに……」

その時、力ナの背後から金属音が響き、赤い空き缶がすぐ脇を転がつていった。

振り返ると、少し離れた所に一人の女がいた。二人は力ナを睨んでいたようだつたが、やがて走り去つた。

「…………何、あれ？」

力ナはしばし携帯からのクミの声に答えるのも忘れて立ち尽くした。

そしてそれから、全然関係ないがスケアクロウにはこの前買ったセーターを着て行こうと思つた。

第一話「黄色い煉瓦で造られた交差点の話」 - 2

PM・3・13

銀色のレバーをサードに入れて、リョウはアクセルを踏み込んだ。マスタングのメタリックボディが咆哮を上げ、命令に忠実に加速する。血のような深紅の車体は夕陽を浴びて更に毒々しく輝き、マスタングは制限速度も振り切つて前を走る標的達に襲いかかる。

「す」「ーい、カツコイイ！」

交差点に差しかかっていたマスタングが流れるような動きで前を走っていたBMWを追い越したのを見て、後部座席の右側に座っていた女が感嘆の声を上げた。

「本当！ さっきのBMW、交差点でおたおたしてると、下手なにあんなの乗り回すからだよね」

「言えるー！ それに見た？ 助手席に座つてた女、センス悪かつたよねえ。ねえ、リョウもそう思うでしょ？」

左側に座っていた女が相槌を打ち、運転席のリョウに尋ねる。

「……ああ、お前達の方が上だよ」

リョウは少しスピードを落とすと、バックミラーに映つた一人の女の姿を見た。

リョウは昨夜と同じ黒いコートを纏い、耳には逆十字のピアスをつけていた。車内が暑いせいかコートの襟元は大きく開かれ、窓の隙間から吹き込む風を受けて銀のピアスと共に揺れている。

後部座席に座っている女達の名前はアリカとアイカと言って、リョウが大学で声をかけた二人だ。あまり大学に行かないリョウが二人に目をつけたのは、二人が大学内でもかなり目立つ存在だったからだ。

ハンドルを軽く叩きながら、リョウは一人に尋ねた。

「……ところでさあ、前から聞こうと思つてたんだけど、どうして

「人は同じ格好をしてるんだ？」

「人の服装はまったく同じだった。

二人はまったく同じタイトなTシャツと厚手のジャケット、ピンクのジーンズを身につけ、同じ派手な赤のスニーカーを履いていた。襟元と袖に黒いラインの入っている白のTシャツの胸部にはまったく同じ『A』の文字がプリントされ、胸の形まで……おそらくは最新の下着の効果によつて……同じだった。

髪型も二人は同じように髪を括り上げ、同じように染めていた。元々顔立ちが似ているせいもあるのだろうが、二人の顔は精巧な化粧法によつて見分けがつかないほどに似通つていた。

数少ない相違点はアリカが右側の耳にハート型のピアスをつけ、アイカが左の耳にダイヤ型のピアスをつけていること、アリカの方が若干丸顔なくらいだろうか？ 正直、昨夜共に過ごしたリョウにだつて二人の違いを五つ以上見分けることは不可能だつた。

「それはね、リョウ」

アリカがリョウの質問に答えようとすると、アイカがアリカの頬に自分の頬をすり寄せた。

「「私達が親友だからだよ」」

二人の声が重なり、そして同時に笑い出した。

「私ね、初めてアリカちゃんに大学で会つた時、すっごく自分とそつくりで吃驚したの。そうしたらアリカちゃんも同じことを考えてたのね」

「それに一人で話してみるとね、趣味とか好きな物とかも同じだったのよね」

「勿論、男の子の趣味もね」

「ううう、でね、私達は思つたわけよ。私達は親友になる為に生まれてきて、そして出会つたんだつて」

「だから私達は同じ格好をして同じことを体験することにしたの」

「……同じ体験？」

リョウが尋ねると、アイカとアリカは交互に喋り始めた。まるで

「羽の鳥がさえずつているようだ。

「そう、同じ体験。私達は同じ服を着て同じ部屋に住むの」「そして同じ景色を見て同じ物を食べるのよ」

「勿論バイトも一緒、講義も一緒」

「ノートなんか半分書けばいいのよ」

「そう、そして男とつき合う時も一緒よ」

「やっぱりいい男は共有しなきや、一人占めは良くないわ」

「そうすれば男を取り合つることもないしね」

「男は困らないのか？」

リョウの問いに二人はクスクス笑つて答えた。

「確かに最初はみんな戸惑うみたいね、でも結局みんな嫌な顔はないわ」

「だつて二人の女の子と何の問題もなくつき合つなんて滅多にできる」とじやないもの」

「二人の女の子と同時にやれるなんて尚更よ」

「ただしデート代も一倍かかるけどね……あ、でもリョウは別よ」

「そうそう、私達リョウの為なら何でもするからね」

「……それは嬉しいな」

リョウはハンドルで軽くリズムをとりながら笑つた。

「でもさあ、まったく同じなんて疲れないか？ 緊張友達でもさ」

「「そんなことないよ～」」

二人は言つた。

「私達は友達なのよ、同じ物を共有するのは当然よ。私達は完全に平等なの、だから他の友達みたいに出し抜かれることも裏切られることも喧嘩することもないわ」

「私達は本当の友達なのよ」

アリカとアイカは手を握り合つて顔を寄せている。リョウは一人の様子をバツクミラーで眺めていたが、不意に口元を歪ませた。

「……でも俺としてはアイカちゃんの方が好みだな」

リョウの言葉に、アリカは瞬時にアイカの手を突き放した。

しかしアイカはアリカにかまうことなくリョウに問いただしていた。

「ねえリョウ、それ本当?」

「ああ本当だ、アイカちゃんの方が可愛いよ」「やつた~！」

「アイカ！ 貴女私を裏切る気!？」

アリカが悔しそうに叫ぶ。しかしアイカは平然と答えた。
「いいじゃないアリカ、これはリョウが言つてのことなのよ。それに私知ってるんだからね、アリカがバイトの客と寝たの。あれ私が粗つて狙つてたんだから!」

「それとこれは話が別よ！」

「それにこの前の試験はアリカの方が成績良かつたじゃない！」

「あれは当てずっぽうで書いたものがたまたま正解だったのよ！」

同じ答案なんてできるわけないでしょ!？」

「知らないわ、そんなこと。おかげで来年もう一度取らなきゃいけなくなつたじゃない。どうしてくれれるのよ!」

「友達ねえ……」「友達ねえ……」

リョウは咳き、夕陽に照らされて金色に輝く窓辺の日よけを動かしながら考えた。

「そうか、あっちがアイカだったのか……見分けがつくのはいいことだな」

リョウは後部座席で口論を続ける二人を無視して車を走らせた。洪水のように降り注ぐ西口の中を紅のマスタングが突き抜けてゆく。

「……友達……か……」

リョウはもう一度咳いた。

その瞳は何処か遠くを見つめていた。

「ねえ、あれ若松じゃない? ……ほら

PM・3・30

信号で停車した時に、突然アイカが窓の外を指差した。

しばらく冷戦状態で黙りこくれていたアリカも、アイカにつられて窓の外を見た。

確かに、道路の向こう側にカナがいる。

「ホントだ、若松だ」

「……若松って、若松加奈か？」

赤信号に苛立つていたリョウは振り返らずに言った。

「そう、体売りまくつてる高校生。知ってる？　あいつヤクザの愛

人だつて噂だよ。それでヤクを買う為に金を稼いでるんだって」

「ううう、でもつて病気持ちなんだって」

「へえ、それは凄いな」

リョウはいつの間にか口を合わせてカナの悪口を言つてゐる一人にうんざりしながら呟いた。実際のところ、リョウは一人よりもカナについてよく知つてゐるし……実は数少ない氣に入つてゐる者の一人でもあつた。

「確かに、あいつと仲が良かつたよな？」

「若松つてさあ、ちょっと可愛いからつて調子に乗り過ぎなんだよね。何かこっちを見下してゐるような態度とるしさあ」

「ううう、自分は汚いオヤジ達と寝てるくせにね」

「でも今日は若い人連れてるね。私達と同じ年くらいかな。私だったら売春してる奴となんか絶対つき合わないなあ。リョウもそう思うでしょ？」

「あ、でもあれって確かにリョウの……」

リョウは何気なくカナの方を見、そしてその隣の人物に気づいた。

「あいつ……」

「あの人、確かにリョウの仲間でしょ？　言つといた方がいいよ、あんな女とはつき合わない方がいいって」

「ううう、あんな性格の女は最悪よ」

「…………お前達のほうがよっぽど最悪だと思つけどな」

「え？　リョウ、何て言ったの？」

リョウは前方に顔を戻すと、冷ややかに言った。

「降りろ、お前達」

「降りろって……！」

「嘘でしょ？ 今日は一緒にスケアクロウに行くって……」「一人は必死にリョウの機嫌を直そうとしたが、リョウの態度は変わらなかつた。

「用事を思い出した。それからお前達はスケアクロウに来るな

「な、何で？！」

アリカとアイカが声を揃えて悲鳴を上げる。しかしそれがリョウの神経を逆撫でした。

リョウは振り返ると殺氣立つた目で一人を見んだ。

「降りろと言つたら降りるんだ！」

「何なの？」

「どうして？」

道路に取り残された二人は、走り去つてゆくマスタングを見送りながら呆然と立ち尽くした。向こうを見るとカナが男と別れて歩いていく。

「あいつのせいだ

「そうだよ絶対。だつてリョウはあいつの話をしたら急に怒り出したんだもの」

「…………」

「どうしてやううか？」

アイカの言葉に、アリカは近くに落ちていた空き缶を拾つた。

リョウはアクセルを踏んだ。

更なる力を得たマスタングは加速し続け、街はその形を留めることがなく後方へと消え去つた。

制限速度の標識も、道路案内の掲示も信号も、周囲の車も全て消えていく。

「……畜生、何処なんだこには……」

PM・4・46

『生物の種と言つと常に不变的な物であるように思われるかもしないが、実は生物を分類するということはなかなかに難しいことなのである。

第一に生物とは何かと考へると、生物とは自分の固有の情報（例えばDNA・RNAなど）を持ち、それを分裂や生殖などの方法によつて永久に残していこうとする物質の化合物であり、この点で他の唯一の元素からなる鉱物などの物質とは異なるのである。

つまり生物とは、どういうわけかは知らないが、地球上に誕生した科学物質の結合したものが自分を永遠の存在としようと思いつたものなのである。であるから生物の特徴とは動くことでも知能を持つことでもなく、自分の情報を残そうとすることなのである。

この考え方を用いれば、動物、植物、細菌、更にはタンパク質のかけらとRNAしか持たないウイルスでさえ同じ『生物』という仲間と言える。更に地球上の生物は一つの大きな系統樹にそつて結びつけることができ、その構造も多少の違い……例えばDNA等の情報物質が核によって包まれていないと、酸素呼吸をしないとか……はあれ、基本的に自身の情報を伝える器官とその情報に従つて体を構築・維持する組織で構成される点では変わりがない。もつともウイルスは情報のみの存在であり、体を作る器官を持たない点で異常だが、これはウイルスがある種の生物のDNA等が他の器官から分離した後に独自に活動し始めた物であると考へればよいだりつ』

「あの子……カナちゃんだけ？ 可愛い子だつたじやない。どうして拒絶するの？」

「別にいいだろ、そんなこと……それに、どうして君は踊ってるんだよ？」

カナと別れてから、僕らは近くの本屋に入った。特に理由があつたわけじゃないが、僕は目につけた生物についての本を読んでいた。店内には軽快なファンクギターとビートが響いていた。暇だったのか、ドロシーはラジオから流れている曲のリズムに合わせて踊っていた。

「いいじゃない、踊りたいから踊ってるのよ。それにパーティ・スマスは本屋で踊つて親友のレニー・ケイと出合つたのよ。知つてる？」

「……知らないよ（誰だよそれは……）」

「こっちの質問にも答えなさいよ。あの子はいい子じゃない、しかもどういうわけか貴方に好意まで持つてる。アタシが貴方だつたら即ホテルに連れ込むわよ？　あ、これ全米フェミニスト団体には内緒ね。脱退させられちゃうわ」

「…………（入つてるのか？）」

僕はドロシーの質問を無視して本の続きを読み始めた。

『一般的には生物においての種とは互いに交配可能な生物の集団である。原始の海で誕生して以来、生物は様々な形態（植物、動物、菌類etc.・・・それはつまり生物の情報のバリエーションである）をとつてきたが、種とは同じ情報を伝える為の仲間であり、その団結は仲間内から突然変異、もしくは他の要因によつて交配不可能な個体が誕生するまで続くことになる。

しかし、ここに別の意味の『種』を持つ動物がいる。それは人間による文化的な『種』である。例を挙げてみると、黒人と白人は肌のメラニン色素量の差に代表されるわずかな差しか違いのない、同一の『ヒト』と言つ種である。大袈裟に言つても互いに地方種の一つであり、交配も可能である。しかし長い期間、白人と黒人は同じ人間種であると思われていなかつた。これは何故か？

もう一つ例を挙げると、同じ人種であり外見上の違いがまったく

ない一つのグループでも、例えば一方がキリスト教のグループであり、もう一方がイスラム教のグループである場合、互いをまるで人間でないよう扱うことがある。この場合、互いを同じ人間だと思わない理由は内包する情報物質の違いではなく、互いの持つ文化の違いである。

人間は地球上で初めて知能を持ち、文化を持った生物である。そして人間はまた、地球上で初めて遺伝情報以外の要因による種の分類をした極めて珍しい生物なのだ。

その場合の分類要因は個体群の持つ文化や生活習慣であり、つまり異なる文化を持つ個体群は互いをまるで別種の生物のように考えるのである。冷静に考えてみたまえ、頭に羽飾りをしていて色が黒くて生で魚を食べているからと言って殺す必要が何処にある？

最後に私がフリー・セックス主義者でもヒッピーでもないことを言つておいてこの章を締めくくりたいと思つ』

僕は本を本棚に戻した。

読みながら考えたことがある。人間の分類は宗教や言語などの大きな文化の違いだけではなく、ほんの些細な違いによつても起ころのではないから。例えば好きな野球チームの違いや服の好みの違いによつても、人はまるで別の生物のように扱われることがある。

特にこの国では、些細な嗜好の違いによつて小さなグループが形成される。そしてそのようにして形成されたグループは、残念ながら相容れないことが多いようだ。偏差値の違いによつても人間は分類されるし、運動能力の違いによつても、体格の違いによつても分類は起こる。ファッションの知識、会話の巧みさ、女性におけるほんのわずかな頭部の形や体脂肪率の差……最後のことに関しては僕も反省すべきだ。

当然、僕自身も社会的に分類されてしまつている。さしづめ僕の社会的分類は『浪人生、しかもやる気なし』そして街での分類は『リヨウのグループのメンバー』だ。それ以外の何者でもない……そ

の分類からは逃れられない。

いつの間にか、僕の後ろではドロシーが踊りながら歌詞を口ずさんでいた。スタイルの良さと動作の派手さが相まって、まるでシップシーの踊り子のようだ。

「何で無反応なのよ、人がせっかく踊ってるのに」

ドロシーは何故か慌てて拍手を始めた近くのサラリーマンの方に手を振ると、次に流れ始めた曲に合わせてリズムをとりながら僕のそばに来た。

「じゃあ、踊らなくたっていいだろ?」

「それじゃあ生きて面白くないじゃない。人生は楽しまなきゃ」

「それは嫌味かい?」

「勿論」

僕がため息をついて視線を反らすと、ドロシーはステップを踏みながら呟いた。

「まあ、別にアタシが口出しすることじやないとは思うけどさ……何て言つか、貴方は妙なことで心を開かせているような気がするから……あ、気に触つたらこめんね」

相変わらずこの女は嫌なところばかり突いてくる。僕は本棚に額を当てるごとに横目でドロシーを見た。……我ながら情けない目をしていると思う。

「僕は誰かを愛したりなんかしないよ……」

「本当?」

ドロシーは僕の目を見ながら尋ねた。僕は彼女の瞳を避けるように視線をずらした。

「そうだよ、僕には誰かなんて必要ない……僕は一人で生きていける。僕に恋愛なんて必要ないよ」

「……それって本当?」

「しつこいなあ!」

僕は乱暴な動作で向き直るとドロシーを睨みつけた。背にした鞄が反動で本棚に当たる。ドロシーは僕の態度に動じたようでは見え

なかつたが、踊るのをやめて静かに僕を見つめた。

「……そういう視線はやめてくれ……僕のことを変な奴だと思つて
るのか？」

「別に。ただ……」

「何だよ」

ドロシーは軽く息を吐くと呟いた。

「……そういうことは泣きそうな目をして言わない方がいいわよ」

僕は全身の血が沸騰したような感覚に襲われた。

その後のことはよく覚えていない。僕の両手がドロシーの首をつかんだと思った瞬間、鳩尾の辺りに衝撃を受けて目の前が真っ暗になつた。

最後に見たものは、ルビーのように色鮮やかなサンダルだった。整理して考えると、僕はドロシーに鳩尾を殴られて氣絶したらしい。そして彼女は、一人で僕を本屋から運び出したのだ。これでも五十五キロは体重があるのに。

ちなみにこれは後から聞いた話だが、一連の様子を見ていた本屋の店員は、

「……失礼ですが、店内で大声を上げないでいただけますか？」
と言つたらしい。

テレビの評論家ではないが、僕はそれではこの国はダメだと思う。

第一話「黄色い煉瓦で造られた交差点の話」 - 3

PM・5・27

「俺の家に裏庭があつてさあ、小さい頃、いつも遊んでたんだ。庭は広くて周りには高い塀があつた。木も何本も生えていてさ、俺はそれに登つて外の景色を眺めるのが好きだつたよ。小さい頃は人見知りの激しい性格でな、いつも一人で遊んでた……変なガキだつたかもな。

それが不思議だよな。俺が大きくなるのに従つて、庭が小さくなつていくんだ。本当だぜ、だんだん小さくなつていくんだ。昔は塀まで走つてもなかなか着かないような気がしたけど、今じゃほんの数歩で辿り着いちまう。昔は大きく見えた木も池も、すっかり縮んじまつてる……こないだ久し振りに帰つてみて驚いたよ。あの塀つてこんなに低かつたんだな、つてや。

お袋は相変わらず木に水をやつていた。……何となく、お袋も縮んだような気がする。親父もそうだ、昔はもっと大きかつたような気がするのに……どうしてなのかな?」

リョウはタバコの煙を吐き出した。煙は白い布のようにな中にたなびき、目に見えない微細な纖維が風に吹かれて解けてゆく。

「それってさあ、やっぱり土地の値段が上がつたからじゃないか?」
リョウの隣で話を聞いていたジンは、タバコの箱を開きながら言った。

「俺の親も家を買い替えたけど金がないって言つてたな。とにかく狭くつてさ、いつも雨漏りするんだ。まったく貧乏臭くつて嫌になるよな。いつまでも汚い家に住みやがつて……リョウ、聞いてる?

「…………聞いてるよ」

リョウは道路の脇に止めてあるマスタングにもたれた。吐き出さ

れたタバコの煙が風に乗つてジンの顔にかかる。ジンが咳き込むと、リョウは顔を背けたまま軽く笑つた。

「リョウ、今日はどうしたんだよ。女を連れてくるって言つてたのに連れてこないし、妙に不機嫌だし……何か嫌なことでもあつたのかよ」

途端、リョウの雰囲気が変わった。

相変わらず道路の方を向いているので表情は見えないが、リョウの無言の圧力を感じ取り、ジンはそれ以上話すのをやめて取り出したタバコを箱の中に戻した。

その時、二人の前に三人の男が現れた。年頃はリョウ達と同程度で、いずれも髪を派手な色に染めている。男達は車の周りを取り囲み、二人を見みつけていた。

「……誰だっけ、こいつら？」

リョウの問いに、ジンが慌てて返事をする。

「知らないのか？ こいつらが俺達の縄張りを荒らしてん奴らだよ。この前言つたじゃないか！」

「……そうだっけか？」

リョウはジンの説明を聞きながら男達を眺めた。

すると、三人の中から体格のいい男が歩み出てリョウの近くにやつてきた。

男はリョウよりも背が低く、よく鍛えられて引き締まつた体をしていた。典型的なラップグルー卜のような服装に身を包み、絶えず薄く開かれた厚い唇の間から、金色の犬歯が覗いている。

「いい車だな、神野？」

男はマスキングの車体を軽く叩いた。男の拳には銀色の大きなナックルが填められており、表面に『POWER・ORDER』と彫られている。

男は拳を車体に押しつけ、そのまま横に滑らせた。ナックルと車体が嫌な音をたてる。男は厚い唇に薄笑いを浮かべて話し始めた。

「お前がこの街のリーダーなんだってな？ だがそれも今までだ。

これからは俺達、Killer-Beeがこの街を仕切る。わかつた……ギャツ！？

「おつと、悪い悪い。もしかしたらその顎が燃えるんじゃないかと思つてな……確かに、脂肪つて燃えるんだろ？」

リョウは面白そうに笑うと、顎を押さえて呻いている男の前にタバコの吸い殻を投げ捨てた。

「て……つめえつ！」

男が血走った目でリョウを睨みつけ、残りの一人も左右に別れて身構える。

「ジン。お前の言つ通り、土地の値上がりが原因かもしねないな」リョウは右耳のピアスを指で弾き鳴らした。

PM・？？？

夢を見た。

夢の中で、僕は大きな車の後部座席に座っていた。

車内は薄暗く、小さな室内灯に照らされて、シートの赤い色がからづじて見分けられる。

外には雨が降つており、窓についた水滴が光を閉じ込めながら次々とガラスを横切つていく。水滴の角度から考えるとかなりのスピードで走っているはずなのに、エンジンの振動はほとんど感じない。窓ガラスに側頭部を押しつけると、表面についた水滴が髪に染み込み、ひんやりとした感触が伝わってきた。

「……この車は何処に行くんだろう？」

僕は外を眺めながら呟いた。

すると、窓の外に遊園地の風景が現れた。美しくライトアップされたアトラクションの数々が、雨の夜空の下で騒がしく動いている。

「何処にも行きはないよ

突然の声に振り返ると、僕の他には誰も乗っていないと思つていた後部座席に一人の男が座っていた。

夢の中だからだろうか？ 男の位置がひどく遠くに見える。顔も服装もよく見えないが、体格は僕と同じくらいだろうか。

「……どうじうことだ？」

僕は体を起こして声をかけた。

「簡単な話さ」

男は話し始めた。この声……何処かで聞いたような気がする。「この車には運転手がない。それにハンドルは少し左にきつたままで固定してある。だからいつまでも同じ所をグルグルと回つているだけだ。この車は何処にも行かない……いや、行けないのさ。簡単な理屈だろ？」

「危なくないのか？ 運転手がいないなんて」

どうも落ち着かない。相手の表情が見えないせいか？

「危ないことなんか何もない。この車は誰ともぶつからない、誰も乗せることはない、誰に傷つけられることもない……そして何処にも着かない。いい車だ」

男は笑つたようだつた。声はしないが、シルエットが少し揺れている。

「本当にいい車だ。ここは居心地がいい……一生こいつしているのも悪くはないな」

「……冗談じやない、これから下ろしてくれ」

男の不自然に陽気な態度が僕の不安を増長させる。男は嘲るような口調で言つた。

「そんなこと少しも思っちゃいないくせに……」

途端、車の速度がいきなり上がり、僕は反動で姿勢を崩した。凄い速さで窓の外の景色が回転し、ミキサーにかけられた果物のように各々の輪郭を失つてゆく。

男の姿が、遊園地の景色が、すべてが闇に溶け込むようにして消えてゆく。

「お前は誰なんだ！？」

僕が叫ぶと、地の底から響いてくるような声が車全体を揺らした。

「ここから出たくないんだが?」

……そして目が覚めた。

PM・5:45

目を覚ますと、一人の男の姿が見えた。

男は白いシーツの上に人形のように横たわり、僕を見つめていた。痩せた体で手足が細長く、藁人形のような体型だ。安っぽい服装は、何処か体に合っていない。

顔はまあ端正と言つていい方だったが、ひどく虚ろな目と生氣のない表情が、男の全体的な評価を落としている。

まるで地球で迷子になつた宇宙人みたいだ、と僕は思った。

そう、確かにその男は、何処か人間になりきれていない感じがした。

数秒の混乱の後、僕はそれが鏡の天井に映つた自分の姿であることを確認した。

バスルームの扉が開き、バスタオルを体に巻きつけたドロシーが出てきた。

「……あ、目を覚ましたの? 良かつた、やっぱり殴つて氣絶させたのは悪かったかなって思つてさあ」

ドロシーは長い髪を拭きながらベッドの横を通り過ぎた。僕はドロシーの姿を眺めてからもう一度目を閉じた。

ドロシーへの怒りはもうない。それよりも自分に対する嫌悪の方が心を満たしていた。

「……ここは何処だ? どうして僕たちはここにいるんだ?」

「なかなか哲学的な質問ね」

ドロシーは部屋にあつた小型の冷蔵庫を開けながら僕の質問を混

ぜつ返した。

僕は痛む頭を押さえながら起き上がった。少し考えて、ここが何処かはすぐにわかった。多分ラブホテルの一つだろつ……確かあの本屋の近くにはこの類のホテルが多い。

部屋はかなり広く、妙に大きい円形のベッドと、古いテレビと冷蔵庫がある。

ベッドの脇には小型の机があり、僕の鞄が置かれていた。

「……哲学には果てしなく遠そうな所だね」

汚れた床を見回して、僕は呟いた。薄暗い照明で誤魔化しているつもりなのだろうが、掃除が行き届いていないのが簡単に見て取れる。天井の鏡は大きなヒビ入りだ。

「そうでもないわよ」

ドロシーはベッドの端に腰かけた。手には冷蔵庫から出したジュークの缶を持っている。

「だつて、この上なら少しば人生を楽しめるもの」

「……それは確かに哲学的だね」

ドロシーは目を細めるとジュークを飲み始めた。

湯上がりの肌は薄く色づき、ほのかに湯気が立ち昇っている。黒い髪は流れるように肌の上を這い、小さな水滴が肩口に透明な飾りを作っている。

ドロシーがジュークを飲む度に、形の良い胸が上下した。

「どうやつてここに僕を入れたんだ？ 受付で怪しまれなかつた？」

僕はベッドに横たわって呟いた。

「新手のSMだつて言つたら納得したみたいよ

「…………」

ドロシーはクスクスと笑いながら僕の隣に横になり、腕を伸ばしてジュークの缶をベッドの脇に置いた。

体を伸ばしたせいで、バスタオルがずれそつになつてている。ドロシーの均整のとれた美しい肉体は、野生の動物のように力に満ち、存在感があった。

鏡の中のドロシーを眺めていた僕は、その隣の僕自身の存在に気づいて目を背けた。

「……ねえ、これ何かな？」

ベッドの脇を探っていたドロシーが、何かに気づいて声をかける。途端、僕の下で金属音がすると、かなりの振動と共にベッドが回転し始め、周りにけばけばしいライトがついた。

「な、何だ！？」

不意を突かれて混乱したが、間もなく僕はベッドが回転する機能を持っているのだと気がついた。それにしても……随分と昔にテレビや映画なんかでは見たことがあるが、こんな物が本当に実在するとは知らなかつた。しかも自分が乗ることになるとは……。

「ハハハ、楽しいね。まるでメリーゴーラウンドに乗ってるみたいだ」

吃驚して飛び起きた僕とは違つて、ドロシーは楽しそうに笑っている。

僕を見つめる瞳が、誘うような光を帯びた。

「……メリーゴーラウンドは嫌いだよ」

僕は投げやりな動作で体をドロシーの方に向けると、彼女の肩をそっと抱いた。ドロシーの手が僕の背中に伸び、暖かな濡れた感覚が背中に伝わってくる。

ベッドは僕の頭の芯に鈍い振動を「うえつづゅづくづく」と回転し続ける……何だか意識に霞がかかつてゐるようだ。このベッドにはこんな効果もあるのだろうか？　何となくデパートの展示台の上に乗っているような気もするが……。

ドロシーの手が僕の背中をまさぐり、首筋へと移動した。僕とドロシーの距離はほとんどなくなり、彼女の匂いや体温まで感じられる。僕はドロシーの頬に手をかけ、唇を近づけた。

その時、僕の脳裏に嵐の中で回転するメリーゴーラウンドの映像が爆発的に広がつた。滝のように降り注ぐ雨の中、狂つたように回転を続けるメリーゴーラウンド……赤や黄色やオレンジのライトが

嵐を切り裂いて光り輝いている。

「……何？ どうしたの？」

僕は頭を抱えてうずくまっていた。心臓の底が抜けたような虚脱感と敗北感が全身を支配している。

「大丈夫？ 体の調子が悪いの？」

ドロシーが再度心配そうに尋ねてくる。

「ダメなんだ……」

「……何が？」

「何もかもだよ、こんなことできない」

僕の言葉にドロシーは機嫌を悪くしたようだつた。

「まあ、勝手にホテルに連れ込んで悪かつたわよ、誘うようなことをしたしね。でも、アタシも殴ったのは悪いと思ってるし……貴方のことは結構気に入ってる。アタシってそんなに魅力ない？」

最後の台詞に妙に力を入れてドロシーが尋ねる。

「君は綺麗だよ。とても魅力的だ。でも僕に君を抱くだけの価値はないんだ」

「何それ。もしかして病気持ち？ それとも身体上の欠陥か何か？」

「……昔から何かが違うような気がするんだ。自分が普通の人間じゃないような気が……僕は人間じやない、人間以下の何かだよ……だから君やカナちゃんに愛される価値もないんだ」

僕は自分でもよくわからないことを呴き続けた。両目から涙が流れているのがわかる。

「人を愛するのが恐いの？」

ドロシーは僕の前に横たわって言った。

「……恐いよ。何もかも恐いんだ、君もカナちゃんも……全て」

僕は目を開けて天井を見上げた。天井の鏡にはライトに照らされて歪んだ僕とドロシーが映り、ベッドの外の景色がゆっくりと回転している。

「まるでメリーゴーラウンドの中にいるみたいだ」

眩き、僕は天井を見つめ続けた。

天井の僕も僕のことを見つめている。そしてあの瞳の中には僕の姿が映っているはずだ。そして、やはり僕の瞳の中にも……。

その時、部屋の電気が消され、周囲のけばけばしいライトも消えた。ベッドの回転が緩やかになり、横でドロシーが起き上がった気配がする。

「……まったく

ドロシーは咳くと、バスタオルを外して僕を抱き寄せた。

「バカな男にはつき合ひきれないわ」

ドロシーの肌は少し湿りけを帯びていた。二つのやわらかなふくらみの向こう側から、心臓の鼓動が伝わってくる。

完全な闇の中だというのに、そこはとても暖かい、心休まる空間だった。

「気にしない方がいいわ」

不意にドロシーが咳き、僕の顔に彼女の息がかかった。

「そんなことは気にしない方がいい。何も怖がる必要もない……貴方の恐れるものは貴方を傷つけることはできても、貴方を殺す力はない。戦わなければならぬものは、もっと別のところにあるのよ」
僕にはドロシーの言っていることがよく理解できなかつたが、不思議と不安が取り除かれたような気がした。

ドロシーは僕の背を軽く叩き、歌を歌い始めた。それは聞いたこともない言葉の、奇妙な歌い方の歌だった。しかし、その不思議な歌には何処か懐かしい響きがあった。

「……カツコ悪いなあ、僕はさ……」

咳き、僕はドロシーの体に顔を寄せた。

歌声が少し止まり、ドロシーの体が微かに揺れる。

僕は少し笑つて目を閉じた。

再び流れ出した歌声を耳に、ドロシーの体温と動きを肌に感じながら、僕は瞼の裏を眺め続けた。

果てしなく続く暗闇の中で、世界がゆっくりと回っていた。

僕も世界の中心で胎児のように体を丸めながら、ゆっくりと回つ

ていた。

第一話「黄色い煉瓦で造られた交差点の話」 - 4

PM・5・45

優雅な金属の破片が肌の上を滑つていく。その後を追うように、赤い血の筋が歪な十字を描いた。

「いいか？ この世の中で安心して生きていく方法は一つある。一つは誰にも邪魔されない力を得ること。もう一つは力ある者に従うことだ……何も恥ずかしいことじやない。昔から國家つていうのはそうやってできてきたんだ。お前の親父も俺の親父もそうやって生きてきたんだ。ただ違うのは、その順番くらいだ。俺の親父だって負け犬の一人だよ。だけどお前の親父は更に下の負け犬だ……聞いてるか？」

リョウはナイフの腹で地面に倒れた男の頬を何度も叩いた。よく詰まつた脂肪が金属を弾き、薄っぺらな音をたてる。男は何とか目を開いて反応しようとしているらしいが、意識が混濁しているのだろう、微かに頭を動かすのみだった。この様子では自分の額に逆十字の傷がつけられたことにも気づいていないかもしれない。

商店街はそろそろ買い物客で混雑し始める頃だが、リョウのいる細い路地に人通りはない。その代わりと言つては不足かもしれないが、地面に敷き詰められた灰色のタイルの上には赤い血が点々と飛び散つていた。

その時、ジンが戻ってきた。顔を上気させ首筋に汗をかいている。「あの二人は逃げてつたぜ、リョウ、やつぱりすげえなあ！ 何てつたつて三人相手だぜ？」

ジンは興奮冷めやらぬ様子で話し続けた。表情が柔らかいせいが、いつもより童顔見える。

「なあ、そいつはどうするんだ？ ……殺すのか？」
ジンの質問にリョウが悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「そうだな、殺すのも悪くない……」

そう呟くと、リョウは逃走を試みて地面を這つていた男の尻を蹴り上げた。男がやけに高い悲鳴を上げて路上を転げ回る。リョウは蹴った反動で崩れた姿勢を戯けた身振りで立て直すと、地面に這いつくばつている男の前方に回った。

苦痛に耐える男の眼前、タイルの隙間にナイフを突き立てる。

「男の子だもんねえ、喧嘩もしたくなるよな？ 自分が一番強いつて思いたくなるよな？ ……え？ それで女の子にもてたいって？」

リョウは薄笑いを浮かべて一人で喋り続けた。

「よくわかるよ、その気持ち！ だつて男の子だもんねえ。強くなつて世の中のおいしいところを楽しんで、沢山の女の子を犯すんだ……きっと楽しいよねえ」

リョウは男の耳元に口を近づけた。男の顔には、明らかに先程までとは異なる汗が流れている。額の逆十字から汗と共に血が流れ、鼻筋を通つて地面に落ちた。

「……だが、お前は負けた」

リョウが甘い声で囁く。

「お前は負け犬だ。負け犬だ、負け犬だ、負け犬だ、負け犬だ、負け犬だ、負けい……」

執拗に繰り返される嘲りの言葉に、逆上した男が拳を突き出した。しかし一瞬早くリョウが地面のナイフを抜き、男の喉元に突きつけた。

ナイフは男の喉を突き破る直前で止まり、汗の量が更に増える。このまま顔が萎んでしまうのではないかと思われるほどに。

「……わかつたな？ お前は負け犬だ」

リョウの言葉に、男がぎこちなく頷く。喉のナイフを意識しながらの動きだったので、喉の筋肉が必要以上に緊張し、ぶるぶると震えていた。

「負け犬に待つてるのは服従か死だ。どっちがいい？」

リョウは男の瞳の中に服従の色を感じ取りながら、ナイフを再び

タイルの隙間に刺した。

「ナイフが汚れている……お前達の血だ。汚いと思つよな？」

男がもう一度頷く。リョウはニーッコリと微笑むと、

「舐める」

短く命令した。リョウの目は冷たく……最早人間を見る目をしていなかつた。

一瞬の沈黙の後、男が舌を伸ばしてナイフの刃を舐め始めた。

「情けないなあ、こいつ……」

ジンはリョウのそばに寄つて話しかけた。

リョウは男の舐めているナイフを足で押さえつけていた。男は舌を傷だらけにしながらもナイフの刃を舐め続けている。

「……何か言つたか？」

男を見下ろしていたリョウが不意にジンの方を見た。

ジンは妙な違和感を覚えた。まるで出来の悪いロボットが、いきなり首を動かしたように不自然で急な動きだったのだ。

リョウの目からはまったく感情が読み取れず、まるでカメラのレンズのようだつた。

「……いいや、何でもない」

ジンは自分が実験用の動物になつたような感覚に襲われて言葉を濁した。

「おい、いつまでやつていいんだ」

リョウは抑揚のない声で呟くと、地面からナイフを抜いた。その拍子に唇の端を切られた男が悲鳴を上げて上体を起こす。

「いいか、このことは警察には話すな。もし言つたら殺す……わかつたな？」

リョウの言葉に、既に意識があるのかどうか、虚ろな目をした男が頷く。

男の口からはジンが気持ち悪くなるほど血が流れていだが、本人はあまり痛みを感じていないようだ。

「ちつ……却つて汚れちまつた……」

短く舌打ちし、男の服でナイフの刃を拭う。

次の瞬間、リョウは男を蹴り飛ばし、男は頭を地面に打ちつけて氣絶した。

「……ジン」

リョウがジンの名を呼ぶ。ジンが緊張しながら返事をすると、リョウは魔法が解けたようにいつもの雰囲気を取り戻していた。

「パーティーに行こうか？ そろそろみんな集まっているはずだ」

リョウはナイフをしまつと、男には目もくれずに歩き出した。

慌てて後を追おうとしたジンは、自分が大量の汗をかいしていることに気がついた。

PM・6:38

アユミという女がいた。

彼女は高校一年生で、リョウの仲間の一人だつた。

身長は百五十過ぎ、脱色した髪に日焼けした浅黒い顔をしていて。体つきは全体的に脂肪がつき、かなり逞しかつたが……本人はダイエットを生き甲斐にしていたらしい。

彼女は中学から大学までエレベーター式に進学できる私立学園に通っていたので、浪人生の僕をバカにした態度をとることが多かつた。小学生の頃の彼女がどれほど成績優秀で、どんなに苦労して難関の中学校に入ったかということを、僕は何度聞かされたことだろう？ 実際、僕は彼女が入学試験中二教科目にお腹が痛くなつたことだつて知つているくらいだ。

まあ……確かに当時の彼女は成績が良かつたのだろう。学校のレベルから考えると納得のいく話だ。

しかし、今現在の彼女が小学生時代のボキヤ・ブライアの半分でも持つてゐるかどうかについては甚だ疑問だ。先程紹介したような自慢話を除けば、僕は彼女がテレビドラマと化粧品と男以外のことを

話しているのをほとんど聞いたことがない。音楽は聴くようだが、彼女が聴く音楽には頻繁にテレビで放送されるか、最低でもヒットチャートの上位に入るという条件が必要であり、彼女はテレビで名前を見ない、もしくは彼女が興味を持つていらないアーティストは全くくだらないものとの考えを持っているようだつた。

個人的には、彼女の知識と見識の狭さと、自分の考え方への頑固さについては賞賛を贈りたいほどだ。一度、僕が彼女に些細な間違いの指摘……天動説を説いたのはニユートンではなくコペルニクスだということ……をしたら、逆に怒られたことがある。彼女が言うには、そんなことを知っていることの方が変なのだそうだ。

アユミという女について僕が話すことはこれくらいだ。つけ加えるなら、彼女はリョウに抱かれたがっていた。しかし彼女とリョウとが最終的にどのような関係に至ったのか、僕は知らない。

ここまで話してきた内容から、僕が彼女に好意を持つていないとはわかつてもらえただろう。実際、彼女は僕が苦手とするタイプの女性の一人だっだし、向こうにしても僕のことは異性としての対象外だったはずだ。

しかし世の中というのは不思議なものだ。

例を挙げるとすれば、それは僕が彼女と寝たということだろうか。

PM・6:38

玄関のベルが鳴った。

何をするでもなく壁の時計を眺めていた僕は、反射的に椅子から立ち上がるとき立門へと急いだ。

ドアの前に立ち、身なりを整えると、僕は一気にドアを開けた。そこには制服姿のアユミが立っていた。アユミはベルを鳴らすこと集中していたが、ドアが開いたのに気づくと手を止めて僕を見た。

アユミは肩から白い鞄を下げており、鞄には小さな人形が数体ぶ

ら下がっていた。怪我をしたのか右膝に大きな絆創膏を貼つて上から医療用のテープでとめている。

「……待つてたよ」

僕はアコミの機嫌の悪さを感じながらも無理に笑顔を作った。
「今、何時？」

アコミは僕を押しやるように中に入った。

「六時三十八分だよ……もしかしたら三十九分かもしけないけど」
アコミは軽く鼻で返事をすると勝手に上がり込んで部屋を眺めた。
怪我のせいか右膝を軽く引きずっている。

「変な部屋。何もないんだ」

「……約束は五時のはずだろ？……何かあったのかい？」
「別に何も。友達とカラオケに行つてただけ。だから喉が乾いちゃ
つたわ、何か飲み物ある？」

僕が冷蔵庫に牛乳があると言つとアコミは機嫌を悪くした。

「アタシが牛乳嫌いなの知つてるでしょ？ 飲むとお腹痛くなるん
だから！ アンタとは違つてアタシは纖細なの、わかる！？」

アコミは冷蔵庫を開けて中から飲みかけのウーロン茶のボトルを
取り出した。ろくな物がないわね、と呟く。

「……それなら外に食べに行かないか？」

僕が必死に不快感を抑えながら尋ねると、アコミはいかにも面倒
臭そうに断つた。

「やりたいんでしょ？ だつたら、さつさと始めなさいよ」

アコミが空になつたウーロン茶のボトルを捨てる。そして口の周
りを拭うとベッドの方に歩き出した。

「誘つたのは君の方じゃないか……」

僕は服を脱ぎ始めたアコミから目を背けて呟いた。こんな言い方
は言い訳つぽくて嫌いだ。自分でも情けないと思つ。今にも彼女は
怒り出し、帰つてしまふかもしれない。

しかし次のアコミの言葉は、完全に僕の予想を裏切るものだつた。
「アタシだってリョウに言われたんじやなきや、アンタなんか誘わ

ないわよ

「……何だつて？ 何て言つた？」

僕は彼女の言つたことが理解できなかつた。

アユミはカッターシャツのボタンを外す途中の手を止めて叫んだ。
「リョウに言われたのよ！ アンタと寝たら俺も抱いてやるつて！
あいつは女を知らないから教えてやれつて……そうじゃなきゃ、
誰がアンタみたいな浪人男を誘うつていうのよ！ ビうじてこのア
タシが！」

僕の中で、もしかしたらアユミが僕に好意を持っているのかもと
いう希望が音をたてて崩れた。誘われて以来、僕が今日という日で
どれだけの期待と不安を抱いていたか。

いや、アユミに僕の心情の理解を求めるのは酷というものだ。彼
女は常に自分の感覚や価値観のみで物事を考える。そしてそこから
導き出される解答、それに続く行動は非常に純粋なものだ。好きな
男に抱かれる為に、嫌いな男を誘うくらいいに……僕は本当に彼女の
ことを尊敬すらしている。

……しかし、どうしてリョウはアユミにそんなことを言つたんだ？

椅子に力なく座り込んだ僕の前にアユミが立つた。

彼女は制服を脱ぎ捨て、下着とだぶついた靴下のみを身につけて
いた。右膝の絆創膏が痛々しい。

「どうするの？ するの？ ……しないの？」

アユミの表情は険しく剥き出しの敵意が現れていた。妙な話だが、
僕はこの時初めてアユミのことを綺麗だと思った。

冷静に考えれば答えは一つだろう。アユミとはこのまま何もせず、
リョウにはアユミと寝たと嘘をつく。そうすればアユミはリョウと
想いを遂げ、僕らの関係にも傷はつかない。もしかしたらアユミは
僕に感謝して好意すら持つてくれるかもしれない。

勿論、寝たりはしないだろうが、いい友達にはなれるかもしれない
い。

だがそれは、あくまでも冷静に考えれば……だ。

その頃の僕は受験に失敗し、浪人生活にも行き詰まっていた。リヨウ達の他に特に知り合いと呼べる者もなく、一日に誰とも会話しない日が多かつた僕は、人との親密な交流に飢えていた。それが女性とのものであれば尚更だ。

当時の僕を満たしていたのは果てしない挫折感と孤独感、それに抑えがたい性欲だった。

僕は人の温もりを必要としていた。

「……約束は守れよ……リョウに言うよ……」

僕は床に視線を落としたまま呟いた。アコミがあからさまな蔑み

のため息をもらす。

「アンタさあ、最低だよね

……僕だつてそう思つ。

「それで? どうなつたの?」

「……別に……やつたんだよ」

微かにドロシーが息を吐くのが聞こえ、ベッドのスプリングが軋んだ。

「よくは覚えていないんだよ……初めてだつたし、頭の中が真っ白になつて、緊張して……いや、これは違うな。僕の場合そうじやないんだ。逆に頭は妙に冷静だつたよ。緊張はしたけどね。何て言つか、もう一人僕がいて、それが慌てている僕を眺めているような感じだつた……そうだ、昔小学校の体育の時にもそんな感じがしたな。僕はクラスで一番運動が苦手だったから、何をやってもうまくいかないんだ。野球とかやって思うんだよ、どうしてバットを球に当てるごとくらいできないんだろうってね……あんまり関係ないかな?」

僕は少し手を伸ばした。ドロシーが近くにいると思つたが、手は何にも触れなかつた。

「……まあ、別に慌てたり迷つたりするほど、僕がやらなければならぬことはなかつたんだ。彼女はもう服を脱いでいたし、ベッド

にも寝ていた。少しだけど明かりもついてたから彼女が何処にいるのかもわかった。日焼けしてない部分で、彼女が実は色白だつてもわかつたよ。それと彼女が本当に僕のことを嫌悪しているのもわかつたね」

バッター ボックスには強い風が吹いていた。さっきまで砂をいじっていたベンチの裏とはかなり違う。

僕の前にはピッチャーベンチの大柄なクラスメイトがいて、僕をバカにした目で見ていた。ベンチには同じチームの男子と数人の女子、それと担任の女の先生がいて、数人の者が声を出していた。多分、「やればできる」とか「がんばれば打てる」とか言っているのだ。そして僕は、同じベンチに座っている数人の男子が僕の方を諦めたような顔で見ていていた。

運動が得意な彼等はクラスの中心的な存在で、その栄光は教室よりもグラウンドで多く示された。実際、この授業は彼等の栄光を高める為だけにやっていると言つてもそれほど間違いではない。僕は彼等の大半が僕と同じチームにいるので、今日は僕のチームが勝つだろうと考えた。

彼等は次の打者のこと相談していた。

その時、僕は自分が打てないということを確信した。

……実際にそうなつたんだけど。

アユミはキスすることを許可しなかつた。僕が行為を終えるまでの時間を少しでも引き延ばすことを許可しなかつたのだ。

僕のるべき行為は二つのみとなつた。つまり、『入れて』『出す』のだ。例え二人の間に何の愛情も信頼も快楽もなくとも、『入れて』『出す』だけで行為は終了を迎える。

手続きというものは幾らでも簡略化できるものだ。

初球はストレートだった。ボールは山なりの軌道を描きながら僕

の前を通過した。僕はバットを振つたが、かなり振り遅れた。

ベンチの方から「よく見て打て」と声がかかる。担任の高い声が一番耳に障つた。

僕は自分がやらなければならないことを考えた。ボールを『よく見て』『打つ』のだ。

二球目は、バットが遙かにボールと違う軌道を通つた。

「30cmはずれてたかな？」

僕はそう判断した。頭の大部分は恥ずかしさとやり場のない怒りで混乱していたが、何故か片隅の方では、そんな自分の醜態を冷静に観察していた。

ただ残念なことに、この冷静さはボールを『打つ』ことには何も役立たなかつた。

三球目はバットを振る前にボールがミットに到着した。多分、『よく見る』ことに集中し過ぎたのだろう。

僕はどんな表情でベンチに戻ろうかと考え始めた。

アコミの体は締まりなく柔らかかつたが、包み込むような暖かさがあった。僕は少し安心した。思つたよりもアコミの肌が心地よかつたからだ。

その時、僕はアコミに見つめられていたことに気がついた。

部屋は暗かつたので、アコミが本当に目を開けていたのかどうかはわからない。しかし僕には彼女の視線がはつきりと感じられた。そしてその視線には何の感情もこもっておらず、まるで理解の及ばない未知の生物を見つめているようだった。

「目を閉じてくれないか？ 見つめられてると何もできない」

「……じゃあ、これでいい？」

アコミは僕に背を向けると四つん這いになつた。

僕が何も言えずにいると、アコミは急に可笑しそうに笑い出した。声を上げてケタケタと……多分、本当に可笑しかつたのだろう。

野球の試合は、予想通り僕のチームの勝利に終わった。

お前がいなければ、もっと点が取れてたんだからな、とチームの一人が言つた。

それを聞いていた担任が彼を怒つたが、僕は実際にその通りだと思つていたから別に嬉しくなかつた。

小学校における僕の体育以外の成績は良く、僕は担任のお気に入りだつたようだ。しかし僕は担任のことがあまり好きではなかつた。彼女は成績で人を判断したし……僕は彼女の丸い顔に張りついたような笑顔が恐かつた。

「それでしたわけ？…………どうしてそこまで？」

「知らないよ。DNAに聞いてくれ」

僕はドロシーの体を探しながら呟いた。

「初めてだつたしね……その頃はセックスをすれば何かが変わると思つてたんだ。何かがね」

確かに気配はあるのに、ドロシーの位置がわからない。その時、僕は彼女が自分のことを魔女だと言つていたのを思い出した。

「…………でもね。結局何も変わらなかつた……希望がなくなつた分、前より酷くなつたくらいだ。あつという間に終わつたしね。彼女はすぐに帰つたよ。氣分が悪くなつたつて言つてた。本当に何もいいことはなかつたんだ。でもね、僕はまだ彼女の体温を覚えているんだ。そして落ち込んだ時にはあの温もりを思い出す……こんなことを言つても彼女は気持ち悪く思つただろうけど……それが僕を支えてるんだよ」

あれからすぐアユミは学校で問題を起こして退学になり、この町から消えた。聞いた話では地方の親戚の店で働いているらしい。

彼女は確かに良い生徒とは言えなかつただろうが、問題を起こすような要領の悪い性格でもなかつた。何故、彼女がそんなへまをやらかしたのかはわからないが、彼女が幸せに過ごしていればいいと本当に思う。

「笑つちやう話だよ。リコウなら何て言うかな?」

その時、僕は不意にドロシーが本当に部屋にいるのか不安になつた。

「ドロシー?ねえ、聞いてる? 本当にここにいる?ドロシー?」

僕は飛び起きてベッドの上を探した。その時、部屋の窓が開けられた。壁の一部が四角く切り取られ、群青の夜空と入れ代わる。そしてそこには、夜空に背を向けて立つドロシーのシルエットがあつた。

「ちゃんと聞いてるよ。アタシはここにいる心配しないで」

「そうか、良かつた本当に」

僕はやわらかな枕に頭を埋めて呟いた。

その時、何故か涙が自然に零れ出た。

頬を伝つた涙は、自分のものとは思えないほどに暖かかった。

第一話「黄色い煉瓦で造られた交差点の話」 - 5

PM : 7 : 45

「久し振りに泣いたせいかな？ 何かすつきりした気分だよ」

僕は大きく背を伸ばし、深呼吸をした。

「……何もしなかったのに？」

ドロシーが呆れたように言つ。

「やっぱり、貴方何処かおかしいんじやない？」

「実はね、僕は宇宙人なんだよ」

僕が軽く受け流すと、ドロシーはバカにされたような顔をしたが、すぐに吹き出した。

「ハハハ、宇宙人と魔女の組み合わせか……悪くないね」

僕らは無断で近くのマンションの屋上に上がり込み、缶入りの紅茶で宴会を開いた。街を通り抜ける風は強く、気温は低かつたが、これはこれでそれなりに洒落たお茶会だ。時計を持ったウサギがないのが残念だが……あれ、気狂いの帽子屋とお茶を飲むのはドロシーじゃなかつたつけ？

「夜景が綺麗ね。まるで星の海みたい」

ドロシーが紅茶の缶を片手に呑く。

周囲に高い建物のない十一階建てのマンションの屋上からは、近くのラブホテル街から繁華街の明かりまでよく見えた。昼に斎藤と揉めた歩道橋はどの辺りだろう？ こうして上から眺めていると、何もかもが小さく見える。

「……僕には遊園地に見える。バカ騒ぎの繰り返しだよ」

「見解の違いつてやつね」

ドロシーは手すりに腰かけると、風に乱れる長い髪を手で押さえつけて振り返つた。

「そうだね。昔から、遊園地って言葉をよく連想するんだ……どう

してかな?」

「昔、迷子にでもなつたんじゃない?」

「そうかもしれない。何て言うか、いつも何処かに閉じ込められているような気がするんだ。メリーゴーラウンドみたいにグルグル回っているんだよ」

「アタシもメリーゴーラウンドは嫌いよ。だって何処にも行けないんだもの」

僕はドロシーの隣に腰かけた。

「君は何処か行くところがあるのかい?」

ドロシーは僕の方を見ると、何処か含みのある微笑みを見せた。

「アタシは海へ。それからその向こう、朝開きの海の彼方へ……」

「……何なんかい、それは?」

「トップシークレットよ。お楽しみがなくなるわ」

僕はドロシーの奇妙な言動にはとっくに慣れていたので、特に気にすることもなく話を続けた。

「目的があるっていうのはいいことだね。僕は何処にも行けないよ。僕の時間は止まっているんだ。ここからは抜け出せない」

「時間と友達じゃないのね」

「僕は魔法が使えないからね」

冗談めかして言つと、ドロシーはクスクスと笑つて僕の胸に顔を寄せてきた。

僕はドロシーの肩を抱き、引き寄せて抱き締めた。すぐ近くに彼女の心臓の鼓動を感じる。このまま抱き締めていれば、いつか僕らの心臓は一つになることができるだろうか?

「何が見える?」

僕はドロシーの耳元に口を寄せて囁いた。

「ビルの上に綺麗な星が見える。オレンジ色の小さな星」

ドロシーは僕に抵抗することもなく体を委ねていた。僕の問い合わせる時に、胸の中を空気が移動するのが感じ取れた。

「僕は違う所を見てた。不思議だね、こんなに近くにいるのに別の

所を見ているなんて」

「貴方とアタシは違う人間だから……」
落ち着いた声でドロシーは言つた。

「そうだね、違う人間だから違うものを見るんだね……でも、少し悲しい」

「どうして？」

「……昔、恋をすれば一つになれると思つていたから。恋をすれば、その人と一つになれるつて……そうすればもう寂しくない」

「それは無理よ。他人は他人、貴方は貴方よ」

「……そうだよね」

ドロシーは軽く息を吐くとこゝに言つた。

「他人が何を見ているかはわからないわ。でもそれを聞くことはできる。聞いてよく考えれば理解もできる。決して一つにはなってくれないけど、そうすれば世界は広がるわ」

僕はドロシーの肩に額を当てて目を閉じていたが、顔を上げると本当に街の明かりが星のように見えた。

世界は一つではない。住む星が同じでも、それを眺める者の数だけ異なる世界が存在する。そして世界は、眺める者の立ち位置によつてもその姿を様々に変える。

その者の考え方、信仰する宗教、社会的地位、脳の構造、その時の感情……複雑な条件に応じて世界は様々に姿を変える。僕が美しいと思うこの世界は、アナタにとつては吐き氣を催すものであるかもしれない。

僕は地上に降り注いだ数多くの星を見つめた。あの星の中では、僕と何の関係もない人達が生活しているのだろう。家族で夕食の途中だろうか？一日の話をしているのだろうか？テレビを見ているのだろうか？あるいは夜空の星を眺めているかもしれない。

そして僕は離れたところからそれらを眺めている。多分、誰も僕のことに気づきはしないだろう。そして僕もあの星の住人達のこと

を何も知らない。それでも僕は星を眺め、彼等は生活を続けている。

幼い頃、僕は自分が世界の中心にいると思っていた。

自分から見えない所で人が動いていることを自覚していなかつたのだ。

しかし世界は一つではない。僕もアナタも一つずつ世界を持つている。それが重なることも衝突することもないかもしない。アナタは僕とは何の関係もなく人生を終えるかもしない。……そしてアナタは、世界を酷い所だと思っているかも知れない。

それでも僕は、この世界はそれほど悪くないと思っている。僕にはそう見えるのだ。

アナタには世界はどう見えるのだろうか？

「そろそろ行こうか？」

永久に続くかと思われた時間は、ドロシーの言葉によつて終わりを告げた。

「行くつて……何処へ？」

「九時から約束があるんでしょう？」

「スケアクロウでの集まりのこと？」

僕は不機嫌に呟きながらドロシーの体を求めた。

「別に行く必要はないよ。あいつらとの関係はつましくいつないし、会いたくない奴も多いし……」

それにしても、ドロシーはどうしてスケアクロウでのことを知っているのだろう？ カナとの話を聞いていたのだろうか？

「正直、行きたくないんだ。君は知らないだろうけど、あそこには僕の良くない仲間がいる。僕はそいつらとはもうつき合いたくなかった」

「……そうなの」

僕はドロシーの肩を両手でつかみ、少し体を離して彼女の瞳を見つめた。月の光に照らされて、ドロシーの瞳は美しく輝いている。

人の目をまっすぐに覗き込んで話をするなんて、生まれて初めて

かもしけない。

「僕は君のことが好きだ」
自分でも意外なほどに流暢に、想いが言葉となつて流れ出た。
言つてしまえば後は楽だつた。ただし自分の声が自分のものでないような気がしたが。

「僕は君といふと……何て言うか、気取らなくてすむし、とても楽なんだ。君はとても変わつてゐるけど……そこが魅力的なんだ」
変わつてゐる、という言葉を愛の告白に使つてもいいのだろうか?
少し疑問に思つたが、それでも僕は言葉を続けた。

「僕は君といれば変われそうな気がする。まだ会つてから丸一日もたつてないけど、僕には君が必要なんだ」

「……それは……」

ドロシーは、彼女には珍しく言葉を詰まらせると手を伏せた。

僕の勘違いでなければ、彼女の瞳は悲しげだつた。しかし数秒の沈黙の後、再び僕を見つめた瞳には、いつもの悪戯っぽい光が宿つていた。

「ダメ、アタシは行くところがあるんだから

ドロシーは屈託なく微笑むと、踊るようにして僕の手を振りほどき、後方に逃れた。

「どうしてだ? どうして僕じゃダメなんだ! ?

僕は叫ぶようにドロシーの背中に呼びかけた。

ドロシーは僕に背を向けたまま階段への歩みを止めた。ビルの谷間を吹き抜けた一陣の風が僕達の間の空氣を押し流し、ドロシーの長い髪が音をたててはためく。

「.....ほら、パートナーに遅れるわよ」

風がやんだ時、ドロシーは笑顔で言つた。

「知つてる? 自分の声つて耳の骨に響くから、自分では少し低く

感じるんだって。つてことはさあ、私の声は自分で感じてるより高いことよね……ねえ、クミ。私の声って高いかな？」

雑誌を読んでいたカナは、小さなコラムに目を止めて隣にいるクミに話しかけた。

「知らないわよ、そんなこと。私は貴女の頭の中に潜り込んだことはないから、貴女が自分の声をどれくらいの高さに感じているのかなんてわかりっこないわ。個人的な感想としては、貴女の声はバカみたいに高くはないと思う。ただしデリケートな作業を行っている時にはかなり神経に障るけど！」

リズミカルにキーボードを叩きながら、クミは少し怒ったように答えた。

江藤久美はカナと同い年の少女だ。かなり背が高く、長い髪を無造作に後ろで束ね、厚めの黒縁の眼鏡をかけている。服装は大きめの白いブラウスと、くすんだ色合いのロングスカートだ。

「それはゴメンね、クミ。それについてもクミは面白いこと考えるね。人の頭に潜り込んだことはない……か。そうだね、一度、人の頭の中に潜り込んでみたいね。男とかがどんなこと考えてるのか気になるよね。特に私を抱いてる時なんて、男はどんなこと考えてるのかな？」

カナは机に肘をついて考え込んだ。こちらは制服から着替え、体にぴったり合った黒のセーターと短めのチェックのスカートを身につけている。薄らと目元に施された青色の化粧が、カナの瞳に更に光を与えている。

そばにはティーカップが置かれ、白い湯気を立ち昇らせていた。上品に顎に添えられた指はなめらかな曲線を描き、黒い睫と瞳は濡れたように深い色をしている。

「やっぱり、射精する時は大したことと考えてなさそうだよね」カナは髪をかき上げて笑った。

「……私は貴女の発想の不謹慎の方が不思議だわ」

クミはキーボードから指を離し、背もたれに身体を預けた。

「ほら、これで貴女が朝に会つた男が何か言つてきても大丈夫よ。携帯からの操作一つでインターネットを通じて警察と会社に売春のことが伝わるようにしてあるから……勿論、貴女の名前や存在は一切出ないけどね」

「流石はクミね」

力ナが褒めると、クミは少し頬を赤らめてそっぽを向いた。

「人がいるのは狭い単身者用マンションの一室だった。隙間なく並べられたパソコン等の機材と専門書によつて、一層狭くなつている。

クミは力ナの中学生時代からの友人だ。彼女は力ナと同じ中学校に通つていたが、三年生の春から不登校を始め高校には進学していない。今は親の名義で借りているこの部屋で一人暮らしをしており、力ナ以外は誰もこの部屋にやつてくることはない。もっとも、少し前に大きな地震があつてからしばらくの間は、力ナもこの部屋には寄りつかなかつたが。

そしてまた、ここは若松加奈と江藤久美によつて経営されるデー
トショップ『K&K』の事務所でもある……いや、あつた。

「大体、力ナには援助交際なんて無理だと思つてたわ」

「そうかな？ 一番効率のいい仕事だと思つたんだけどなあ」

「力ナ。貴女は結局、自分が一番可愛いと思つてる。そんなタイプは援助交際なんてしない方がいいわよ」

「クミは自分が嫌いなのね」

力ナが呟くと、クミはため息をついてキーを叩いた。

「貴女は結局、自分しか愛していないのよ。みんなが自分を愛してくれると思ってる……貴女は他人を利用しているだけよ」

「……何かあったの？ クミ。機嫌が悪いけど」

クミはモニターから顔を遠ざけると、夕食用のハンバーガーを口にした。

「別に。ただ前から言つたのよ……今日は色々あつたしね」

力ナはクミが不機嫌なことには慣れているので、慎重に穏やかな

口調で話を続けた。

「確かに私は自分を中心に考えるけど、それを悪いと思つたことはないよ。自分を傷つけるほど他人に奉仕するのは間違つてると思うしね」

「悪かつたわね、どうせ私はろくでもない男に騙されたわよ
カナは眉をひそめた。

「別にそんなことは言つてないよ」

クミが恋をしたのは中学一年のことだ。

普段のクミは落ち着いた雰囲気の近寄りがたい優等生に見えるが、実はそれは本当の彼女ではないということを、カナはその時に知つた。

彼女の他人への距離の取り方は極端だった。必要以上に遠ざけるか、自分をなくすほどに近づくか。その二つしかない。

彼女は学内では本当の自分を出していなかつた。勿論、成績が良いのは誰もが知る事実だったが、まるで他人が自分の私生活を知れば自分が死んでしまうと信じてでもいるかのように、自分の考え方や意見を口に出すことがなかつた。

実際、少女漫画やアイドルグループに憧れる内気な少女であることは、学校でもカナしか知らないことだつたのだ。

自分とは対照的なカナに、どうしてクミが自分の内面を曝け出したのかはわからない。カナがその時点から学校の外の世界を眺めていて、同じく学校と距離を取つていたクミがそれに憧れたのかもしれないし、お互いに親とはうまくいつていなかつたからかもしれません。対照的な二人だが、根元の部分で繋がるところがあつたのだろう。

しかし恋愛の仕方はかなり違つた。

クミが恋をしたのは年上の男だつた。カナから見ると偉そうなことを言うだけの何の実力もない高校中退のフリーターだつたが、クミは彼に異常なまでに心酔していた。

確かに、内気なクミが明るくなつたのはカナもいいことだと思つていた。しかし問題なのはその関係だった。

男は会つ度にクミに金を要求した。計画的で無駄使いをしないクミは、中学生としてはかなりの額の貯金を持つていたし、またクミの親も子供には金さえ与えておけばいいと思っているタイプだつたので、クミが男に渡した金額はかなりの額になつた。

しかし、所詮は中学生だ。自由にできる額には限りがある。クミは次第に男に金を渡すのが困難になつていった。

クミが男と別れた……いや、捨てられた時、彼女の心と体は既にボロボロになつていた。カナはクミが男と別れたことに安心していたが、事態は更に危険な方向に進んだ。

クミは男にどんなに酷い目にあわされても男を恨むことはしなかつた。それどころか自分に責任があるように思い込む傾向があつた。そしてまた、クミはその年頃の少女としては大柄でしつかりとした体格だつたが、本人は女らしくないと気にしていた。この二つに失恋が拍車をかけたのだ。

クミは食事の量を極端に減らし、無理なダイエットを始めた。同時に、学校を休むようになつた。毎日のようにクミの家に通つてダイエットをやめさせようとしていたカナは、ついにクミから話を聞き出した。

「だつて……彼の隣に別の女がいたの……私より綺麗で、痩せてる女が……それで彼が私のことを、太つてて嫌な女だつて……だから、私はもうと痩せなきや……そうしないと彼が会つてくれないもの……」

そう言つて、骨と皮のみの体となつていたクミは飲んだばかりの牛乳を吐き出した。

カナはその時に思つたのだ。自分が彼女についていてあげなければ、と。

クミの男への想いを断ち切らなければならない。実の娘のことにも無関心なクミの親はあてにならない。

カナは自分の手でクミを立ち直らせると決意した。

「何度も言つようだけど、私は恋愛でも自分を第一に考えるべきだと思つよ。誰かの為に自分を捧げるつていうのは、それはそれで凄いことだと思つけどさ。それでも私は自分の意見を持つべきだと思つ。恋愛はビジネスと同じだよ。お互いの利益にならないなら別れるべきだよ。私達は男の奴隸じやないわ、人生の取引相手よ」「それはね、カナは可愛いから。カナだったら男は幾らでも寄つてくるもの。楽しかった？ 汚いオヤジ達にちやほやされて」

「クミ！」

カナの鋭い声に、クミはビクリと体を震わせた。

「…………ごめん、カナ…………言い過ぎた…………」

呟いて、憑き物が落ちたようにうなだれる。

「何か…………あつたの？ クミ？」

明らかにいつもと違うクミの様子に、カナは真剣な表情で尋ねた。

「…………あの男に会つたの。わざと夕食の買い出しに行つた時に…………」

「あの男つて、まさか」

「そう。あの中学の時の奴よ」

クミは拳を握り締めて呟いた。

「また別の女の子を連れてた。それも昔の私と同じ、中学生くらいの子を…………」

「何て奴…………！」

カナは険しい表情で拳を握り締めた。

「私…………あの男の姿を見てね、物陰に隠れたの…………私は何も悪くないつてわかってるのに…………それでも、まだあの男と向き合つひとはできないの」

中学三年生の時、クミはカナと話し合つて親元を離れることになった。学校をやめる必要はないとカナは言つたが、クミは今までのすべての関係を断ち切りたがっていた。

クミの親はもつと大きな部屋を用意できると言つたが、クミは断つた。そしてその代わりに、クミは最新のパソコン設備を手に入れた。

クミはデスクトップに表示されている自分に送られてきたメールを見つめた。

「カナには悪いけど、この世界はまだ外見が大きな判断材料なのよ。それなら、私はそんな世界はいらないわ」

クミはパソコンのケースを撫でながら呟いた。
「この中は私にとっての天国よ。ここは『外見』のまつたくない世界。自分の考え方と知識を直接やり取りできる世界……昔、何処かの評論家が言つてたわ。表現した物こそが、その人の真実だつて……私もそう思う。この中で私は瘦せつぼちで大柄な女じやない。一人の表現者なのよ」

最近、クミはネット上で様々なアイドルや漫画・アニメ・ゲーム関係の評論や、それについての表現活動を行つてゐる。今ではかなりの有名人らしい。もっとも、クミは決して現実の場に姿を現すことはなかつたが。

「でもそれじゃ、誰がクミを抱き締めてくれるの？」
カナが言うと、クミは寂しげに微笑んだ。

「現実の世界では誰かと話すこともできないのよ……私はね」「クミは自分で自分の価値を見限つてるんだよ。私はクミつて凄い人だと思う。あんな男とは比べ物にならないくらいにね」

そう言って、カナは立ち上ると、クミを背後から抱き締めた。

「……ありがとう。貴女には世話になりっぱなしなのに、酷いことを言つてしまつて」

クミはカナの胸に頬を寄せた。

「気にしない気にしない。私は自分勝手な女だつて言つたでしょう

? 私は、何の面白みも実力もない、自分にプラスにならない人間と関係を持つのは時間の無駄だと思ってる。でも、そんな私がクミとはうまくいくてるんだよ? つまり私はクミの能力を、とても買

つてゐること。クミは私の有能なパートナーだよ。私達は無敵のコンビなんだから……あ、こんなこと言つとまた人を利用するつて言われるかな？」

クミは顔を上げて微笑んだ。

「そんなことないわ、私も貴女から沢山のものを貰つてゐるから……私達の間には、公平なビジネスが成り立つてるわ」

PM・8:45

「どうする？ 私はこれからスケアクロウに行こうと思つてたけど、やつぱり一緒にいようか？」

カナは平静を取り戻したクミに尋ねた。

「ううん、いいわ。もう落ち着いたから……」

クミは大きく深呼吸すると、さつぱりとした顔つきで微笑んだ。「スケアクロウに行くんだつたら、リョウさんの写真でも撮つてくれない？ 壁紙にでもしようかと思つてゐる」

「クミ、貴女つて本当に男を見る目がないわね」

カナの台詞に、クミは少し拗ねたように言い返した。

「カナだつて男が目的なんでしょう？ 貴女の趣味だつて悪いわよ」

カナは意味深な微笑みを浮かべながら、うへん、と背伸びをした。「クミの悪いところは自分の経済的価値を低く見積もり過ぎる事だよ。やつぱり才能ある人間は有効利用しなくちゃね」

「その男もそんな人間なの？」

カナは楽しげに答えた。

「それはわからない。でも何か気になるのよね。女の勘つてやつかな？」

そしてカナは何を思つたのか、クミに近づくと彼女の頬に軽くキスをした。

「今度、一緒に遊びに行こうね。アミとかマコトも誘つてさ。人生は楽しまないとね」

クミは真っ赤になつた頬を誤魔化すように、乱暴に力ナを振りほどいた。

「行くんだつたらさつさと行きなさいよ！ まつたく、貴女はわけがわからないわ！」

クミが怒鳴るのも気にせず、力ナは笑いながら玄関のドアを開けた。

「じゃあね、行つてくるわ。そうだ、アメリカ行きの話は考えといてね！」

力ナはドアの隙間から手を振ると、あつという間に走り去つた。

「何なんだか、まつたく……」

クミはしばらく怒つたふりを続けていたが、やがて堪えきれずに吹き出した。

「……何なんだか、まつたく」

今度は笑いながら同じ台詞を呟いたクミは、久し振りに幸せを感じている自分に気がついていた。

それから、あることを思いついた。

一時間後。

クミの目前のモニターには、パソコンを使って『あの男』を社会的に破滅させる完璧なプランが表示されていた。

「今まで何で思いつかなかつたんだる。そうよ、何も直接会わなくたつてあの男一人破滅させるくらいわけないじゃない」

クミは早速作業にとりかかつた。

やがてお腹が減つてきたので、クミは夜食用に取つておくつもりだつたハンバーガーも食べることにした。

「……また買い出しに行かきや」

「快樂とは部分的に肉体を抜け出すことであり、小規模な蘇生であ

る。そして死とは恐らく彼岸へと続く痙攣であらう。ひみつび赤ん坊の泣き声が、快樂の頂点における叫びと似ていて、「元気のみんな」といふよ

「それって誰の言葉?」

ドロシーが尋ねる。

「え……つと、マルコム、ド……シャザル……かな?」

僕は壁の落書きの続きを読んだ。

辺りは暗く、中途半端な電灯の光がその暗さを余計に際立たせていたが、その小さな落書きは、他の落書きの中で不思議と僕の目を引いた。

「それってどういう意味?」

ドロシーが僕の腕を取つて囁く。

「さあね、よくわからないな。何となくわかるような氣もするんだけど」

「まあ、落書きってのはそんなものね」

ドロシーが小さく笑つたのが聞こえた。

クラブ『スケアクロウ』はオフィス街の一角、とあるビルの地下にあった。狭い螺旋階段を降りるに従つて、壁を突き抜けて聞こえてくる重低音が大きくなつてゆく。

「実はね。さつき屋上にいた時、君を後ろから襲つて犯してやるつかと思ったよ」

「へえ?」

「言い方は悪いけど、それくらい好きだつてことだよ。ここまで人を好きになつたのは初めてだよ」

「物は言いようね。でも、そこまで好きになつてくれたのなら、どうしてそうしなかったの?」

僕の体にもたれながら、からかうよつた口調で尋ねてくる。

「……それができないくらいに君のことが好きになつたんだよ」

僕が言つと、ドロシーはクスクスと笑つて僕の瞳を覗き込んでいた。

「本当?」

「……本当だよ」

僕はドロシーの瞳を正面から見つめ返した。

……もう、恐怖は感じない。

やがて螺旋階段が終わり、僕達は分厚い扉を開け放つてスケアクロウの中に入った。

第三話「カカシとセルロイドの美女とライオンがメリー・ポーラウンドの中で踊る

PM・9:40

扉を開くと、光と音の洪水が溢れ出してきた。パイプや電線が剥き出しのコンクリートの壁には色鮮やかなグラフィックアートが描かれ、床には空き缶やスナック類の「ゴミ」が散乱している。

受付の奥の壁には、ここスケアクロウの名前の由来である大きなワラ人形が、殉教したキリストのように磔にされている。絶え間なく続く重低音のビートと点滅する照明のせいで、建物全体が脈動しているようだ。

僕は壁のワラ人形が、僕に向かって手を伸ばす感覚に襲われた。

「ようこそ、スケアクロウへ。素敵な夜をお過ごし下さい」

「あ……ああ、ありがとう」

気がつくと、受付にいた男が僕のチケットをちぎっていた。

タキシードを着崩した格好のこの男、名をオカダといつ。僕の数少ない顔見知りの一人で、ここスケアクロウの経営者だ。昔は売れないミュージシャンだったらしいが、奥さんを貰つてからは真面目にクラブを経営している。

経営者と言つても、自分から積極的に受付に出て一人一人の客を歓迎するほどに親しみやすい人物だ。

と、彼の顔から接客用の表情が消え、見る間に険しいものになつた。

「いいのか？ リョウ達がお前を待つてるぞ、殺されに行くようなものだ」

「……男には行かなきやいけない時がある、つて誰かが言つてたよ「誰が？」

「『ここスケアクロウ』のボロリ……かな？」

「『母を訪ねて三千里』だろ？ お前もいい加減あいつらとは別れた方がいいぞ」

その後、オカダは僕の隣にいるドロシーが料金を払おうとしているのを見て手にキスをするんじやないかってくらい感激していた。

僕はため息をついて奥へと進んだ。

スケアクロウはこの類のクラブとしてはかなり大きく、ダンスの為のフロアとロッブース、カウンターと休憩用の席が、それぞれ別々に区画されている。

まだ時間が早いせいかフロアで踊る者は少なく、色タイルで床に大きく描かれたミケランジエロの『アダムの創造』を見分けることができた。

このクラブは昔、ある気狂いの芸術家のアトリエで、床の絵はその頃の名残らしい、というもつともそうな話を聞いたことがある。僕はその絵を見る度に、遠い昔に思いを馳せる。もしかしたら人と人との深く関係を持ち、人間が世界と結びついていたかもしれない時代を……。

だが現代の僕達は、世界との繋がりを確かめる術を持たない。僕は時々、自分の指先にプラスチックが埋まっているような感覚を抱くことがある。僕は世界と結びついてはいないのだろうか。

僕がフロアで踊る者達を見つめていると、いきなり誰かが僕の襟元をつかみ、引き寄せた。視界が回転し、僕は壁に叩きつけられた。「よくも救急車なんか呼びやがったな！」

衝撃で閉じていた目を開けると、ジンの大きく開かれた口が見えた。

「オイ！ 聞いてるのか！？」

「……うるさいな。リョウに会えればいいんだろ？」

僕はジンの手を振り払った。今までジンが苛立つの見るのは恐かつたが、今日は不思議と恐怖を感じない。何と言つか、ジンの怒りがひどく薄っぺらいものに思えたのだ。まるで鎖につながれた飼い犬が、無理をして吠えているように。

ジンはしばらく僕を睨んでいたが、不意に皿を逸らすといつぱつた。

「……向こうの席にいる。ついでこごよ」

僕は今まで何を恐れていたんだろ？　僕はジンの猫背な背中を見つめながら考えた。

「やるじゃない」

後ろに立っていたドロシーが、僕の肩を軽く叩いて微笑む。

「君に鍛えられたせいかな？」

僕は小さく笑って答えた。

「あ、いい女を連れてるじゃないか」

リョウは長い椅子の中央にだらしなく座っていた。彼の両側には年下の女の子が座つており、リョウの御機嫌取りをしている。

「よつこせ、ならず者のたまり場へ……お姫様」

ドロシーが無反応なのを見ると、リョウはフンと鼻で笑つて視線を僕に移した。

「お前があのオヤジを助けた件だがな。俺はどうでもいいと想つんだが、こいつらがうるさくてな」

「リョウはこいつに甘過ぎるんだ！」

ジンが腹立たしげに言った。僕に向かつてくるでもなく、リョウの椅子の向こうから僕を睨みつけている。

僕とドロシーの周囲をグループのメンバーが取り囲んだ。皆、無言で僕らを見つめている。どうやら僕は目立ち過ぎたらしく。

「お前もついてないよな。あんなオヤジを助けたばかりに、こんな目に遭うなんて……まったくバカなことをしたよな？」

リョウはビールの缶を持ったまま、右手の人さし指を伸ばした。その先にはドロシーの姿がある。

「いい女だ……貸してくれないかな？」

リョウの言葉と共に、周囲の男達がざわめいた。どうやら僕、ドロシーには目をつけていたらしい。

「断る」

僕の言葉に、ざわめきが更に大きくなつた。

「彼女は僕の所有物じゃない。誘いたかつたら直接彼女に言つてくれ」

れ

「嫌よ。ろくな男がないじゃない。貴方の方がいいわ」

ドロシーはゆっくりと周囲を見回すと、僕の肩にもたれかかった。ざわめきがじよめきへと変化する。

……正直、少し嬉しい。

「それじゃあ、自分の体で払つてもらおうか？」

リョウは立ち上がり、僕の前に立つた。僕はドロシーを背に庇つてリョウを見つめた。

「俺の足元にひざまずいて、靴を舐めたら許してやつてもいいぜ？」

「断るって言つたら？」

「うーん……どうしようかな？」

リョウは小さい子供に我慢を言われたように眉をひそめ、僕の顔を覗き込んだ。視界の端で、リョウの拳が握り締められるのが見えた。

次の瞬間、視界が乱れ、物音が消えた。

僕は数歩後退し、かるうじて倒れることなく持ちこたえたが、そこで膝が砕け、足元に片手をついた。

視界が正常に戻り、コンクリートの床が見えた。口の中に鉄の味が広がり、床に赤い零が落ちる。意識が混濁し、体全体が冷たくなつたが、痛みはそれほど感じなかつた。痛過ぎて感覚が麻痺してしまつたのかもしれない。

その時、リョウが手を伸ばし、僕の襟をつかんで引き上げた。軽く貧血でも起こしたのか、天井の照明がやけに明るく感じられる。「へえ、驚いたな……氣絶させないよう手加減したのは確かだが、倒れもしないとは思わなかつた」

聴覚も戻ってきた。周りの奴らが騒ぎ立てる中、リョウの顔が間近にある。

「何か言つことがあるだろ？」「

「ゆっくりと、聞き分けの悪い子供を諭すように、リョウが尋ねる。

「……リョウ……」

「何かな？」

僕は必死で頭を働かせた。このままリョウに謝罪した方が得策だろう。今までの僕ならまず間違いなくそうしたはずだ……でも、今日はドロシーがいる。

僕は口元を拳で拭い、言った。

「リョウ、僕は自分が間違つたことをしたとは思つてないよ」
周囲の男達が信じられないといった顔をする。

「リョウ！ そんな奴は仲間じやねえ、殺しちまえ！」

ジンが椅子の背を乗り越えそうな勢いで叫んだ。

最も意外な反応をしたのはリョウだった。僕の答えを聞いた途端、目を大きく見開いて動かなくなつたのだ。

「……なあ。まさか、それは本気で言つてないよな？」

「…………本気だよ」

リョウの瞳から感情の灯が消えた……そして次の瞬間、大きく燃え上がつた。

「殺すぞ！ てめえ！」

ほとんど金切り声に近い声でリョウが叫ぶ。僕の襟をつかむ力が信じられないくらいに強くなつた、その時。

「ちょっと待つた！」

オカダが僕らの席に入り込んできた。

「店内での騒ぎはやめてくれ！ ここでのルールは守つてもらわなきゃ困る！」

周りの男達がオカダを排除しようとしたが、彼はかまわずリョウに近寄つた。

「リョウ、俺はお前達がやつてることくらい知つてゐんだからな。もし何かあれば、即刻警察に突き出すぞ！」

「…………わかったよ」

リョウは僕をつかむ手を放したが、それはオカダの言葉に従ったわけではなく、興奮が多少鎮まつたからであるらしい。

リョウはもう、いつもの不敵な笑みを取り戻していた。

「だが、俺はこいつに話があるんだ。話をするくらいならいいだろ？」

「揉め事とはチェックするからな？」

「わかつてると、話すだけだ……いいな？」

二人は同時に僕の方を見た。オカダの視線が「やめておけ」と言つていて。

僕は衣服を整えると、横目でドロシーを探した。見れば座席とフロアの境目の柱に寄りかかり、静かに僕の方を見つめている。

「……わかつたよ、リョウ」

彼女の態度に少し落胆しながらも、僕はリョウの申し出を受けた。

「じゃあ、こっちに来いよ」

リョウは指で方向を示した。

「何度も言つが、揉め事は……」

「わかつてると、それより、メインのロッハいつになつたら来るんだ？ これじゃあ俺が回した方がまだマシだぜ？」

リョウはがら空きのフロアの方を指差した。ただでさえ踊つてゐる人数が少なかつたのに、僕らの騒ぎで皆がこちちらで集まつて來ている。

「もうすぐ来るよ……色々とね」

オカダは自分がこれ以上は干渉できないことを語ると、妙な台詞を残して引き下がつた。

「さて……一人つきりで話をしようか？」

「ああ……わかつたよ」

僕達は人垣を割つて移動し始めた。

正直言つと、まだ口の中が痛い。これから先は本当に危ないかもしれない。しかし、ここまで来た以上、退けない。

僕がドロシーの隣を通り過ぎる時、ドロシーは一本の指を唇に当

てると、その指を銃身に見たてて僕に向けて撃つ真似をした。

僕は歩きながら軽く心臓を押さえて片目を閉じた。僕らにはそれで十分だった。

これは後から知ったことだが、僕の後ろを歩いていたリョウはドロシーの身ぶりを眺めていた。

その時、ドロシーはリョウを見て不思議な笑みを浮かべたそうだ。まるですべてを見通しているかのような目で、彼を見返していたらしい。

「いいか、その女には手を出すな！ わかつたな？」

ドロシーの横を通り過ぎた後、リョウは振り返って皆に言った。

不満そうな声を上げる者もいたが、反論する者はいなかつた。

第三話「カカシとセルロイドの美女とライオンがメリー・ポー・ワンドの中で躍る」

PM・10・05

「えっと、ドロシーさん……でしたよね」

柱にもたれたまま目を閉じていたドロシーは、声をかけられて目を開けた。

「……ああ、カナちゃんね」

「先輩は何処ですか？ オカダさんに、リョウさんと先輩が喧嘩しているって聞いて……」

ドロシーがトイレの方を指差すと、カナの顔色がサッと変わった。「まあいですよ。先輩、殺されちゃいます！」

カナの真剣な台詞に、ドロシーは軽く笑つた。

「どうして笑うんですね？」リョウさんは恐い人ですよ！」

「それはどうかな？ まあ、おとなしくここで待つてましょ」つよ」

カナはドロシーの楽しげな瞳を睨みながら呟いた。

「……貴女、本当に先輩の何なんですか？ 先輩のこと心配してないんですか？」

「どうでしょうね？」

ドロシーは咳き、そうだ、と手を叩いた。

「何か飲み物でも買つてきてくれない？ 喉が乾いちゃつた」

「……どうして私が？」

「いいじゃない」

カナは不機嫌な顔でドロシーを睨んでいたが、小さくため息をついてドロシーから金を受け取り、ふと鼻を触つて呟いた。

「石鹼、安物使つてますね。三流のラブホテルの物みたいですよ……まあ、どうでもいいんですけど……」

そしてカナは精一杯嫌味な響きを込めて言つた。

「先輩と寝たからつていよいにならないで下さいね、おばさん！」

声をかけてきた男を突き飛ばしながらカウンターの方に向かう力ナを見送りながら、ドロシーはしばらく呆気に取られていたが、やがて可笑しさを堪えるように笑い出した。

「面白い子ね」

それからドロシーはトイレの方を振り向いた。

「さて、こつちはどうなるかな？」

「悪いな、ついカツとなつちました。顔は大丈夫か？」
「ああ……大したことはないよ」

僕達は男子トイレの中に入った。スケアクロウのトイレはクラブのものとしては清潔で、主要な駅のトイレくらいの大きさがあった。僕は一対一の決闘に臨むガンマンのような気持ちでトイレの中に入つたのだが、僕と一人つきりになつた途端、リョウは態度を変えた。

「周りの奴らのこともあるしな……まあ許せよ」

リョウは洗面台で蛇口から直接水を飲みながら言った。

「ジールって、あんまり美味くないよな。いつも気分が悪くなる。どうしてあんなものが売れるんだろ? ワインは好きなんだけどなあ」

「さあね……僕はアルコールは苦手だから」

僕は警戒を解くことなく、リョウの隣の洗面台に少しづつ近寄った。

確かにリョウの立場上、彼がああするのは当然だ。仮に彼が、本当に怒つていなかつたとしても……説明としては筋が通つてる。
「そんなに警戒するなよ。怒つてなんかいないって」
リョウはついでに洗つた顔を拭いながら言った。

「確かに、お前が生意気なことを言つた時にはカツとなつたよ。でも、今はお前のことは怒つてない。本當だつて。それどころかお前のことは見直したよ。俺に面と向かつて言い返す奴なんて滅多にいないからな」

「……そうかな？」

僕は、もしかしたら本当にリョウが怒っていないのかもしないと思い、少し緊張を解いて洗面台の鏡を見つめた。左の頬から顎にかけて、どす黒く腫れ上がってしまっている。水で冷やした方がいいかもしない。

「ところで、あの女は誰だ？ 昼間はいなかつたような……」

「昼間？」

「いや、こっちの話だ」

リョウはそれ以上は何も言わなかつた。誰か知り合いにでも見られたのだろうか？

「それにしても、いい女じやないか。もう寝たのか？」

「…………」

リョウは僕の無言から、まだ何もしていないと判断したらしい。僕のいる洗面台に近寄ると、鏡を覗き込んで衣服を整え始めた。

「なあ、あの女のこと好きなんだろ？ ……ほら言ってみろよ」

リョウが悪戯っぽく笑い、からかうように言つ。僕の強張つていた顔の筋肉が緩み、自然と笑みを作ったのが鏡の中で見えた。

「そうだね……彼女のことは好きだよ。彼女の前じや、ちょっと格好をつけたくなるくらいにね」

僕は手を洗いながら、リョウに立ち向かえたのはドロシーの前でこれ以上格好の悪い所を見せたくないからだということに改めて気づいた。僕も所詮はそこらの男と同じように意地つ張りだとうことだらうか？

僕は無性に可笑しなつた。そして、それによつてリョウと対等に話せるようになったのなら悪くないとも思った。

だけどこの時の僕は、まだリョウのことをまったく理解していかつた。

「お前は大した奴だよ
リョウは言つた。

「他の奴みたいに能無しでもないし、物事をちゃんと自分の頭で考
えてる。それに結構、やる時はやるしな……勇気があるよ」

リョウは手を伸ばすと僕の即頭部の髪をかき上げた。

「正直、大した奴だと思うよ……ただなあ」

「……何だい？」『ただ』って

リョウの手が僕の耳の所で止まつた。リョウの手は冷たかった。

「ただ……その方向は間違つてゐるな」

次の瞬間、視界が下方に九十度回転し、僕の頭は洗面台の中に押
し込まれた。

「お前は何もわかつていない」

リョウは顔を上げようともがく僕の頭を信じがたい腕力で押さえ
つけると、水を溜める為のコックを引き上げ蛇口の栓を全開にした。

「お前は何もわかつてないんだ」

僕は洗面台に頭を打ちつけられた衝撃も忘れて必死に抵抗したが、
リョウの手はがつちりと僕の頭を押さえこんでいてびくともしない。
しかも親指の爪が肌に食い込み、破れた所から血が流れ始めた。

「血が出てるな……水が赤くなっちゃってる」

ひどく遠くの方からリョウの声が響いてくる。僕は無我夢中でリ
ョウを蹴り飛ばして何とか水面上に顔を上げ、激しく咳き込んだ。

途端、リョウが僕の後ろ襟をつかみ、一気に床に引き倒した。昏
倒している間もなく、今度は強引に立たせられる。

一瞬激しい貧血を起こし、頭の中が真っ白になった。

気がつくと、リョウは僕を自分の体で壁に押ししつけるようにして
立つていた。

「……俺はお前のことを、高く評価してるんだぜ？」

リョウはポケットからナイフを取り出すると、刃を出して僕の目の
前にちらつかせた。

「だが、お前は能力を間違つた方向に使つてしまつてゐる……わか
るか？」

リョウの顔は青ざめ、目だけが爛々と光つてゐる。

「俺には力がある。誰にも負けない力がな……俺は年寄りや女とは違う。あいつらは無力で何もできない。だから俺が支配する……簡単な理屈だろ？ 俺が年寄りを殺して何が悪い？ あいつらには若さも力もない、あるのはせいぜい金くらいだ。くだらないとは思わないか？ あいつらがこのくだらない国を更にくだらなくしているんだ。俺達にはこの国を良くする義務つてのがあるんだろ？ だったら、あいつらを殺して金を取つて何が悪い。少しばこの国が良くなるつてもんだろ！」

リョウは僕の髪をつかんで顔を持ち上げると、喉にナイフを突きつけた。

「女だつて同じだ。あいつらは恋だの愛だのと言つてすぐに男を責める。だが、あいつらが本当にそんなものを信じてるのか？ あいつらは自分さえ良ければ他人がどうなつてもいいんだ。あいつらは恋だの愛だのと言つて発情して子供を生む、それだけだ。少しでも金に困れば、自分の子供だつて売り飛ばすかもな……何処かの金持ちにでもな！」

そこまで一気に喋ると、リョウはナイフを退けて僕の肩に額を当てた。リョウの左手は僕の体を抱きかかえ、力なく垂れ下がった右手のナイフが壁に当たつて音をたてる。

「……誰かみたいにな……」

リョウは僕の肩から顔を上げることなく話し始めた。

「お前だつてわかるだろ？ 女なんかくだらないんだ……アコミの時にわかつたる？」

「……アコミ？」

どうしてこんな時にアコミの話が出てくるんだ？

「あれは……君が仕組んだんだろ？ 確かに……つまくはいかなかつたけど」

僕は今まで、アコミについてリョウと話すことを探けていた。だが、彼女について聞きたいことは沢山ある。と、リョウが不意に顔を上げて笑い出した。

「うまいく？ そんなわけないだろ？」 あいつとお前がうまくい
つたら奇跡だよ

「ならどうしてあんな」とを言つたんだよ?
僕と寝たら抱いてやるなんて……」

「あいつはプライドが高いからな。お前と衝突する」ひとはわかつてた……頭いいだろ?」

リミーは僕から離れると悪戯っぽく笑った。僕は壁から一步も動けなかつた。

「…………それじゃあ、来るで……」「

授業の一環で、あわてねがただたゞ、女子での立派分の欲望の

「為なふ誰とでも寝る口とかでござんたよ」

た。僕は体の中に何か冷たいものが凝り固まっていく気がした。

彼女とは……総束通り

残酷なものだつた。

「俺は女どもとは違うんだ、自分の寝る相手は自分で決める。しつこいから一、三発殴つたらおとなしく帰つたよ。それからすぐだつたかな？　あいつが学校で問題を起こしたのは、まったくバカな奴だよな」

「ヨリウ！」

僕はリョウに向かって拳を振り上げた。しかし僕が拳を振り下ろすよりも早く、僕の喉元には再度ナイフが突きつけられていた。

「お前が俺に勝てると思ってるのか？　いい加減、利口になれよ」

リョウはナイフを持つていないので左手で僕の髪をかき上げ、剥き出

「俺に従え。それが生きる道だぜ？」

僕らは凍りついたように動かなかつた。

髪から流れ落ちる冷たい雫が、汗と混じり合って下着を肌にへばりつかせる。

僕の体の内側を、恐怖とも怒りとも判断のつかない嫌な感じが這い回っていた。

リョウはしばらく何の感情もない目で僕を眺めていたが、不意にナイフを退けた。

「そんなに固くなるなよ。夜は長いんだ、楽しもうぜ？」
そして小さく微笑むと、ナイフの刃を戻してトイレスの出口に向かつた。

……僕は負けたのだろうか？ 僕は考えた。僕はここに、リョウと一緒に騎討ちをするつもりでやってきたはずだ。まるで映画のヒーローみたいに。

客観的に見れば、僕はリョウに何一つできず、散々痛めつけられたのだから、やはり負けたということになるのだろう。

だけど何かが違う。リョウも完全に勝ったわけじゃない気がする。まるで違うルールのゲームを一人でやっていたようだ。

ヒーローは正しいから勝つのだと誰かが言っていた。強いから勝つのだとも。

でも、正しいとか強いつてのが、一つじゃなかつたらどうするのだろう？

「カッコイイわよ、だいぶ派手にやつたみたいね」

トイレスを出ると、すぐそこの壁にもたれてドロシーが立っていた。
「いいや、やられっぱなしだよ」

僕はドロシーの横まで行つて壁に軽く後頭部を当てた。壁を通してフロアの振動が頭蓋骨に伝わってくる。首をひねるとリョウ達が見えた。ジンと数人の者が僕を見てリョウに何か言つてはいる……どうも僕が無事に動いているのが気に食わないらしい。やがてリョウがフロアに出たので、ジン達は僕の方を色々しげに見つめながらもそれに続いた。

「昔、正義つていうのは一つだと思つてた。何か一つの大きな真実があるんだって」

僕は壁にもたれながら呟いた。ドロシーは何も言わずにフロアの方を眺めている。

「僕は小さい頃から、他の子とは親しめなかつた。でも、それは自分が変なんだと思っていたんだ。普通の子供じやない自分が変なんだってね」

リョウは黒いコートを脱ぎ捨てると、フロアの中央に進み踊り始めた。速いビートのテクノ//コーディックに合わせて、リョウの体が回転する。

「だから小さい頃の僕は、他人に合わせようと必死だつた。いわゆる『良い子』にならうとしてたんだ。宇宙人が地球人に成りますようとするようにな……でも、僕は普通の子供にはなれなかつた。僕は未だに変な子供のままだ」

僕は大きく息を吐き出した。

「……小さい頃は、たつた一つの真実があるんだって思つてた。誰もがそれを目指しているんだと……でも、真実は一つじやなかつた。僕が今まで信じていた真実は、僕を救つてはくれなかつた。僕は何をすればいいんだ？　何処に行けばいい？　……何を信じればいいんだろ？」

リョウは降り注ぐ色とりどりの光を浴びて踊つていた。彼の肉体が主の意志に忠実に従い、美しい動きを作り続けている。彼の周りには、その動きに魅せられたように大勢の者が集まり、一緒になつて踊つっていた。

「違うから面白いんじゃないの？」

不意に、それまで黙つていたドロシーが呟いた。

「……何だつて？」

僕が尋ね返すと、ドロシーは顔を動かさずに続けた。

「普通普通つて言つけどさあ、この世の中に『普通』なんてないよ。みんな何かを抱えてる。あの男だつてね」

ドロシーの視線の指し示す先には、踊るリョウの姿があった。僕は先程垣間見たリョウの激情を思い出した。

「アタシのことは変わってるから好きなんでしょう？ あんなこと言われたのは初めてよ。ちょっと傷ついたなあ」

ドロシーは微笑み、僕の左頬に優しく手を寄せた。

「アタシも、貴方のことは変わってるから好きよ」

左頬は少し痛かった。

「先輩、大丈夫ですか？」

不意に後ろから声がかかり、右頬に冷たい物が押し当てられた。

振り向くと、カナが缶ジュークを持って僕を見上げていた。

「ああ、カナちゃんか……吃驚したよ」

「お取り込み中でしたか？」

からかうような口調で言い、カナは悪戯っぽく微笑んだ。

カナは昼間の制服姿とは違つて、体に合つた黒いセーターを着ていた。透き通るような白い肌が更に強調され、目元に薄く施されたメイクがモルフォ蝶の鱗粉のようで美しい。

「心配したんですよ。先輩がリョウさんと喧嘩したって聞いたから

……

カナは体を密着させるようにして近づいてきた。タイトなセーターは却つて体の線を感じさせる。僕はカナが結構メリハリのあるスタイルをしていることに気がついた。

こんなに可愛い子が売春をするのは良くない。僕が金だけはある中年のオヤジだつたらどんな大金を要求されても絶対に買うだろうな、つてことも含めて本当に良くない。僕はカナの折れるんじやないかつてほど華奢な肩をつかみ、優しく押し返して微笑んだ。

「ありがとう、大丈夫だよ。ちょっと殴られたけどね」

僕は頬に手を当てた。ドロシーの前でもそつだが、カナの前でも少し格好をつけてみたくなる。後ろでドロシーが笑ってるんじやないかとも思うが。

「カツコイイですよ、先輩。リョウさんとやり合つなんて」

……カツコイイか。僕は少し可笑しくなつた。

「全然カツコよくなんかないね。とんだ茶番だよ」

苦笑交じりに咳いた途端、僕を見つめるカナの視線が戸惑つたようになる。しかし僕がどうしたのだろうと思つた時には、カナは元の表情に戻つていた。

「そんなことないですよ」

カナはもう一度ニッコリと笑うと、後ろで僕らを眺めていたドロシーを（やつぱり笑つてた）引っ張つて少し離れた所に連れて行つた。

「……何か嫌がられるようなことを言つたかな？」

僕は少し不安になつた。

「どうしちゃつたんですか、先輩は？ 昼間より数倍はカツコイイじゃないですか？」

ドロシーが意地悪く微笑む。カナは微かに眉根を寄せ、ドロシーを睨みつけた。

「まさか、貴女のせいだとか言わないで下さいね！」

「別にあいつが誰と寝てもかまわないんじゃなかつたの？」

ドロシーの問いに、カナは一瞬詰まつてから答えた。

「……あの人が誰と寝たつてかまいませんよ。別に自分だけのものにしたいってわけじゃないですから……でも」

カナは小さく息を吐き、独り言のように呟いた。

「……あんな変わった人を好きになるのは、私くらいだと思つてたのに……」

「その台詞、あいつに聞かせてやりたいわ。何て言うかな？」

可笑しそうにクスクスと笑われ、カナは少し声を荒げた。

「悪いですか！？ 私は優しいだけで何も面白い所がないよりは変わつてゐるくらいの方が好きです！ すぐに底が見える人なんて何が

面白いんですね！？」

「確かにね。でも色々言つてるけど、本当にあいつのことが好きなのかどうか」

「……経済的に興味ある素材だと思つてるんですよ。長い投資をしてもいいって思うくらいにね」

カナは自分がからかわれていることを悟り、意識的に落ち着いた声で答えた。

「私は人生はビジネスだと思います。恋愛だってそうです。どうせ恋をするなら自分にとつてプラスになる人の方がいいじゃないですか。先輩はとても興味深い存在です。私はあの人のこと『買って』るんですよ」

カナの答えに、ドロシーは満足げに微笑んでカナの肩を叩いた。

「貴女みたいな人がいるなら、この国の将来も明るいわね」

それから声を低くして呟いた。

「彼に目をつけてるのは私たちだけじゃないから気をつけなさいよ」
カナはしばらくドロシーを見つめていたが、やがて表情を和らげた。

「貴女も変わった人ですね……何者なんですか？」

ドロシーはカナの額に軽く口づけると、笑つて言った。

「実は魔女なのよ」

「へえ……私、本物の魔女さんに会うのは初めてです」
カナも額を触りながら微笑んだ。

僕はドロシーとカナが話をしているのを眺めていた。

何か言われてるんじゃないだろうか？ ドロシーには色々と情けないところを見られてるからなあ。

「まあいいか……本当のことだからなあ……」

僕は半分諦めて呟いた。

その時、一人が僕の所に戻ってきた。

「先輩、せつかくスケアクロウに来たんですから踊りましょうよ。

ほら！」

カナが僕の手を取り、強引にフロアに連れてこよう。

「ちょっと待つてよ、今日はまつ帰るつもりなんだ。これ以上ここのいたら、また騒ぎになるかもしれないし……」

「何言つてるんですか。そんなこと気にしなくていいですよ」

「気にするなつて言われても」

カナは僕の言葉に耳を貸さず、やけに楽しげに僕の手を引っ張つていく。ドロシーまで僕を後ろから押し始めた。

「モテるわね、色男さん。夜は長いのよ、楽しまなくつちや」

「……わかったよ。だから手を放してくれ」

僕は乱暴にならないよう一人の手から逃れようとした。

……と、その時。スケアクロウの入り口の方で何か騒ぎが起つた。

「何だろ？」

「誰か来たみたいですね」

見たところ喧嘩という雰囲気ではないし、カナが言つた通りのようだ。オカダの言つていたメインのロッジだろうか？

「面白いのが来たわね」

ドロシーが呟いた。

「リョウー！」

「何だよ、邪魔するな」

「今日のメインのロッジで知らされてないだろ？ どうも『K』らしいんだよ！」

リョウは踊りを続けながら呟いた。

「へえ、あいつか……刑務所に入つてたんじゃなかつたのか？」

「昨日出所したらしいんだ。それで受付が呼んだんだよ。あいつら仲がいいから……」

「成程ねえ。で、それだけか？」

鬱陶しそうに仲間を睨む。

「そ、それだけじゃないんだよ。あいつらも来るらしいんだ、『力

ウボーイ』達が……」

リョウは今度は明らかに不快感を顔に出した。

「あのジジイか……！」

その時、スケアクロウに数人の者が入ってきた。

第三話「カカシとセルロイドの美女とライオンがメリー・ゴーラウンドの中で踊る」

PM・10・37

それは変わった集団だった。

……いや、『とても』変わった集団だった。

最初にオカダにつき添われてやつてきたのは、まるで格闘家のよう立派な体格の男だ。はち切れそうな肉体をシンプルなTシャツとジーンズで包み、首には大きなヘッドホンをかけている。顔つきは精悍で黒く太い眉の下に獲物を狙う鷹のような眼が光り、両手には大きな鉄製のカバンを持っていた。

彼はこの界隈では有名なDJで、通称『K』と呼ばれている。本名は知らないが、そのテクニックと腕の強さを知らない者はここにはいないはずだ。数ヶ月前で何かいざこざを起こして刑務所に入れられたらしいが、最近になって出所したんだろう。

次に現れたのは数人のけばけばしい服装の女……いや、女装した男達だつた。ラメや羽飾りで派手に飾りつけた服を纏い、顔からはみ出るんじやないかつてほど化粧を塗りたくつた顔で、けたたましく笑いながら話をしている。最も瘦せた男が入り口の方に振り返り、羽飾りをはためかせて誰かを呼んだ。

呼ばれてやつてきたのは、思わず息を呑むほどに美しい女だつた。年は二十代前半といったところだろうか。しかし、童顔とも言える顔に年相応の表情はなく、まるで人生に疲れた熟年の女性のような疲労と倦怠に満ちている。

身長は高くもなく、低くもない。胸から腰にかけてのラインは信じられないほど豊かでなめらかな曲線を描き、濃い青に染められた髪は短く切り揃えられ、幾つもの小さなカールを作りながら顔にかかる。肌は本当に血が通っているのか疑問なほどに白い。大きな青い瞳が、鏡のようにフロアの電飾を映し込んでいる。

彼女は背中や胸元が大きく開いた黒いシンプルなナイトドレスで着飾つており、純白の羽飾りを肩にかけていた。ドレスの丈はかなり短く、逆に床まで届きそうな羽飾りが、細く白い脚を中途半端に隠している。

何故、僕が女装の男の中に混じつた彼女を女性だと判断したかについてには、僕自身はつきりとした根拠が思いつかない。男の勘といふやつだろうか？ とにかく、極めて優れた芸術作品が見る者に訴えかける何かを持つように、彼女の美しさには迫力があった。

初めてドロシーを見た時にもその美しさに心奪われたが、彼女の持つ美しさはドロシーのそれとはまったく異なるものだった。ドロシーには野生の獣のようなしなやかさと存在感、そして危険な香りがあるが、彼女は纖細な硝子細工のような細やかさと透明感、そして今にも壊れてしまいそうな儂さに満ちている。

僕は彼女が人間ではなく、精巧なセルロイドのマネキンだと言われば信じたかもしれない。実際一目見た瞬間には、彼女が男か女かということよりも、果たして本当に生きている人間なのかどうかの方が判断できなかつたのだから。それほどに、彼女からは生きている人間の雰囲気がしなかつた。

彼女は形の良い細い眉をひそめて隣の男と何かを話している。表情から察するに、ここに来たくはなかつたようだ。やがて彼女は隣の男では話にならないと判断したらしく、男に軽く手を振つて最後尾へと移動した。

「……あ、カウボーイだ」と力ナが呟いた。

最後尾にいた男……カウボーイは壮年の外国人で、白が混じりつある灰色の髪にエメラルド色の瞳をしている。背はかなり高く、痩せた体に白い花崗岩を刻んだような筋肉が張りついている。

最初に外国人と言つたが、実際には日本人とアメリカ人との間に生まれた混血で、ごく自然に日本語を話しているのを聞いたことが

ある。職業は実業家でアメリカに本社を持ち、世界各国に支社を抱える国際的な会社の社長なのだそうだ。リョウの父親の会社もそうだが、具体的に何をしているのかは知らない。

勿論日本にも支社がある。それは隣の町にあるそだが、彼はこの町の方が気に入っているらしい。

Q・ところで彼は何故『カウボーイ』と呼ばれているのか？

A・それは彼がいつもカウボーイの服装をしているから。

カウボーイは被っていた大きなカウボーイハットを指でずりすと、少し腰を屈めてまっすぐに彼女の目を覗き込みながら話を始めた。二人はしばらく話をしていたが、どうやらカウボーイが説得に成功したらしい。女は不機嫌そうにカウボーイの胸を叩き、女装集団に加わった。カウボーイは苦笑いを浮かべると、西部劇そのままの飾りのついた上着を整え、僕達の方へ歩いてきた。

女装集団とセルロイドの美女が通過し、カウボーイも僕らの前を通り過ぎる……と思つたら、彼はドロシーの前で足を止めた。

「何でしょうね、先輩」

いつの間にか僕の背後に隠れたカナが囁く。

「さあ……」

僕がカウボーイを見るのはこれが初めてではない。先程も言ったが彼はこの町が気に入っているらしく、アメリカにいるよりもこの町にいることの方が多く知人も多い。ここスケアクロウでも何度か見たことがある。もつとも、リョウが彼を毛嫌いしているので、僕は話をしたことも近寄つたこともない。

「これはこれは。こんな所で同類に会えるなんてね」

カウボーイは流暢に喋りながら帽子を脱いだ。ドロシーに向かつて優雅に一礼し、腰を曲げたまま顔を上げる。

「踊つてくれないかい？ カウガール」

間近で見るカウボーイの瞳は、本当に深いエメラルド色をしてい

た。細かい皺の刻まれた精悍な顔の上で、宝石のように輝いている。

「うーん、どうしようかなあ？」

ドロシーは焦らすように言い、僕の方を見た。

「連れもいるしなあ

「それは残念だな……でも踊るだけならいいんじゃないかな？」

カウボーイはドロシーの視線を追つて僕の方に目を向けた。

その瞬間、僕の体がわずかに震えた。恐かったのではない、彼の瞳に吸い込まれるような感じがしたのだ。僕は彼の視線から逃れようとした。しかし僕が目を逸らすよりも先に、カウボーイの視線からは力が消えていた。

「それに彼には、もう一人美しいパートナーがいるじゃないか。一人占めはよくないな。君が僕と来てもかまわないだろ？……そうは思わないかな？」

カウボーイが肩をすくめながら僕とカナに尋ねる。僕が戸惑っている間に、カナが後ろから顔を出した。

「いいですよ。ドロシーさんはその人と踊つて下さい。私は先輩と踊りますから」

カナは『美しい』の一言で警戒を解いたらしい。

……意外とわかりやすい性格かもしれない。

確かにカウボーイには人を惹きつける不思議な魅力がある。もつとも、それは彼の個性の強さからくるものであり、彼が一般的な社交術に長けているからではない。おそらく、彼の個性が理解できる者以外には嫌われやすいタイプだろう。

それにもしても、別に上流階級のパーティーで社交ダンスをするわけじゃないんだから、男女のペアで踊る必要が何処にあるんだ？

「そうね……でもどうせだったら、もつと大勢で踊った方が楽しいかな？」

僕の心を見透かしたかのように、ドロシーがカウボーイを待つている女装集団に目を向ける。それに気づいたのか、先程セルロイドの美女の隣にいた男が近くまでやってきた。

「ハーア。アタシはミンクよ。よろしくね」

飴玉を舐めるような猫撫で声で『彼女』は自己紹介をした。喋る時に口と目が淡水魚に似た動きをするのが印象的だ。背は高く、力ウボーイと比べても見劣りしていない。百九十近くはあるんじゃないだろうか？

……さつきから僕の方を見つめているように見えるのは、きっと氣のせいだろう。

「先輩、見つめられますね」

「…………氣のせいだよ」

周囲の者は皆、怯えたように遠巻きにこちらを眺めている。多分、こっちの方が正しい反応なのだろうが……カナはすっかり慣れたらしく（それでも僕の背中に張りついたままだけ）、興味津々カウボーイ達を眺めている。

何だか違う世界に迷い込んでしまったようだ。

「ここに来るなと言つただろうが！」

不意に音楽が止まり、大きな声が放たれた。

見ればリョウがこちらを睨みつけている。リョウは瞳を怒りに燃やしながら、僕らの……いやカウボーイ達の方に近づいてきた。

以前、カウボーイとリョウはここで対立したことがある。僕はその場にいなかつたので詳しいことは知らないが、以来リョウはカウボーイ達のことを必要以上に嫌っている。カウボーイとその仲間は、この街で彼の通りにならない唯一の存在なのだ。

「何だ君か。しかし来るなと言われてもねえ」

カウボーイが動じた様子もなく目を細める。リョウは僕を一瞥すると短く舌を鳴らし、再びカウボーイを睨みつけた。

「黙れ！ ここはお前達のような奴等が来る所じゃない！」

「しかしねえ……」

カウボーイは大袈裟に肩をくぐめてみせた。

「私達は全員金を払つてチケットを買つてている。だからここにいる

権利があるはずだ。それに今日は『K』の復帰を祝いに来たんだ。
大目に見てくれないかな?」

どうも音楽が止まつたのはDの入れ替えをする為だつたらしい。
どうやら交代があることを知らせていなかつたらしく、『K』はオ
カダと共にDのベースから前のDを追い出そうとしていたが、リ
ヨウとカウボーイが揉めていることに気づいて僕の方に目を向け
た。

「君は手を出すな」

カウボーイは『K』に手を振り、リヨウに向かつて言った。

「彼とは長いつき合いだ……今日は騒ぎを起こしたくないんだよ

「そうよ、リヨウちゃん。一緒に踊りましょうよ?」

ミンクが隣から声をかける。

「気安く名前を呼ぶな!」

リヨウは激怒してミンクを睨みつけた。

「俺はお前達のような気持ち悪い奴らが一番嫌いなんだ。ここから
出て行け! 一緒にいるだけで気分が悪くなる!」

「何ですって!?

ミンクが口を大きく開きながらリヨウに詰め寄つた。

「何が気持ち悪いって言うのよ? アタシ達の何が悪いって言うの

!」

「近寄るな!」

リヨウがミンクに向かつて手を振り上げる。しかしその手はカウ
ボーイによつてつかみ取られた。

「まったく、年寄りに無理をさせるね君は!」

リヨウとカウボーイの腕力が拮抗し、一本の腕が小刻みに震え始
める。二人が睨み合つてゐる隙に、ミンクは悲鳴を上げながら仲間
の影に隠れた。

「キヤーッ、キヤーッ、恐かつたわ~!」

「……さつ今までの威勢の良さは何処に行つたんだ?」

理解に苦しむ僕の横には、いつの間にかセルロイドの美女がいた。

彼女は冷めた目でカウボーイとリョウを眺めていたが、

「……くだらない……」

吐き捨てるよつに呟いた。

「この野郎……！」

リョウは腕力を振り絞ってカウボーイの手を振り解いた。

「なめた真似をしやがって！」

「リョウ！ ここで騒ぎを起こすんじゃない！」

リョウが殺氣立っているのを見て、オカダが慌てて駆け寄ってきた。フロアは静まり返り、皆が僕達の方を見つめている。

「リョウさんやめて下さい！ ここで誰が踊ろうとかまわないじゃないですか！」

いつの間に僕の後ろからいなくなつたのか、カナがリョウの前に立つて叫んだ。

「……若松か……お前はそいつらの味方をするのか？」

リョウは虚ろな声で言った。リョウはカナの青春を知つても態度を変えなかつた数少ない人間の一人だ。それどころかカナのことを気に入つてゐるようでもあつた。もしかしたら、カナならリョウと対等に話せるかもしない。僕の心に楽観的な考えが浮かんだ。しかし、その考えはやはり甘かつた。

リョウは無表情にカナを突き飛ばし、カナは背中から床に倒れた。「リョウ、女の子に何てことをするんだ！」

「……………退けよ」

カナとリョウの間に割つて入つた僕に、リョウはひどく疲れたような口調で呟いた。

「退けよ……もうこれ以上、俺を怒らせるな

「リョウ、ここは踊る為の場所だ。僕達だけのルールが通用する場所じゃ……」

「お前は黙つてろ！」

リョウは僕を乱暴に押し退けた。

「それ以上言つたらお前もここにいると同じだ。ただではすまないぞ！」

「なあ、もうこいつは俺達を裏切つてんだから同罪だよ？」
ジンが小さく咳く。しかしリョウはジンの話など聞いていなかつた。

「君はどうして私達を日の敵にする？」

「お前達がここにいるだけで……地球上に存在するだけで俺の世界を汚してるんだ。だから俺はお前達が許せないんだ」

カウボーイは小さく笑つた。

「成程、君はこの星の王様か。だが私にも私の世界がある。私の友人達にもね。そしてそれは他人の通りにはならない世界だ……特に君みたいなガキにはな。君が私達の世界を認めないと言つのなら私も考え方がある」

カウボーイは拳を手の平に打ちつけた。

「まったく、年寄りは大切にしろと最近の家庭では教えないかな？ 手がかかって困るよ」

「ちょっと待て二人とも、店の中で騒ぎを起しそうな、おい『K』、黙つてないで何とか言つてくれ！」

オカダが髪を搔き亂つて叫ぶ。『K』は騒ぎに目もくれず機材をチェックしていたが、やれやれとため息をつくと低い声で言つた。
「さつきの奴が言つた通り、ここは踊る為の場所だ。喧嘩をするなら外でやれ」

言いながら、二つのカバンを同時に開く。中から一枚のレコードを引き抜くと、ガンマンが銃を扱うように両手の指でクルリと回し、プレイヤーに置いて針を乗せた。

最初に心臓をつかむような低い重低音が響き、不意に音が消えた。一瞬の静寂の後、つんざくような高速のブレイクビーツがフロアの沈黙を撃ち破つた。

さつきと同じ機材を使つていてるはずなのに、まるで音が違う。何

重にも重ねられたビートが複雑な音の空間を造り出し、リョウ達の騒ぎに気を取られていた人々がたちまちのうちに反応した。

フロアにいた全員がベースの近くに押しかけ、一斉に足を踏み鳴らす。それはスケアクロウ全体が揺れるような光景だった。

「……やるねえ」

カウボーイは咳き、リョウに言った。

「すっかり場の主役を奪われたね。これ以上私達が揉めても無意味なんじやないかな？」

リョウはフロアの様子を見て口元を歪めると、踵を返して立ち去つた。

「いいか、お前もDJだつたら何があるうてレコードを回すのをやめるんじやねえ」

『K』はレコードを回しながら、ベースの隣で不機嫌そうな顔をしている自分が追い出したDJに言った。

「DJってのは、絶対に音を止めちゃいけないんだ。例え客が一人しかいなくて、それこそフロアで銃撃戦が起こつてもな」

そして『K』は次のレコードの音をチェックし始めた。

音が止まつたのはアンタがいきなり後ろから引きずり下ろしたからじやないか。まだ若いDJは思つたが、『K』が恐そうなので言うのをやめた。

「大丈夫かい？」

「ええ、少し突き飛ばされただけですか？……」

カウボーイに尋ねられ、僕はリョウの後ろ姿を眺めながら呟いた。カナは例の女装集団に混じつて話をしている。さつき突き飛ばされた時に助けられたらしい。

「……ドロシー？」

僕はドロシーの姿を探した。ドロシーは少し離れた所で僕とは違う方向を眺めていた。その視線の先には、あのセルロイドの美女が

いてドロシーを見つめ返していた。

女は表情を変えることなくドロシーを見つめていたが、不意に視線を逸らした。

「踊ろうか？」

「……そうね……」

女の姿を目で追っていたドロシーが、カウボーイに尋ねられてこちらを振り向く。その瞳は、僕が見たことがないほど悲しげだった。

ドロシーは僕の前に立つと軽く僕の肩を叩いて微笑んだ。

「貴方も一緒に踊ろうよ。リョウって子もこれ以上は手を出せないわ」

そしてドロシーは、カウボーイの差し出した手を取りフロアの方に歩いていった。

あの女とドロシーは顔見知りなのだろうか？ カウボーイとも初対面には見えない。

「世の中には僕の知らない世界があるんだな……」

時の流れは一つではない。僕から見えない世界にも様々な人達がいて、様々なことを考え、行動している。それはとても当たり前のことだけど、つい忘れてしまうことだ。

そして僕は、そのすべてを知ることはできない。

……悲しいことだ。

「先輩、私は先に行つてますね！」

カナはすっかり打ち解けた女装の男達と腕を組んで歩いて行つた。

「変わった子だな……」

僕はカナを見て微笑んだ。今までの僕は、何とかして『普通』に近づこうとしていたけれど……今は心から、目の前にいる変わった……でも魅力的な存在のことを、もっと知りたいと思う。

その時、僕の隣で声がした。

「貴方……あの女には気をつけた方がいいわよ」

青い髪をかき上げながら呟いたのは、あのセルロイドの美女だつた。

第三話「カカシとセルロイドの美女とライオンがメリー・ゴーラウンドの中で踊る」

「君がこの国に戻っているとは知らなかつたよ」

大音響の中、カウボーイはドロシーの耳に口を寄せて囁いた。

「ところでさつきの子は誰だい？……君の新しい恋人かい？」

「そんなところね。どう評価する？ バート」

「悪くはないね。でも今のままじゃダメだ。ものにはならないよ」

「昔の貴方に似てるわ」

「おいおい、冗談だろ？」

カウボーイは勘弁してくれといつた顔をしたが、すぐに笑つて言った。

「個人的には、あの可愛い子猫ちゃんの方が気に入つたな。あれは大物だ」

「力ナのこと？……ま、それは認めるけど。バート、貴方の趣味も変わらないわね」

「わかつてないね、引っ搔かれるくらいがいいんだよ」

「……パールの様子はどう？」

ドロシーの問いに、カウボーイの顔から笑みが消えた。

「……良いとは言えないね。相変わらず境界線を彷徨つてゐる」

「そう……」

ドロシーは悲しげに手を伏せた。

「踊るうか？ せつかく『K』もいるんだから」

カウボーイが元気づけるように言った。

「リョウ……盛り上がってるな、フロア」

リョウとフロアを交互に見つめながら、ジンは呟いた。

「行きたいんだつたら勝手に行けよ」

リョウは誰もいなくなつたカウンターで椅子に腰かけていた。フロアに人が移動したので、ウェイターさえいない。

「何だよ、あいつらも根性ねえよな？」

ジンは大袈裟に手を振つて言つた。リョウのそばにはジン以外に仲間はおらず、皆フロアで踊つている。ジンは更に大袈裟に喚いていたが、リョウが無関心なので少し離れた席に座つた。

「言いたくはねえけど、今日のリョウ、少しおかしいぜ？」

「……黙つていろ」

ジンはこれ以上の刺激は危険だと思い、飲み物を探しにカウンターの中に入った。

リョウは取り出したナイフを手の中で弄んでいたが、何かの弾みで留め金が外れ、飛び出した刃に指が少し傷ついた。

「…………絶対に許さねえ」

リョウは指の血を舐めると、ナイフをカウンターに突き立てた。

「ぐだらない……」

「何がぐだらないんです？　えっと……」

「…………パール」

セルロイドの美女は、下から睨むようにして僕を見つめた。顔にかかる青い髪が白い肌に影を落とし、大きな瞳は金色のアイシャドウに囲まれている。遠くから見た時はわからなかつたが、左目には緑色のカラー・コンタクトが填められており、何となくワニの瞳のような印象を僕に与えた。

「名前はパールよ。ここではね」

セルロイドの美女、いやパールは、少し掠れた小さな声で呟いた。

「パール……さん、何がぐだらないんです？」

僕は彼女の言わんとすることを何もつかめないまま尋ねた。

「貴方のすべての行動がよ。何もかもね」

パールはフロアの方に目をやつた。

「別にあんな男を庇うことはないのよ」

「カウボーイのこと？」

僕は彼女の目線を追いながら尋ねた。

「そうよ。あの男は最悪よ、いつも偉そうなことばかり言つて……
実際には、そんなこと何も信じちゃいないのに……くだらない」
パールは何処からか取り出した小さな容器を軽く振り、中身を手のひらの上に出した。それは大量の星形の錠剤だった。

これについては少し知っている。最近頻繁に出回っているドラッグの一つだ。

ドラッグと言つても、これは依存性や中毒性の低い、あくまでも一夜を楽しく過ごす為のものだ。僕も試しに飲んだことがあるが、ほとんど効果がなく、次の朝に頭が痛くなっただけだった。きっと体質が合わなかつたんだろう。

何にしても、まともな健康状態なら個人差はあるが特に悪い効果は起こらない……はずだ、正しい使用法を守つてさえいれば。

しかしパールの手にある錠剤の数は、通常の使用量を遥かに越えていた。

「……それは多過ぎないか？　へたをすれば死んでしまうよ？」

パールはワニの方の目で僕を見ると唇を歪めて笑つた。

「何を言つてるの？　死にたいから飲むのよ」

僕は反射的にパールの手から錠剤を奪おうとした。しかし彼女が防ごうとしたので、錠剤は全て床に落ちてしまった。

「何をするのよ！　あれがないと……！」

パールは床に散らばつた錠剤を信じられない物のように見つめ、もう一度錠剤の容器を取り出した。考えるよりも早く僕の手が動き、容器を弾く。容器は床に落ち、残つていた錠剤が散乱した。

「…………どうして…………どうしてよ……？」

パールは怯えるような目で僕を見た。その視線は焦点が定まっておらず、不規則にゆらゆらと揺れている。いきなり体を屈めると、パールは錠剤を拾おうとした。

「ダメだったら！」

僕は足下の錠剤を靴で踏みつけた。しかしパールは服が汚れるの

も気にせず僕の靴に指をかけ、引き剥がそうとする。

「あ、あれがないと……せつかく彼の目を盗んで隠したのに！ 何で……何でよ！」「

泣きじゃくるような声は最後には金切り声となつた。僕は錠剤の屑を後向けに蹴り飛ばすと、床に屈んで彼女の両腕をつかんだ。

「君の物を取つたのは悪かつた。でも冷静に……」

「つるさい！」

パールは僕に腕をつかまれたまま大きく体を動かした。彼女の力は予想外に強く……更に困ったことに、彼女の細腕は自分の力にも耐えられそうになかった。僕は何とかして余計な力を入れずにする場所を探そうとした。

……その時、彼女の両手首に幾筋もの傷跡が見えた。

僕が手首の傷に気を取られた隙に、パールは少し離れた場所に錠剤が二つ落ちていることに気づいて体をひねつた。

僕が我に返つた時には、彼女は僕の手を振り解いていた。

「ダメだ！」

僕は後ろからのしかかる形で彼女を止めようとした。

後から考えると、僕は彼女の体に触りまくっていたわけだが、その時の僕は彼女のことと一緒に成熟した女性とは考えていなかつた。ただ、我侭で感情的な……壊れやすい子供のようだつた。

パールは僕が両手を床に押さえつけても錠剤を取ろうとした。そしてついに床に顔を擦りつけながら舌を伸ばし、床を舐めながら錠剤を舌ですくいとつた。

「……何てことを……」

「え……えへへへ……へへ」

パールは僕が上から退いたので体を起こして床に座り込んだ。そして口元を腕で拭つと顎を上げてゆっくりと錠剤を飲み込んだ。

「ハハハ……ハ……ハハ……ハハハハハ」

パールは体を折り畳んで更に笑い続けた……それはいつしか泣き声のようになった。

「ねえ、どうしてそこまでして飲むの？」

僕も床に座り込んで呟いた。元々そんなに効果のない薬だ、二錠くらいなら大丈夫だろう……問題なのは彼女の精神が薬に依存してしまっていることだ。彼女にとつては『薬を飲む』という行為自体が必要なのだ。敬虔な信者が毎日神に祈りを捧げるようにな。

痙攣が治まつた後、パールは静かに顔を上げた。

「……それでも死ねないからよ」

僕は涙で化粧が流れてしまつた彼女の顔を眺めながら、彼女が人間であることを理解した。

PM・10・46

「……くだらない……」

パールは服の汚れを払いながら呟いた。

「何が？」

僕は床に座つたまま尋ねた。

「……何もかもよ」

そう言つた時の彼女の瞳には、元の冷めた色が戻つていた。顔は更に青ざめ、とても薬が効いているように見えない。

「そう思うんだつたら、今度からは誰もいない所で飲むことにしたら？」

僕が呟くと、パールは冷たい目で僕を見下ろして言つた。

「調子に乗るんじゃないわよ」

そして彼女は歩いて行つた。

フロアに足を踏み入れた僕に気づいて、カナは今まで一緒に踊つていたミンク達と別れて僕の方に近づいて來た。

「先輩、遅いですよ！」

口に手を添えて叫ぶように言つた。それでも、フロアに響く音が大き過ぎ、カナの声はなかなか聞き取れなかつた。

「『めん、今日は色々あり過ぎてね。なかなか前に進めないんだよ
僕もありつたけの声を振り絞つて叫んだ。

「……いろ……ですって？」

カナが耳に手を当てて尋ね返してくる。全部は聞き取れなかつた
らしい。

「リョウに殴られて、宇宙人に殺されそうになつた。妙な夢を見て、
人助けしたら怒られたよ」

僕は笑いながら言い、それから小さく呟いた。

「おまけに生まれて初めて告白したらものの見事にふられたよ」

「……ドロシーさんですか？」

それまで聞きにくそうにしていたカナが、最後の言葉に反応して
僕を見つめた。

「……何でそこだけ聞き取る？」

僕は仕方なく肩をすくめるジョスチャーをした。

「へ～え、そなんですか！ 先輩、可哀想ですね！」

カナが明るい声で言つ。僕はカナの柔らかい体に手を回し、そつ
と抱き寄せた。

「……どうしたんですか？」

右の後頭部の辺りから、カナが呟くのが聞こえた。

僕の腕の中で、暖かい物が小さく震えた。光も音も振動も、彼女
を感じようとする以外のすべての感覚が鈍くなつたように感じられ
る。

僕は生まれて初めて、人生を楽しんでもいいのかも知れないと思
つた。もしかしたら、誰かを恐れる必要などないのかも知れない。
誰かに自分の心を全てさらけ出してもいいのかも知れない。誰か
を求めてもいいのかもしれない。僕は初めてそう思った。

僕はカナの髪に鼻先を埋めて呟いた。

「カナちゃん。僕は今、思つたんだけど……君つて本当に可愛いね
」

カナは僕の体を引き離すと、不思議そうな顔をして微笑んだ。

「……やつとわかつてくれたんですか？」

僕はカナの耳元で囁いた。

「ごめんね。バカなもので」

「許しません」

カナは僕の胸を軽く叩くと、フロアの中央に進み、振り返つてついてくるように手招きした。

「……バカだよなあ……」

僕は指で頬を搔きながら呟いた。

「本当に……何でこんなことがわからなかつたんだろう？」

「……何がいけなかつたんだろう？」

カナは人込みの中を進みながら呟いた。

「今更『可愛い』？ 男つてもう少し下半身で動くものだと思つてたのに……」

カナは後ろから彼がやつてくるのを確認して呟いた。

「ま、結果オーライつてやつかな？」

PM・10・51

「踊るのは苦手だよ」

「何言つてるんです！ ここまで来て！」

カナは僕の手をつかんで言った。

「それに……みんな変ですよ？」

確かに……みんな変だった。

僕らの近くには例の女装集団がいて、妙なダンスを踊つていた。特にミンクは、大きな体を震わせて酸欠の金魚みたいに手足をばたつかせ、甲高い叫び声を上げていた。

「フォツ！ フォツ！ フォツ！ フォツ！ ……ハハイ！ カナちゃん！ フォツ！」

いつの間にか、僕らはミンク達に取り囲まれていた。服装の派手さもあいまつて、巨大な熱帯魚の群の中に放り込まれたようだ。

「ほら、先輩踊りましょうよ」

カナが軽くリズムを刻みながら僕を急かす。

踊るという行為は好きじゃない。僕が考えるに、踊るというのは人間の体が音楽に同調することだと思う。

昔とあるミュージシャンが、世界は小さな粒子の振動によつて構成されていると言つていた。『木』と『人間』の違いは物質的なものではなく、固有振動周波が違うだけだと。

だとすれば、人間の体がリズムに合わせて踊る時、人間の体は人間とは違う『何か』へと変化しているのだろうか？ 同じ音楽に合わせて別の人間が踊る時、人々のリズムは近くなり、同じ存在に…世界のリズムに近づくのだろうか？

だが、僕は踊るのが嫌いだ。僕のリズムは世界のリズムと同調できない。僕は世界から切り離されているし、その波に乗ることもできぬ。

まるで大きな海の前に立たされた、泳げない子供のようだ。

「ほら、難しく考えないで体を動かせばいいんですよ。ほら、その調子！」

「あ、ああ……」

僕はとりあえず、おつかなびつくり体を動かし始めた。

「何だ、先輩うまいじゃないですか！」

揺れる髪の向こう側で、カナが悪戯っぽく微笑む。

「フォツ、フォツ、フォツ、フォツ！」

「ミンクさん、ぶつからないで下さい！」

「いいじゃない！ みんなで楽しんでんだから～！」

僕は、カナとミンクが互いを押し退け合う間に挟まれながら、いつの間にか大きな声で笑つっていた。確かに僕は、世界のリズムとは交信できないかもしねり。それでも、この奇妙で歪な者達のリズムは感じ取ることができる。

いつしか僕は、ミンクやカナ達と一緒に踊つていた。多分、僕の踊りは下手で奇妙に見えるだろうが……そんなこと知つたことか。

と、不意にかかるいた曲のリズムが変動し、金属質のギターのリフが高らかにフロアに響き渡った。エコーのかかった高速のラップとドラムンベースが続く。

『K』のテクニックによつて圧倒的な存在感を得たビートがフロアを更に盛り上げ、皆が一斉に踏み鳴らした地響きによつて、本当にスケアクロウが揺れた。

人が流れ、僕らはDJブースの方に押し流された。

そこにはドロシーとカウボーイの姿があつた。ドロシーは相変わらずのジプシーのようなダンスを披露しており、カウボーイはどう見ても、モンキーダンスかサタデーナイトフィーバーを三~四倍速で再現しているように見える。

二人の動きはまったく接点がないように見えた。しかし二人の動きは完全にリズムを捉えており、不思議と息が合つていた。

ドロシーは僕達に気づくと、手を振つて来るよう誘つた。

僕とカナ……そしてミンク達はドロシーの所に雪崩れ込み、後は様々にパートナーを交代して踊り続けた。

Q・何故一人でも踊れるのにパートナーが必要なのか？
A・決まってる。一人で踊つた方が楽しいからだ。

「楽しんでる？」

ドロシーが僕の耳元で囁いた。久し振りに彼女の体温を感じた気がする。

「ああ。そうだ、さつきパールと話したよ」

ドロシーが驚いた顔をした。

「やっぱり知り合いなんだ」

「……昔、色々あってね」

「とても寂しそうな目をしていたよ」

僕が言うと、ドロシーは少しだけ笑つた。

「彼女は人生を楽しむのを怖がつてゐるよ……幸福になるのをね」

「それは多分、彼女だけじゃないな……」

「……そつかもね」

ドロシーは目を細めた。

振動と光が回転し、僕は大きな流れに飲み込まれていいくよつた感覚に襲われた。

二枚のレコードの回転と共に、フロア全体が回転していく。手を伸ばすと、ドロシーは指先を握ってくれた。

第三話「カカシとセルロイドの美女とライオンがメリー・ポーラウンドの中で踊る」

PM・11・35・21s

「楽しんでるか？」

不意に冷たい手が僕の視界を遮った。驚いて振り返ると、そこにはリョウが立っていた。顔には血の気がなく、目だけが異様に光っている。

「リョウ……君も踊りに来たのか」「

呟くように言った僕の言葉は、多分聞き取れなかっただろう。それでも、リョウは静かに笑つて首を横に振つた。

リョウの様子は奇妙だった。まるで世界から切り離されているかのような……スケアクロウを満たすアップテンポの曲も彼の体を素通りしているようだ。

彼は土砂降りの雨の中、傘をささずに立ち尽くしているように見えた。

「リョウも一緒に踊らないか？ カウボーイ達のことなんかどうでもいいじゃないか」

周りの者に押されて、僕達の間の距離が縮まる。僕の言葉を聞き取つたのかどうかわからないが、リョウは両手を伸ばすと、僕の顔に手をかけて両方の親指で僕の瞼を閉じた。

リョウが僕の眼球を押しつぶすのではないかとの考えが頭をよぎる。しかしリョウは、それ以上指に力を込めることはなかった。

「リョウ？」

僕は不安になつてリョウに呼びかけた。その時、僕の額に何か暖かくてやわらかな物が一瞬触れた。それからリョウは自分の額を僕の額に当たた。

「……お前は何もわかつていないと……」

リョウの声は額の骨を通じて頭の中に直接響いてきた。

「…………リョウ？」

僕は暗闇の中で手を伸ばした。しかしその手がリョウに触れるこ
とはなく、リョウの指も、額も僕の顔から離れていた。

急に視界が戻り、僕は目を擦りながらリョウの姿を探した。

過剰に目に入る光と色の中で、人込みの中を進むリョウの後ろ姿
が見えた。行く先にはカナとミンク達がいる。

……そこにおいてはダメだ。

僕がリョウの後を追おうとした時、それまでリョウと話をしていたカナが、リョウの頬を平手で打つた。

PM・11・36 - 35s

カナは自分の近くにリョウがいることに気づき、汗ばんだ額を拭
つてリョウを見た。

「リョウさん……何かご用ですか？」

感情をできる限り抑えた声で話しかける。勿論油断などしていい。カナはリョウのことが嫌いなわけではなかつたが、非常に気をつけなければならない人物であることは十分に承知していた。

「…………やあ、カナちゃん」

リョウが口元を曲げて咳く。多分、微笑んだのだろう、とカナは判断した。目元は細くなっているし、表情も穏やかだ。だがどんなに外見が『微笑み』であつても、カナはリョウが笑っているようには見えなかつた。

不意に、リョウがカナの後頭部を持つて顔を近づけた。

「さつきは悪かつたな。ついカツとなつちまつた」

リョウがカナの耳元で囁く。こうでもしないとはつきりと聞き取
れないことはわかっているが、カナは緊張に体を固くした。

「…………ところで、カナちゃんはあいつとはどうなつてるんだ？」

リョウは言った。

「もしかして、好きなのかい？」

カナは体を緊張させながらも強い口調で言った。

「そんなこと、リョウさんには関係ないじゃないですか」

「……成程ね」

リョウが小さく笑つたのが聞こえた。

「カナちゃん！ 大丈夫！？」

ミンク達が近づいてきた。皆リョウを警戒し、少し距離を取つてリョウを睨んでいる。心配ないよ、と身ぶりで示し、カナはリョウを見つめた。

「リョウさん、私は先輩のことを一人の人間として評価しています。好きとか愛してるとか、男とか女とか、そんな俗っぽいものじゃなくて、あくまで興味ある対象だと思っています。先輩は、もつといろんなことができるはずです！ 先輩をダメにしてるのは貴方じやないですか！」

最後の台詞を大声で叫び、カナはリョウから離れた。リョウは力の大聲に少し首を曲げていたが、

「成程ね、それが君の愛し方か……」

今度は小さく呟いた。

「……俺は、そんなのは嫌いだな

「何て言つたんです！？」

カナが大声で怒鳴る。

リョウは逆十字のピアスを指で揺らし、カナに近づいて、耳元で囁いた。

「お前は薄汚い売女だつて言つたんだよ」

刹那、カナの顔色が変わつた。

カナは平手でリョウの頬を叩いた。

リョウは弾かれた顔を戻し、口元を歪ませた。

次の瞬間、リョウの右手にナイフが握られていた。

P M · 1 1 · 3 8 · 4 7 s

誰かの甲高い悲鳴がフロアに響いた。

それが引き金になつたように、フロアは混乱し、様々な声や怒声が飛び交つた。

ほとんどの者が事態を把握できず、踊るのをやめて辺りを見回す。……そして。

多くの者が事態を正しく把握した途端、一斉にフロアから逃げ出そうとする流れが起き、まだ何も知らない者をも巻き込んだ。

P M · 1 1 · 3 8 · 5 0 s

「カナちゃん！」

僕は人込みをかき分けて走つた。

日焼けした太い腕が体に当たり、汗ばんだ肌が押し当たられる。それでも、僕は体を屈めながら人込みの中を駆け抜けた。

P M · 1 1 · 3 8 · 5 3 s

ミンクが叫んでいた。

ミンクはカナがリョウに腕を切られた瞬間から叫び続けていた。その声はフロアの暑い空気を切り裂き、地の底に眠る死靈を呼び覚ましそうだった。

カナは切られた右腕のつけ根を手で押さえたまま床に倒れていた。指の間から、真っ赤な鮮血が流れ出している。

「誰か！ 早く救急車を呼んでよお！」

仲間の女装した男達がカナの周りを囲んで叫ぶ。ミンクはやつと我に返ると、体を小刻みに震わせながら頷いた。

そんな中、カナは床に倒れながら必死に首を捻つてリョウを睨みつけていた。

カナの視線の前を、黒革のブーツが横切った。

PM・11・39'00s

リョウはナイフについた赤い血を眺めながら歩いていた。ナイフから赤い血が一霧落ち、黒革のブーツが床を擦つて嫌な音をたてる。

リョウはナイフを大きく振り、血を払つた。そして、目の前の大男を睨みつけた。

PM・11・39'17s

「若い頃にはよく言われたよ。最近の若者はわけがわからないって……それこそ何千回、何万回とね」
カウボーイは小さく笑つて言った。
「だから、これだけは言いたくなかったな……なあ、そう思つだろ？ 大人になんてなるものじやないよな」
カウボーイは拳を手の平に打ちつけた。
「……くそガキが！」

PM・11・39'28s

ドロシーはローブースの前の金網にもたれながら何かの歌を口ずさんでいた。

その後ろで、『K』はレコードを芸術的な動きでスクランチした。

PM・11・40'12s

「……畜生」

リョウはナイフの柄を擦るように指を動かし、刃に反射する光を

揺らめかせた。

「畜生、畜生、畜生、畜生、畜生、畜生、畜生、畜生、畜生、畜生、
リョウは口の中で言葉を転がし続けた。

「…………畜生」

その時、リョウの前に誰かが飛び出した。

PM・11・40・47s

「やめて、この人を殺さないで！」

リョウの前に飛び出したパールは、両腕を大きく広げて叫んだ。

「パール！」

カウボーイが大きく目を見開き、

「パール！？」

ドロシーも驚いて金網から体を離す。

「お願い…………殺さないで…………殺さないで！」

パールの瞳は瞳孔が開き切り、頬の筋肉は引き攣っていた。元から色白だった肌は、青く染めた髪にも負けないほどに青ざめている。パールは全身を震わせて叫んだ。

「殺さないで…………殺さないで！ 誰も殺さないで！」

「…………黙れ」

リョウは無表情にナイフを振った。

PM・11・41・13s

すべてがスローモーションのようだった。時は手に取れそうなほどにゆっくりと流れ、血飛沫は空中に止まっているかのようだった。僕は前にいた男を押し退けて、フロアの中央に飛び出した。

赤い血の零は床に落ち、破裂するように飛び散った。少し遅れて、

青い髪の女が目を大きく見開いたまま倒れ込む。

「…………リョウ…………！」

リョウはぼんやりと右手を眺めていたが、自分の手にべつたりと赤い物がついていることに今ながら気づくと、小さく悲鳴を上げて右手を大きく何度も振った。

そして僕の言葉に振り向いた時……その表情は、泣き出しそうな子供のようだつた。

次の瞬間、僕は両腕を頭の上で交差させ、リョウの胴体めがけて突っ込んだ。

PM・11・41・15s

「パール！」

カウボーアイは急いでパールのそばに駆け寄つた。

パールの胸元から首にかけて大きな赤い筋が走っていた。真紅の裂け目からはおびただしい量の血が溢れ出し続けている。

「パール……何てことだ……！」

「…………パート…………」

パールが手を伸ばしてカウボーアイの頬に触れた。

「ア……アタシ……アタシ、死ぬの？……怖い……怖いよ……助けてよ、パート……」

「大丈夫だ、君は死にはしない！　ドロシーも僕もついている！」

カウボーアイはパールを抱きかかえて必死に呼びかけた。

その時、近くにいたリョウが倒れたので、カウボーアイは顔を上げた。

PM・11・41・33s

リョウの体の上には、一人の青年の姿があつた。リョウの上半身を床に押しつけ、力一杯殴りつけている。

「……ほーら、言つた通りでしょ？ クミ
カナは微笑み、気を失つた。

「ああっ、止血、止血！ ええっと、傷口の上をきつく縛るのよね
！？」

ミンクは大きく手を振りながら叫んだ。

「それから腕のつけ根も……傷口は心臓より上にするのよ？」

隣にいたオレンジ色の髪を被つた男が口を出す。

「わかつてゐるわよ、そんなこと！」

ミンクは叫びながら手を振つて自分を落ち着かせると、ドレスの裾を切り裂いてカナの腕を縛つた。

「その服、高かつたんでしょ？」

「そーんなことどうでもいいでしょ！ 次は何処よ！？」

PM・11・41・33s

僕は無我夢中でリョウのコートをつかんだまま起き上がった。リョウは、ぶつけたらしい頭を押さえると目を開いて僕を見た。僕が上にいるとはいえ、リョウがそのまま反撃してたら僕に勝ち目はなかつただろう。

しかしリョウは自分の手にナイフがないことに気づくと、近くに落ちているナイフを取ろうとして手を伸ばした。

その瞬間、僕は確信した。

今なら、リョウに負けはしないと。

僕はリョウの顔面を殴りつけた。それからリョウの髪をつかんで頭を床に打ちつけた。リョウは小さく悲鳴を上げると、初めて僕の存在に気づいたように睨みつけてきた。

「……てめえ……！」

僕は冷静だった。何故かはわからないが、本当に冷静だった。い

や、もしかしたら頭の何処かが麻痺したのかもしれない。それでも僕の頭と体は、自分のすべきことを正確に理解し、実行していた。

僕はもう一度リョウの顔面を殴りつけると、立ち上がって叫んだ。

「立てよ、リョウ！……勝負しようか！」

PM・11・42'00s

メリーゴーラウンドはゆっくりと回転を止めた。

僕の周りで回転していた世界は正常な状態に戻り、時間の流れは通常の速さを取り戻していった。

回転の中心には、僕とリョウだけが残った。

僕はふらつく体を何とか支えながら立っていた。先程までの混乱は治まり、ただ心臓が音高く鳴り響いている。

周囲も徐々に見えるようになった。フロアには僕達一人以外誰もない。皆ここから避難したらしい。リョウの向こうには、倒れたパールを抱えているカウボーイの姿が見える。

その時、低い呻き声を上げながら、リョウが起き上がった。

ぎらつくような目で僕を睨みつけてくるかと思つたが、リョウの目には力がなかった。

「…………」

リョウは泣きそうな声で呟いた。

「どうしてなんだよ…………」

「そこまでだ、リョウ！ 動くんじゃねえ！」

何処からかオカダの声が響いた。

「何てことをしてくれたんだ！ もう救急車と警察を呼んだからな、観念しろ！」

「つるせー…………つるせー…………つるせんせー…………！」

リョウはつむきながら呟いていたが、急に立ち上がり叫んだ。

!」

そして、僕の方に顔を向けた。

「どうしてお前が俺の邪魔をする！？　俺達はもっとわかりあえるはずだろ？！」

リョウは言った。

「初めて見た時から感じていた、お前は俺に近い人間だと。お前なら俺を理解できるはずだ！　お前だって苦しいだろ？　こんな世界嫌いだろ？　どうしてこんな世界で生きなきゃいけないんだ。何でこんなに苦しまなきゃいけないんだよ！　俺達はもつとわかりあえる、理解できる……もうこれ以上、俺を苦しめないでくれ！」

「何よ！　力ナちゃんを傷つけといて勝手なこと言わないでよ！　力ナを抱えてミンクが叫ぶ。僕は首を横に振つてミンクにやめるよに頼むと、リョウの方に向き直つた。

「リョウ、僕も君のことは嫌いじゃない」

リョウが虚ろな目で僕を見る。僕の心に何かが突き刺さつた。

確かに、僕とリョウの関係は良いものとは言えなかつた。しかし僕は、リョウと別れたいとか、リョウが憎いとか……そんなこと、一度だつて思つたことはなかつたのだ。それでも……いや、だからこそ、今ここで言わなければならぬ。

僕はゆっくりと言葉を吐き出した。

「僕は君のことは嫌いじゃない。だけどリョウ、君のやつたことは許せない！　絶対に許すわけにはいかないんだ！」

リョウが大きく目を見開いた。

「……リョウ、僕も一緒に警察に行くよ。だからもうやめよう、こんなこと」

僕はゆっくりとリョウに近寄つた。

「今はまだ、君が何を考えてるのかよくわからないけど……それでも一緒にいるくらいならできるよ。少しずつわかり合えばいい……そつだろ？！」

僕はリョウの前に立ち、彼の手を取つとした。リョウは力のない目を僕に向けて立ち向かへしている。

その時、誰かが後ろから僕を羽交い締めにした。

「……ジンー？」

「まざいな……」

カウボーイは咳いた。パールの脈がどんどん弱くなっていく。

その時、フロアの方でざわめきが起こった。カウボーイはそちらに目を向け、リョウに立ち向かった青年が羽交い締めにされているのを見て眉をひそめた。

「こつちもまざいな……まつたく！」

「大丈夫よ」

誰かがガウボーイの前に膝をついた。

「ドロシー……」

「本当、バカな子よね……」

ドロシーは長い髪をかき上げて咳き、パールの頬を撫でた。喉から胸元にかけての傷口を辿り、心臓の辺りを優しく手で被う。心なしか、出血の勢いが弱まったように見えた。

「大丈夫よ、バート。この子は死ないわ」

血にまみれた指を唇に当てるとい、ドロシーは立ち上がった。

「ジン！ 邪魔をするな！」

僕は懸命に体をひねつてジンの腕を外そうとした。

「黙れ！ お前のせいだ……お前がいるから悪いんだ！ お前さえいなきや！」

ジンは両腕にますます力を込め、僕の身体を締め上げた。肩の筋肉が圧迫され、骨が軋む。ジンの腕力はこれほどまでに強かつたか！？

「どうして……どうしてお前なんだよ！」

喉の奥から搾り出すような声で、ジンは叫び続ける。

その時、リョウが床のナイフを拾い上げた。

「リョウ、殺しちまえ！ こんな奴、殺しちまえ！」

ジンの声が耳元で響く。リョウはジンの声も何も耳に入つていな

い様子で、ただナイフの刃を見つめていたが、

「……何でこんな簡単なことがわからなかつたんだろうな？」

不意に、明るく呟いた。

「何でかなあ？……なあ、ジン？」

「リョウ……」

ジンが緊張を解いたのがわかる。

リョウは難しい問題の解き方に気づいた小学生のような、晴々とした表情を浮かべながら僕らに近づき……右手を振り抜いた。

一条の閃光が僕の顔をかすめた。

次の瞬間、僕は開放されていた……ジンの悲鳴と共に。

「ジン！」

僕は解放されると同時に振り返った。ジンが顔面を両手で覆いながら倒れている。リョウが背後から僕の首をつかんだ。

振り向いた先にはリョウの顔と……振り上げられたナイフの刃の煌めきがあった。

第三話「カカシとセルロイドの美女とライオンがメリー・ポーリンハンドの中で躍る

PM・11・43・36s

空気が抜けような音がした。

短くて高い音だ。

しかし、何処か普段聞いている身の回りの音とは違う感じがある。何と言つたか……とても乾いた堅い音で、心臓が締めつけられた。

……そう、怖い音だった。

死神がキスをしたなら、こんな音がするだろうか？

それとも……消音機つきの銃声か？

リョウの右手が何かに引っ張られたように動き、手の甲から赤い筋が何本も吹き出た。銀色のナイフは宙を舞い、少し離れた床に音をたてて落ちる。

リョウは呆然と自分の右手を見つめ……自力では動かなくなつたそれを左手で支えた。

「…………な、何だと……」

掠れた声で呟き、あの音のした方向を振り向く。

そこには、片手に銃を持つたドロシーが立つていた。

ドロシーの長い黒髪は、風もないのにたなびいているように見えた。赤い唇をきつく閉じ、静かな瞳でリョウを見つめている。

「な、何なんだ……お前は……」

「さあね……貴方には関係のないことよ」

ドロシーは銃をリョウに向け直した。

リョウの額に玉のような汗が吹き出し、唇から血の気が退いてゆく。

「さあ、どうする？　」のままおとなしくすれば命は助けてあげるわ

ドロシーは銃を持つ手を肩にかけるよひにして、リョウに向かって歩き出した。

「個人的には、それじゃあつまらないんだけど。アタシと遊んでくれるかしら？」

刹那、リョウがドロシーから銃を奪おうと飛びかかった。しかしリョウの手が彼女を捕らえることはなく、逆にリョウの腹部にドロシーの膝がめり込んだ。

「アタシが十秒数える。貴方がその間に逃げる。ルールはわかつた？」

腹部を押さえでうずくまるリョウのこめかみに、ドロシーが銃口を押し当てる。リョウは素早い動きでドロシーの足を払おうとしたが、その脚は空を切り……次の瞬間、リョウの側頭部にドロシーの回し蹴りが炸裂した。

「――」

着地と共に、ドロシーは少し離れた所に倒れたりョウに銃口を向けた。

「――…………どうする、坊や？」

リョウは、ギラギラ光る目でドロシーを睨んでいたが、口から流れる血の筋を拭うとスケアクロウの出口に向かつて走り出した。

「あいつ、逃げる気か！」

オカダが叫ぶ。

「三一！」

ドロシーはリョウを追つて歩き出した。

「ドロシー！」

我に返つた僕が叫んだが、ドロシーは振り返ることなく歩き去った。

リョウは消耗した体を壁にもたれさせて、スケアクロウから

地上へと続く螺旋階段を必死に這い上がつていた。

「六！」

階段の下の方から、あの女の声がする。

何者なんだ、あの女は……リョウは埃まみれのコンクリートの階段に爪を立てた。

あの女がすべての原因なのか？ そうだ、あの女が現れてから何もかもが狂いだしたんだ。若松も、カウボーイも……あいつも。俺はただ……リョウは考えた。畜生、頭の中が鉛でできているみたいだ……！

「……俺はただ！」

「七！」

螺旋階段に女の声が響いた。さっきよりも大きくなっている。目に流れ込む汗を拭い、リョウは最後の力を振り絞つて地上へと駆け上がつた。

スケアクロウがあるビルは比較的大きな道路に面しており、道路を挟んで向かい側には二十四時間営業のコンビニエンスストアがある。何とか地上に辿り着いたリョウの目に、コンビニの看板を彩る電飾が見えた。

「八！」

すぐ下から女の声が聞こえた。

リョウは明かりに吸い寄せられる蛾のよつて、コンビニを手指数て歩き出した。

「九！」

地上に出てきたドロシーが見ると、リョウは道路を横切つていて途中だつた。

ドロシーは微笑み、銃を構えた。

「……そして十！」

深夜のオフィス街に人通りはなかつた。灰色の街灯が腕を伸ばした巨人のように立ち並び、小さな光の輪をアスファルトの地面に投げかけている。その輪の中に、黒いコートを着た長身の男が倒れ込んだ。

男……リョウは地面に左腕をついて顔を上げると、大きく息を吐いた。

「畜生……！」

リョウは氷のように冷たくなった右手を抱え、上半身を起こした。拭つても拭つても目に汗が流れ込み、コンビニの明かりがぼやけて見える。リョウは立ち上がり、再び歩き出した。

その時、リョウの右の太ももが、自分の意志とは関係なしに跳ね上がつた。

一瞬の沈黙の後、太ももに焼けた鉄棒を突っ込まれたような激痛が走り、リョウは悲鳴を上げて地面に倒れた。必死になつて視線を巡らせ、道路の向こうで銃を構えている女の姿を見定める。

何か言つている……畜生、頭に響く氣色の悪い声だ！ 頭がガンガンする……何て言つてるんだ！？

……と、女が微笑み……リョウの耳が、突然彼女の言葉を聞き取つた。

「車道に寝ると危ないわよ？」

一つの光が突つ込んできた瞬間、リョウは咄嗟に身を翻して中央帯へと逃れた。

騒音と振動と大量の排気ガスを撒き散らし、鉄製の巨大な獣がすぐ脇を駆け抜けてゆく。

「……畜生……！」

リョウは地面に仰向けに転がりながら吐き捨てた。右の太ももは焼けつくように痛い。幸い骨はやられておらず、出血もたいしたことはなさそうだ。

やがて、女がこちらに向かつて歩き出した。リョウは体を転がして起き上ると、道路の向こう側を目指した。

あそこまで行けば助かる。何故かそう思いながら。

PM・11・45 - 00s

「まだ救急車は来ないのか！？」

オカダは頭を押さえながら叫んだ。自分の店で怪我人が出ただけでもシヨツクなのに、今度は銃撃戦ときた！ オカダは地道な将来設計が崩れるのを感じて胃が痛くなつた。

「バート！ パールは大丈夫なのか！？」

オカダはほんど祈るような気持ちで尋ねた。カナは何とか大丈夫そうだが、パールの傷は深い。これで死人が出たら洒落にならない。

「慌てるなよ」

カウボーイは静かに呟いた。

「息は小さいが何とか持ちこたえている。へたに騒ぐのが一番悪い」

カウボーイは悲しげな顔でパールの頬を撫でた。

「……大丈夫、彼女は死ないよ」

僕は床に座りながらカナがミンク達に囲まれて倒れているのを見た。カナの顔には血の気がなく、白い肌は更に青白くなっている。

……ドロシーはリョウをどうするのだろう？

僕の脳裏にリョウを追つて去つていいくドロシーの後ろ姿が浮かんだ。

「ドロシーは僕達とは違う世界に生きている。彼女が殺すと決めたら本当に殺すよ。どんな方法でもね」

不意の声に顔を上げると、カウボーイが僕を見つめていた。

「良かつたじゃないか。リョウとは対立してたんだろう？ 丁度いいじゃないか……ドロシーは必ず彼を殺す。勿論、ドロシーも決し

て捕まることはない。心配しなくていい

カウボーイは僕を挑発するように言った。

「いい話じやないか。邪魔な奴なんだろ？ ナイフを振り回して、人を勝手に傷つけて……自業自得ってやつだな」

僕は黙つて目を伏せた。確かにその通りだ。

「でも、どうしてだろう？ 僕はそれでも彼を憎む気にはなれなかつた。

確かに彼の行動は許せない。でも、あれが彼の本意だつたとは思えない……何だろう？ 僕達の間には何かが欠けている気がする。とても些細な、それでいて決定的な何かが。

「彼と僕の間には言葉が通じていない気がする。まるで翻訳ミスで本当に言いたいことが伝わっていないみたいだ」

僕は呟いていた。

「……どうすればリョウウと話ができるんだろう？」

カウボーイはそんなこと知つたことかといった顔をしていたが、やがて、仕方ないなあと言わんばかりのため息をもらし、言った。

「それはきっと、君が話しかけていないからじゃないかな？」

PM・11・45・46s

出口に向かつて走り去つてゆく青年の背中を、カウボーイは微笑みながら見つめていた。

「確かに悪くないな、ドロシー」

カウボーイは顎を撫でて呟いた。

「……それでも俺には似てないと思つぞっ？」

「おい『K』！ いい加減にレコードを回すのをやめろよー」

「朝まで回す契約だ。カウボーイ、何かリクエストはあるか？」

何処までもマイペースな『K』の問いに、カウボーイは小さく笑つて言った。

「それじゃあ、ビートルズの『tomorrow never k

『now』がいいな

「わかつた」

いきり立つてゐるオカダをよそに、『K』は新たなレコードを取り出した。

「お前ら……状況を考えろつー！」

PM・11・46・37s

コンビニでは、男女の店員一人が楽しげに話をしていた。

特に大学生の男子店員は女子の店員と遊びに行く約束を取りつけられたので上機嫌だつた。やつたね、こんなに可愛い子と一緒に仕事ができるなんて自分は本当にラツキーだ。昨日は探していした服が安く買えたし、今日の晩飯は旨かつた。人生の調子がいいというのはこんな感じだろうか？ このまま一気に、この子ともうまくいくような気がする。普段はいい加減にしているバイトにも、少しあはれる気が湧いてくるつてものじやないか？

「あつ……いらっしゃいませ、こんばんは！」

その時ちょうど入つてきた客を、男子店員は最高の笑顔で迎えた。店長が見ていたら感激したかもしない。

しかし、入つてきた客はそれどころではなさそうだった。

「おいお前！」

リョウはコンビニのカウンターに左手を叩きつけた。カウンターの向こうで、二人の店員が笑顔を凍りつかせて飛び跳ねる。

「刃物はあるか！？」

「……あ、ありませんよ、そんな物！」

女子店員が気丈に答えた。男子店員は壁にへばりついて震えている。

リョウは小さく舌打ちして辺りを見回すと、飲料用の冷蔵庫の前に太ったパンク風の男を見つけた。ヘッドホンで音楽に聴き入つて

いるせいが、こちらの騒ぎには気づいていない。リョウは一ツと笑うと、音もなく男の背後に近づき冷蔵庫の扉を蹴りつけた。勢いよく閉まつた扉に手首を挟まれ、男が悲鳴を上げる。

「よお、キタジマ……いい所で会つたな？」

リョウはキタジマの頭を扉に打ちつけて言つた。外見に似合わず臆病なキタジマが、目に涙を溜めながらリョウを見る。

「ものは相談なんだが……お前のオモチャを貸してくれないかな?」
キタジマがぶんぶんと頷き、震える指先でジャケットの内側を指し示す。リョウは薄く笑い、金と緑に染められたキタジマの髪をつかむと、もう一度扉に叩きつけた。

その時、コンビニの自動ドアがゆっくりと開いた。

同時にコンビニの防犯カメラが動かなくなつたが、二人の店員はそれには気づかなかつた。

PM・11・47・12s

「みづけた」

ドロシーは親しい友人と待ち合わせた時のように楽しげにコンビニの中に入った。

両腕は後ろで組まれ、前からは銃の存在は見えない。

「どうしてだ……？」

リョウはコンビニの入り口の正面に位置している飲料用の冷蔵庫の前に、ドロシーに背を向ける形で両膝をついていた。

「……どうしてこんなことになつたんだ?」

リョウはゆっくりと立ち上がつた。

「それは貴方が、我慢を言い過ぎたからじゃないかな?」

ドロシーは物珍しそうに店内を見回しながら呟いた。

「そして人を傷つけた。ちょっとお仕置きが必要ね」

「……何がいけない?」

リョウは額を軽く扉に打ちつけた。

「何がいけなかつた？俺の親父は自分の欲しいものはすべて手に入れた。金も女も地位も名譽も、自分の妻が子供を生めない体質だということがわかると子供まで金で手に入れた。沢山の人が泣く所を見たよ……それでも奴は少しも悪いとは思っていない。むしろ負けた奴が悪いとさえ思つてゐるぐらいだ」

リヨウはドロシーの方を振り向いた。リヨウから少し離れた所では頭から血を流したキタジマが必死で床を這つており、パンと惣菜の売り場からインスタント麺類の棚へと移動しつつある。

「それに比べて俺はどうだ？確かに沢山の物を与えられたさ。金も玩具も学歴も、十五の時には女までね。だが俺が本当に欲しい物は何一つ与えられなかつた。自分で手に入れようとしても、いつも親父の存在が邪魔をした！」

リヨウは血まみれの震える右手を胸の所まで上げると、人差し指を辛うじて伸ばして十字を切るような仕草をした。

「誓つてもいい……俺が本当に我慢を言つたのは、これが初めてなんだぜ？」

その瞬間、だらりと垂らしていたリヨウの左手の中に、小型のナイフが魔法のように出現した。

PM・11・48・19s

戦いの終了を告げたのは、炭酸飲料の缶が弾けて中身が吹き出た音だった。

弾丸は冷蔵庫の扉と複数の缶を貫いた後に最奥の缶にめり込んでおり……それよりも先に、リヨウの左肩の皮膚と肉の一部をえぐり取つていた。

リヨウは肩を押されて床に崩れた。口からは悲鳴の代わりに声にならない微かな息と、数滴の体液がこぼれている。

彼の額に、冷たい金属の塊が押し当てられた。

「……髪が少しづぎれたぞ……」

ドロシーはナイフに切り裂かれた髪を触りながら、静かに尋ねた。

「……………どうする？」

「殺せよ……もう生きていたくもない」

リョウが泣きそうな声で呟く。

「……………そう」

ドロシーは引き金にかけた指に力を込めた。

その時、コンビニの中に一人の男が駆け込んできた。

PM・11・48・35s

「待つてくれ、ドロシー！」

僕がコンビニに入ると、ドロシーはまきこりヨウの頭を撃ち抜こうとしていた。

「ドロシー、リョウを殺さないでくれ！　そいつは…………！」

僕は大きく咳き込みながら叫んだ。頭の中が混乱し、言葉にならない考えが物凄いスピードで駆け巡る。

「……………そいつは…………！」

僕は考えた。生まれて初めて、必死で誰かに自分の考えを伝えようとした。そうだ。表に出さなければ、すべては伝わらないのだ。

「殺さないでくれ、ドロシー！」

すべての思いを込めて、僕は叫んだ。

「リョウは僕の友達なんだ！　たつた一人の友達なんだ！」

ドロシーは僕の方を振り向かずリョウに銃を突きつけたまま動たが、

「……………まったく、バカなんだから…………」

と呟き、銃を腰のホルダーに戻した。そして床を見つめたまま動

かないリョウの耳元で短く囁くと、僕の方に歩いてきた。

「行こうか？」

ドロシーは何事もなかつたかのよう言つた。

「……何処に？」

「何処かよ。そうだなあ、海が見たい」

「でもリョウが……」

「大丈夫よ、死にはしないわ……多分ね」

そんな無責任なことを呴き、コンビニを出でていってしまう。僕は迷つた末にリョウの方に駆け寄ろうとしたが、

「行けよ！ 何処にでも好きな所に行っちゃまえ！」

リョウがうつむいたまま叫んだ。

それでも僕が迷つていると、リョウは大きくため息をつき、掠れる声で言つた。

「……心配するな……俺は大丈夫だ」

僕はリョウのことが本当に気がかりだつたが、リョウの言葉に願いのようなものを感じて、ドロシーの後を追つて外に出た。

「……何なのよ、あれは……」

コンビニの女子店員は、去つて行く一人を目で追いながら呴いた。隣では男子店員がカウンターの下にしづくまって震えている。こんな情けない奴とは絶対につき合つてやるものかと女子店員は思つた。

「電話……あるか？ 携帯は落としちまつたらしい」

不意に掠れた声がした。声の方向に顔を向けると、血だらけの男が肩を押さえながらカウンターに手をついていた。

「で、電話ですか？」

女子店員は震える声で尋ねた。もしかして仲間でも呼ぶつもりだろつか？

しかし血だらけの男は唇を曲げて苦しそうに笑うと、こう言った。

「警察にかけたいんだ。ここにナイフを持って暴れた男がいますっ

てね

言いながら、男はカウンターから滑り落ちた。

「……できれば君が代わりにかけてくれないか？　俺にはもう、そんな力はないんだ」

女子店員が慌てて奥に引つ込んでゆく様を見届けて、リョウは目を閉じて呟いた。

「まったく……あの女、本当に最後までくだらないことを言いやがる……」

その時、リョウの顔に暖かい物が触り、手の傷口に布が巻かれた。

「大丈夫ですか？」

リョウがうつすらと目を開けると、一人の少女が傷の手当てをしながらリョウの顔を覗き込んでいた。少し痩せ過ぎだがスタイルのいい子だな、とリョウは思つた。

「俺なんかの手当てをすることはない……俺は死んだ方がいい」

リョウはもう一度目を閉じて呟いた。しかし少女は手当てをやめなかつた。

「でも貴方はまだ生きています。何があつても生きていれば人生は捨てたものじゃないって、私の友達が言つてました」

この店オリジナルのデザートセットが大量に詰まつた袋を下げながら、クミは言った。

教訓、時にはお気に入りの物を求めて遠出してみるのもいいかもしない。きっと思いがけない出会いがアナタを待つていて。

それからスカートはミニよりロングの方がいい。いざという時に裂いて包帯として使えるから……。

ちなみにキタジマは、インスタント食品の棚の所まで匍匐前進を続けた後、店の角で行き詰まつた。しかしその数秒後、雑誌売り場の方に直角に進路を変え、再び前進を始めた。

もしかしたらこのまま前進を続けたら再びリョウの所に戻ってしまうのではないかとの考えがキタジマの頭を過ったが、彼はそのことについては次の角まで考えないことにした。

進み続けていれば、いつか何かが起ころう。そう思いながら、彼は前進を続けた。大切なのは進み続けること……生きるとはそういうことだ。

第二話「カカシとセルロイドの美女とライオンがメリー・ポーランドの中で踊る

PM・11・50

「良かった、やっと救急車が来たよ」

僕は車のフロントガラス越しにスケアクロウのあるビルを眺めた。救急車は合計三台来ており、内一台はコンビニの前に止まっている。

「助かるといいな。カナちゃんも、パールさんも……リョウも」

僕はハンドルに顎を乗せながら呟いた。何だかひどく疲れていたが、奇妙な達成感のようなものが全身を包んでいる。妙な話だ、まだすべてが解決したわけでもない、カナにも失礼だと思う。だが僕は、ともかく全力を尽くして自分にできることをやり遂げたのだ。それが何なのかと尋ねられると、ほんきりと答える自信はないが……。

「ところで、わざりヨウに向て言つたんだ？」

僕は隣のドロシーに尋ねた。

彼女と僕は近くの路上に止めてあつたリョウのマスタングに乗っていた。ドアは勿論ロックされていたのだが、いつの間にリョウから奪つたのか、ドロシーが持つていたキーで開けてしまったのだ。結局、彼女がさつさと乗り込んでしまったので、僕も同席せざるを得なくなってしまった。

「良かったね、って言つたのよ。探していたものが見つかって良かつたね……つてね」

「…………どういうこと?..」

しかしドロシーは笑つて答えなかつた。

「それよりもドライブに行きましょうよ」

「ドライブ?..」

「そう、夜明けの海までね……車は運転できるでしょ?..」

ドロシーは座席で伸びをした。

僕らのこる町から東に山を一つ越えると海に arriv。綺麗な砂浜を抱える小さな町で、夏には多くの海水浴客で賑わう所だ。しかし今時季に来る者などいるはずもなく、真夜中とこうこともあって、ただ黒い海が広がっているだけだつた。

「……暗いね。まるで大きな黒い壁みたいだ」

僕は海岸沿いの道路脇に停車すると、ドアにもたれながら呟いた。

「そのうち明るくなるわよ」

ドロシーは車を降り、海岸へ続く階段を降りていった。

僕が後に続くと、階段の下には一本の小さな街灯が立つていて、その近くには様々な物が置いてあつた。どうやら粗大ゴミが不法に捨ててあるらしい。

その中に、大きな白いソファーがあつた。

「ああ、これはいいわね」

ドロシーはソファーを引っぱり出すと、呟いて砂を払い始めた。

近くで見ると、それはまだ新品と言つてもいい物だつた。

「それはどうするの？」

尋ねると、ドロシーはソファーを運ぶのを手伝ひにまわつた。

「これに座つて待つのよ。まだ時間はあるしね

「……海を眺めていると、昔のことを思い出すよ」

ソファーに腰かけて黒い海を眺めながら、僕は独り言のように呟いた。

隣ではドロシーが、僕にもたれるようにして座つてゐる。

「さあ……リョウとやつ合つた時に頭を打つたせいかな？ 妙なことを思い出したよ

「何？」

「昔のことが。本当に小さかつた頃の話だ

「……聞きたいな」

ドロシーが小さな声で言つ。

僕はドロシーの肩を抱き寄せ、視線を海から空に移して話し始めた。

「昔、両親が僕を連れて遊園地に行つたことがあつたんだ。僕の両親は仲が悪くてね、いつも喧嘩ばかりしていた。本当は二人とも、全然悪い人なんかじゃないんだ。一人で腹を立てたりする人じゃないんだ。いつも機嫌が良くて僕に優しかつたよ……一人ならね。僕は未だにあの人は達が、どうして喧嘩していたのかわからない。別にどちらかが浮氣していたわけでもなかつたし……共稼ぎだったから経済的なことでもないとと思う。ただ、あの人は達は顔を合わせると必ず喧嘩した。何気ない一言でもすぐに腹を立てて喧嘩を始めるんだ。まるで二人とも、相手の言葉が違う意味に聞こえているみたいだつたよ。

最近思うんだ、あの二人は、同じように聞こえる『違う言語』を使っていたんじゃないかなってね。一人とも違う惑星からこの星に来た宇宙人で、使う言語は似ているんだけど微妙に意味が違う……実際そんな感じだつたよ」

「それならどうして結婚したのかな？」

「さあね、それもわからなによ。多分、出会つた時はそんなに言葉がズレてなかつたんじゃないかな？」

僕は話を続けた。

「とにかく、ある日僕達は遊園地に行くことになつたんだ……」

遊園地は曇りだつた。

まだ昼間なのに辺りは暗く、青い雲が空を被い、日の光はその隙間に白く見えるだけだつた。でも僕は上機嫌だつた。今日は珍しく家族揃つての外出だし、両親の機嫌もいい。一人で一緒に話をして

笑つてなんかいる。

「やっぱり、こういうのが家族つてものだよね」

僕はテレビのホームドラマを思い浮かべながら呟いた。僕は昔から『型通り』が好きだった。少なくとも型にはまらずバラバラにいるよりはいい。

とにかく、僕は上機嫌だった。ピエロに赤い風船も貰つたし。

「ママ。僕、あれに乗りたいな」

僕の指差した先には大きなメリーゴーラウンドがあり、青い雲の下で回転していた。

僕は沢山ある木馬や馬車の中から、白い木馬を選んで乗った。空色の角の生えた綺麗なやつだ。最初から手をつけていたのだ。

「パパ、ママ！ 見える！？」

僕は木馬の上で両親に手を振つた。両親は僕を見て笑いながら手を振り返してくれた。僕は嬉しくなつて勢いよく体を前後に振ると、まっすぐに木馬の進む方向を見つめた。

音楽が鳴り響き、メリーゴーラウンドは動き始めた。微かな地響きと機械の軋む音がし、木馬は上下に動きながら進み始めた。

僕は両親に手を振り続けた。両親の姿が中央の柱に消えるまで手を降り続け、消えてから前に向き直つた。

メリーゴーラウンドは回転した。

一周目、僕が元の位置に戻つた時、両親は僕に手を振つてくれた。

二周目、両親は何か話していたが、僕に気づいて手を振つた。

三周目、両親は僕を見ることもなく言い争つていた。僕は声をかけることもできず、ただそれを眺めていた。

両親の姿が柱の影に消える時、彼等が大きな身ぶりで言い争つているのが見えた。

「嫌だつて思つたよ。今日は親の喧嘩している所は見なくていいと

思つたのに、ってね。勿論、そんなにはつきりと想つたわけじゃない。それに近いことや……何せ小さかったからね

僕は少し話すのをやめた。ドロシーは何も言わず、ただ静かに待つてくれている。

まだ冬には程遠いが、流石に夜中の海岸は寒い。しかしドロシーと触れあっている所はとても暖かかった。

僕は話を再開した。

「…………どうしようか考えたよ。でも、どうしようもないだろ？ メリー、ゴーラウンドは回転しているんだ。嫌でも元の位置に戻つてしまつ……親のいる所にね。どうしてなんだろう？ って思ったよ。今日は何もかもうまくいきそうだって思つたのに……完璧な『家族』みたいだったのこって……ゴメン、これは今つけ加えたね。でき過ぎてる」

親は喧嘩した後、必ず僕に離婚したらどうひいて行くか尋ねた。そんなこと答えられるわけがない。僕は両親のどちらも好きだつた。でも両親は、お互いを憎んでいた……いや、お互いを理解しよとしていなかつた。

僕は今でも疑問に思つ。人間は本当に、お互いを理解し合えるのだろうか？ 他人を信じたり、愛したりできるのだろうか？

僕の両親の間に『愛』というものはあつたのだろうか？ 今は別々の星に住んでいる、言葉も通じない一人が、かつて一度でも同じ星に住んだことがあつたのだろうか？

僕は未だにこの問題に答えを出していない。ただ、僕に言えるとしたら、誰かと誰かが会話して、愛し合つて、お互いを理解し合えるとしたら、それはとても凄いことなんぢやないかってことだ。

多分、本当の奇跡つてやつは、そういうものなんぢやないかと思う。

「僕がどうあがいてもメリーゴーラウンドは動くのをやめなかつた。

そこから逃げ出せれば良かつたんだけど、僕は木馬の上から動けなかつた。きっと物凄く混乱してたんだろうね……メリーゴーラウンドを止める代わりに、自分の時間を止めてしまつほどい

「……自分の時間？」

僕にもたれていたドロシーが、顔を上げて僕を見つめた。

「後から聞いた話だけどね。僕は木馬から落ちて、そこで倒れたまま動かなくなつたそうなんだ。意識を失つたとか、息をしていないとかじやなくて……ただ精神を一時停止させたみたいだつて医者が言つたつて」

「元には戻つたの？」

「勿論さ、だから僕がここにいるんぢやないか。でも、それから一週間もその状態が続いたそうだよ。目を覚ました時には、両親はもう離婚してた……まあ、嫌な所を見ずにするで良かつたのかな」

僕は小さく息を吐いて言つた。

「もつとも、僕が時を止めている間に両親が仲良くなつてくれていたなら、それが一番良かつたんだけどね」

僕は両手に顔を埋めて言つた。

「……臆病なんだろうな、僕は。傷つくるのを怖がつてる……誰かを傷つけるのも怖がつてる。僕は他人のことを理解できないし、誰かのすべてを許すことができない……自分勝手でエゴイストだ。僕は、愛し合いつついうのは誰かと痛みを共有することだと思つ。わかり合えなくて誰かが僕を傷つけて……僕も理解できずに傷つける。それでも、それを許し合つのが愛だと想つ。でも僕は、それに耐えられそうにない」

「……大丈夫だよ。そのつりができるよつこなる」

ドロシーが囁いた。

「それから、アタシは愛つていつのは喜びを共有することだと思つ

な

「……そうかもね」

僕はドロシーを見つめた。暗闇の中で、彼女の瞳が星のように煌

めいていた。

「何ごとも経験だよ。最初は誰だってできないものよ」

AM・2・13

ごく自然に、僕達の唇が触れ合つた。

まるで僕らの間に引力が働いたように、僕らの体は互いを引き寄せ合つた。

……もしかしたら、本当に力があるのかもしない。ニュートンだつてアインシュタインだつて解明できないかもしないが……確かに何かの力だ。

この世界の法則は、僕らに生きると言つているのかもしない。

僕が偉そうに言つことではないかもしないが、人と人が愛し合う上で最も大切なことは、相手に何かを与えることだと思う。そして、自分がどれだけ相手のことを大切に思つてゐるか、どれだけ必要としているか……それを伝えることが必要不可欠なんじやないかと思う。

そうすれば、相手も自分に何かを与えてくれるだろう。
……もっとも僕の場合、貰い過ぎたような気もするが。

AM・6・17

白い輝きが闇を切り裂いた。

闇の隙間から射し込まれた光は世界を空と海と大地に分け、空に暗い雲の波を、海に輝く光の波を浮かび上がらせた。

闇は瞬く間に千々に砕け散り、世界は光を受け入れた。

「……朝だね」

僕は呴いた。全体が微かな疲労感に包まれている。耳鳴りがして、意識が自分の体よりも少し上方にあるようだ。素肌に直接当

たる朝日が心地よい。

「そうね、綺麗」

僕の上に覆い被さるようにして座つていたドロシーは、僕の額の髪をかき上げて僕の目を覗き込み、意地悪く微笑んだ。

「悪くなかったわ……少し経験不足だけね」

……この女は本当に最後まで余計なことを言つ。僕は不機嫌な顔を作りたかったが、自然と笑みがこぼれていた。

「わかつた……努力するよ」

何だつてこんなことを言つてるんだか……まあいい。

僕が起き上がる、ドロシーは服を身に纏い始めていた。

僕には何故かわかつっていた。

……もづ、会えないってことが。

僕が服を着て立ち上がると、すぐ近くから波の音が聞こえた。いつの間にか、波打ち際がすぐそこまで迫つてきている。満ち潮なのだろうか？ 砂浜の上に薄く広がった水面は朝日を反射し、硝子でできた平野のようだ。

ドロシーは赤いサンダルを脱いで肩にかけ、足を波に浸していた。大地が呼吸しているような、そんなリズムで打ち寄せた波は、ドロシーの足にじやれ合つた後、素つ気なく退いていく。

「水はもう冷たいね。でも気持ちいいよ」

振り返つたドロシーの顔の向こうに、白く輝く太陽が見えた。初めて会つた時には月が輝いていた……たつた一日前の出来事なのに、もう何年も彼女と共に生きた気がする。

「……ほんとだ、もう冷たいね」

僕は素足で砂浜に降り、波に足を浸した。

見ていただけではわからなかつたが、水は本当に冷たく、浸した足が冷たく堅い物で締めつけられている感じがした。足の裏で薄く積み重なつた砂が崩れ、砂の粒が指の間に入り込んでくる。少しすると、徐々に冷たさにも慣れてきた。

僕は足の裏の感触を確かめながらドロシーの方に歩き始めた。

僕が隣に立つと、彼女は顔にまとわりつく髪を気にすることなく僕を見つめた。

「もう行かなきゃ」

ドロシーが言った。

「うん」

僕は呟いた。

「もう会えないかもね」

ドロシーが言った。

「……」

僕は答えなかつた。

僕達は自然と太陽を見つめた。

「でも……でも僕は、必ず君の所に行くよ。いつか必ずね」

「……うん」

朝日を見つめたままドロシーが呟いた。

僕はその場で体の向きを変えると砂浜を戻つた。

「……じゃあね。また、何処かで……」

僕がソファーの所まで行つた時、後ろでドロシーの声がした。
僕は振り返らずに歩き続けた。

AM・6・28

砂浜から続く階段を素足で登り、道路脇に止めておいたマスタン
グの所まで来た時、僕はそこに一人の男がいることに気がついた。
男は車のすぐ横のガードレールにもたれかかって座り込んでいた。
高級そうな灰色のスーツを着込み、同じ灰色のコートに身を包んで
いたが、コートはあちこち破れて汚れており、濃い灰色のネクタイ
はだらしなく首に引っかかっている。男は大きく口を開けて眠つて
いたが、僕に気づいたのか目を開けて、口についたよだれを拭き取

つた。

「やあ、これ君の車かい？ 子供のクセにいい車に乗ってるじゃない」

男の顔はかなり端正なものだったが、まるで体の内側から腐つてきているような雰囲気が表情に現れていた。僕は男の左の頬に、大きく曲がった三日月形の傷があることに気づいた。

「最近のガキは酷いもんだ、まるで下品なブタの集団だよ。眞面目に働いて金を稼ごうなんて気がまつたくない……親に甘やかされて育っているんだな、何処でも自分勝手が通用すると思ってる。奴らには、この国を良くしていこうって気がまつたくないんだ」

男は僕が無視して車のドアを開けようとするのにもかまわず喋り続けた。

「僕は心配してるんだぜ？ この国の未来ってやつを。今にこの国はダメになる、みんな腐つちまうんだ……君達が初めの症状つてやつだな。この国はダメになる……これじゃ死んだ方がましだな！」そして男は、引き攣った声で笑い始めた。

「……それで、貴方は一体何をしたの？」

僕は男に尋ねてみた。

男は僕が返事をすることを予想していなかつたらしく、酷く狼狽えて口籠つた。

「それに……人生は捨てたもんじゃないよ。多分ね」
僕は振り返つて海岸を見た。

潮が引いてきたのか、海岸線は少し後退しているようだつた。砂浜には白いソファーガボツリと置かれ、人の姿はない。

ただ昇りつつある太陽によつて、水平線の彼方から海岸にかけて光の道ができていた。

A M · 1 1 · 2 5

カナは白いシーツの上で目を開いた。

薄暗い部屋の中、皺のついたシーツにはカナと男の匂いがこびりついている。厚手のカーテンの隙間から射し込む光の筋の中で、白い埃の群れが舞っている。カナはベッドから頭を浮かせて男の姿を見つめた。

男は部屋の隅に置かれたソファーに座ってテレビを眺めていた。
「ねえ、終わつたんだから帰つていい？ 契約時間は十二時までになつてるけど、何もしないんだつたらいともしようがないでしょ？」
男は三十分前に『終』をしてから、ずっとテレビを眺めていた。

カナと男が知り合つたのは……正確には、契約を交わしたのは昨日のことだ。クミの話によると、男は別の町の一流商社に勤めるサラリーマンのことだつた。クミはカナの安全を確保する為、仕事の前には必ず相手の身元を調べるようにしてくれている。

男の身元は確かだつた。彼は一週間程この町に出張に来ているらしい。出張ついでのちょっとした息抜きと言つたところだろう、とクミは言つた。

「まあね、会社は一流でもその男が一流とは限らないしね
昨日の夜、カナはクミにふざけて言つていた。

「でもこの人、何でこんな朝早くにやりたいんだろうね？」

翌日、眠い目を擦りながら待ち合わせの場所に行つたカナの前に現れた男は非常に気味の悪い男だつた。

見た目が悪かつたわけではない。男は背が高く高級そうなコートを着ていたし、特徴的な所はないものの、顔立ちも整つていた。男は薄い唇の端を曲げ、少し高い声でカナに話しかけてきた。

カナは男に、まるでスタートレックに出でくるandroイドの『データ』のような印象を持つた。

……いや、『データ』の方がまだ人間らしい、とカナは頭の中で訂正した。

男は小さな声でぼそぼそと話しながらカナについてぐるようになつた。

男が顔を横に向けた時、カナは彼の左頬に二日月型の傷があることに気がついた。

何が気持ち悪いのだろう？

顔が悪いとか、変な臭いがするというのならカナも酷い例を体験したことがある。しかし男から『えられる不快感は、それらとは異なるものだつた。

男はホテルの前で立ち止まって振り返り、建物を指差して中に入るように言つた。

カナは午前中から予約を入れているのだから、もつと何処かに連れ回すのかと考えていた。若い女の子と1日中デートを楽しみたいと考える中年の男は結構多い。

しかし、どうやら男は本当に今からやるつもりらしい。モーニングサービスがつくとでも思つてゐるのだろうか？

自分でホテルに入ると決めたくせに、隠れるように素早くホテルの中に滑り込んだ男が、まだ外にいるカナに早く来るよう指図する。ゆっくりと歩いていくカナを、臆病そうな光を目に浮かべて見つめている。どうやら、この場に及んでカナが逃げ出すのではないかと考へてゐるらしい。

カナとホテルに入る所を人に見られたくもないようだ。こんな朝早くから少女を買う行為 자체、十分に恥ずべきことだと思うのだが。カナが男に追いつくと、男は小さな声で文句を言つた。カナが額いて男の目を見つめると、男は慌てたように顔を背け、わかればいい、と呟いた。

カナは先程から、この男に対する不快感の正体を突き止めようとしていたが、この場に至つてそれが男の態度からくるものだということに気がついた。カナは目を見ようとせずに話をされるのも嫌いだし、男が細かいことで文句を言うのも嫌いだつた。何より、意気地のない男は大嫌いだつた。

「料金は一時間単位で支払つて貰うからね。一分でも延長したら追加料金。それと必ずコンドームをつけること、これを守れなかつたら罰金だからね」

エレベーターの中で、カナは営業用のやや冷たい口調で男に話しかけた。男が体を強張らせたのがわかる。

カナは童顔なので客がつけあがることが多い。勿論カナはそのことを自覚していたし、普段ならもっと穏やかな回避法を使うのだが、今回は少し苛立つていたので脅しをかけることにした。

「最初にも言つたけど、もし規定の時間内に私から連絡が来なければ仲間の男達がここに押しかけて来るわ。だから変なことはしない方が身の為よ……まあ、そちらの御要望にはできる限り応じるけど？……別料金でね」

エレベーターが目的の階についた。カナは男よりも早くエレベーターを降りると、最近練習している『悪い女っぽい顔』で男にこう言つた。

「おじさんは私とお医者さんごっこしたい？」

男があからさまに動搖し、顔を激しく引き攣らせる。

カナは満足し、男から見えない所で小窓へ舌を出した。

クミはよく自分のことを棚上げにして、男には気をつけるようにとカナに言つ。

勿論、カナも用心はしているが、実際にはそれほど心配していない。男が女に勝つてているのは基本的な体力だけで、男というものは女よりも単純で……純粹な生き物だとカナは考えている。

よく女は仕事のプロになれないと言われるが、カナは少し違うよ

うに思つてゐる。男はたつた一つの仕事という愉しみに人生の全てを捧げられるほどに純粹で、女はたつた一つの愉しみだけでは満足できないほどに欲深い存在なのだ。

特に、男の『使命』とか『信念』などの苦痛さえ伴う信仰にも似た考え方には、カナにはいまいち理解できない。決して嫌いではないが、度が過ぎるとバカラしく思えるのだ。

小さい頃、カナは近所の男の子達がテレビのヒーロー『』に夢中になる気持ちがよくわからなかつた。遊び自体が嫌いなのではない。どうして内容をあそこまで忠実に再現する必要があるのだろうか？ 遊びは遊びなのだから、自分達で勝手に設定を作つて遊べばいいじゃないか。カナはそう考えていた。

だが、今なら何となく『推察』できる。

男の子達は遊びの愉しみよりも、自分達をテレビのヒーローに近づけるという作業に夢中だつたのではないだろうか？

カナはこれまでずっと大人といつもの……特に中年のおじさんが嫌いだつた。

彼等はカナの考え方や行動を認めず、古臭い習慣や形骸化した常識でカナを束縛しようとする。カナは常々、彼等は自分とは違う生物なんじやないだろうかと考えていた。

だが最近、おじさん達と接する機会が多くなり、カナはある男の子達とおじさん達にそれほどの差がないことを発見した。

おじさんと男の子の違いは遊び場の違いでしかない。男の子達は家や公園や学校で遊び、おじさん達は『社会』の中で遊ぶ。その目的は何でもいい。ヒーローのように世界を救うのでも、会社の売り上げを伸ばすのでも……国の経済力を上げるのもいい。ようは一つの目的に向かつて仲間と共に行動できればいいのだ。

この点で見る限り、おじさん達と男の子達はまったく変わらない。あえて違いを挙げるなら、『社会』という枠組みの中には人が多過ぎてなかなか主役が回つてこない……それくらいだ。

カナは、でっぷりと太つて頭の禿げ上がつたおじさん達の目の中

に、ほんの一瞬同級生の男の子達と同じ輝きを見る度に、やっぱりこの人達と自分は同じ生物なんだな、と考えることがある。もつとも、未だに好きにはなれないが。

ちなみに、小さい頃のカナは女の子と遊ぶことよりも男の子と遊ぶことが多く、ヒーロー「」の時のヒロイン役はカナの指定席だった。

カナは男の子と一緒に走り回るのが好きで、グループのリーダー格でいつも主役をやる子が好きだった。特に「僕は大きくなったら絶対に正義の味方になるんだ」と言っている時の彼が好きだった。

そして彼もカナのことが好きだと言っていた。しかしカナのことが好きだったのか、カナの演じるヒロインが好きだったのかは未だに疑問だ。

カナが部屋に入ると、男は落ち着かないハツカネズミのように部屋の中を歩き回って何かを調べていた。カナは、もしかしたら部屋に仲間の男が大勢待ちかまえていてレイプでもされるのではないかと警戒していたが、どうやらそんなこともなさそうだった。

これは知り合いの子に実際に起こったことなのでカナも気をつけているが、心の何処かでは、それはそれで楽しいかもしれないと思っているところがある。

クミは変な本の読み過ぎだとしうが、カナは性的快感に対する探究心が強い。特に『行きずりの男に身も心も犯される』というのは……前に見た映画みたいで刺激的なシチュエーションではないだろうか？

雑誌で読むところによると、女の性的快感のオルガニズムは男のものよりも遙かに深くて複雑との話だ。それなら、折角女の体に生まれたのだ、行ける所までは行つてみたい。

こういう考え方を『退廃的』と言うのだろうな、とカナは考えた。ただ、実際に自分がそんな自虐的な快楽に身を委ねるかと考えると首を横に振らざるえない。クミもよくしうが、カナはかなり自

己中心的な人間だ。カナにはまだやりたいことが幾らもある。『身も心も……』というような恋愛など、自分の行動の妨げだと考えてしまうだろう。本当に危険なのは、自分よりもむしろクミの方だ。カナはそう判断している。

カナは自分の行動を制限されるのが嫌いだ。今までの客の中にも毎月かなりの金額を支払つてもいいから自分の愛人にならないかと誘つた者がいたが、カナはきつぱりと断つてきた。

肉体関係を持つたくらいで自分を思い通りにできると思われるのは吐き気がする。

クミが一度、皮肉っぽく言った。貴女にとつては恋愛だって束縛なんでしょうね、と。

カナはそれは違うと答えた。恋愛しても相手の奴隸になる気はないだけだ、と。

今までの客はクミの選択が良かつたおかげか、問題を起こしたことはなかつたが、カナにエクスターの工の字くらいしか与えることはなかつた。

しかし今日の客は……それよりも酷そうだった。

男は部屋のチェックを終えると、カナをシャワールームに放り込み、出てきたところでそのままベッドに横たわらせた。

カナは少し落ち着かない気分になつた。自分の体に自信がないわけではないが、男の目からは欲望や劣情といったものがまったく感じられず、ただ測定用の機械のようにカナの体を眺めている。

「ねえ、立つてるだけじゃつまらないでしょ？ 時間もなくなるし

……ねえ」

カナとしては不本意だが、この沈黙には耐えられそうになかった。普通の客なら、カナの体を見ればみつともないくらいの反応を示したはず……これは自惚れで言つてはいるのではない。一流のセールスマンが自分の弁説に自信を持っているように、カナも商売の基礎となる自分の体の及ぼす効果については完璧に理解していた。

商売をする上で最も重要なのは、売る側が買い手に対して心理的に上位に立つことだ。売りつける商品がつまらない瓶の蓋でもかまわない。大切なのは自分の売りたいという気持ちを伝えることではなく、相手に買いたいという気持ちを抱かせることなのだ。それには必要なのは、自分の商品に対する絶対の自信。自分がその商品にどれほどの自信を持っているかを伝えることができればいい。

勿論、過剰に演出してはいけない。あくまでさり気なく、だ。そうすれば相手は自分の自信に満ちた態度によつて商品への欲望をかき立てられる。態度は低く、だが気持ちは高く……これがカナの考える商売のコツだ。

更に上級のテクニックとして、相手に『売りたくない』という態度をとる、というものもある。人間は隠されると却つてそれが欲しくなる。隠すのは自慢するのと同じこと……一番いけないのは相手に媚びることだ。

しかし、カナはそうは思いながらも、珍しく自分から誘う方法を選択した。

自分は裸でベッドの上に転がっている。相手はそれを立つたまま眺めている。おまけに服を着たままだ。

これでは自分がバカみたいではないか？

「ねえ、早くしようよ……ね？……何かしてあげようか？」

カナは相手が相変わらずの態度なので、これだけはやりたくないと思っていたが、知り合いのバカな女の口調を真似しながら男の下半身に手を伸ばした。

「やめろ！」

男は突然反応し、カナの手をつかんで乱暴にベッドの上に突き飛ばした。男の瞳に言いようのない光が浮かび、蠍人形のような顔に血の気がさす。口元が痙攣したように震え引きつり、頬の三日月型の傷が醜く歪んだ。

「じゃあ……何がしたいって言つんですか？」

カナはベッドの上で仰向けになつたまま肘をついて上体を起こす

と、初めて彼女本来の顔になつて男を睨みつけた。

男はしばらく血走つた目でカナを見つめていたが、やがて低く唸るようにはげた。

「余計なことは言わなくていい……」

それから男はカナの下半身に視線を這わせるといひ言つた。

「後ろを向いて四つん這いになれ」

最後に、男はカナに奇妙な命令を出した。

「そのまま動くな。何もしなくていい」

一瞬、男の口調に怒りとも悲しみともつかない感情が含まれたような気がしたが、それはすぐに消えてしまった。

カナは信じられなかつた。これまでに『動いてくれ』と言つた客はいても、『動くな』と言つた客はいなかつた。後ろからするのが好きな客はいた。前からが好きな者もいたし……下からが好きな者も、数秒ごとに姿勢を変えなければ気がすまない者もいた。

しかし皆、相手の反応がないと不満そうだつた。ある男などは、以前に買つた娘がいかに無反応でつまらなかつたかということを、カナに延々と語つた。商売熱心なカナは無反応……あまり好きではない表現だが……マグロ状態は客に對して失礼だと考えているので、感じているふりをしてあげたところ、その客は規定の三倍の料金を支払つてくれた。

良質なサービスは常に料金に反映される。言い換れば、こちらの提示した料金が支払われる以上、売り手としてもその範囲内で最大限のサービスを提供すべきなのだ。

今までの例外は六十近くの男で、これは彼が慢性のヘルニアを患つてゐるせいだつた。

だが今回の男は、まだ若いのにカナが反応することを拒否した。それで本当に楽しいのだろうか？ カナの今までの経験から考へても、それで楽しいとは思えないのだが……。

男は服を脱ぎながら、カナに早く四つん這いになるように言つた。

カナはよくわからない得体の知れなさを感じながら、体の向きを

変えようとした。

その時、男が低い声で力ナにへその所の蝶の模様は何かと尋ねた。それは力ナが先週入れたタトゥーで、青の発色が綺麗で気に入っているものだつた。力ナが説明すると、男は軽く鼻で返事をした。力ナは男がつまらなそうに小さく舌打ちするのを聞き逃さなかつた。それはまるで、高い金を出して買った商品に傷を見つけたような反応だつた。

A M . 1 1 : 2 7

カナはベッド脇の小さな机の上に置いてある缶ジュースを取ろうとして、缶を取り落とした。

絨毯の上に落下し、不規則なバウンドをして中身が流れ出す。カナは慌てて缶を拾つたが、既にかなりの量が流れ出てしまつていた。カナはこれはシミになるかもしれないなと思い、男の方を見た。

幸い、男は相変わらずテレビに集中し、缶のことには気がついていないようだつた。

カナはみつともない所を見られなくて良かつたと思い、缶を机の上に戻すと指についたジュークスを舐めた。

……疲れた。

カナは心の中で呟き、ベッドに横たわつて天井を見上げた。白いカナの肢体が映つている。カナは天井が鏡張りであることに初めて気がついた。カナの白く滑らかな腰の付け根を、引っ掻いたような鏡の傷が通つっている。

「ずっと下向いてたからなあ……」

男とのセックスは、ある意味非常に楽なものだつた。カナはまったく動かなくていいのだから。男はカナをうつ伏せにさせた後、カナの肩と後頭部を押さえつける形で被い被さると、前戯も何もなくいきなり挿入し、後はただひたすらピストン運動を繰り返した。

……本当に、ただひたすらに繰り返した。

男の動きにはまるで変化というものがなく、メトロノームか何かついているかのように規則正しかつた。おまけにそれが延々と続くのだ。

物事は機械のように繰り返せばいいというものではない。特に女

性の体から快感を引き出すには、それなりの複雑な手続きが必要だ。擦つていれば勝手に終わる男とはわけが違うのだ。

しかし男の動きは正確なくせに非常にもたもたしており、一回の挿入で引き出されかけた快感は、次の動きの前に水がこぼれるように消えてしまい、更なる快感へと発展することはなかつた。

別にこの男と楽しみたい気持ちがあるのでない。自分の体がまるで快感を覚えず、この行為をビジネスと割り切れたらどんなにいだらう？

逆に、男が凄いテクニシャンで、為す術もなく感じさせられてしまうというのも、まあ『退廃的』でいい。少なくとも、快感とも苦痛とも言えない中途半端な感覚を延々と与えられるよりは……。

カナはどうにかしてまったく感じないか、それともそれなりの快感を得られる体勢を見つけようとした。しかし男はがつちりとカナの肩と腰を押さえつけ、カナが動くことを許さなかつた。男の動きから得られるものは、カナの中のバロメーターで常に『苦痛』と『変な感じ』の中間を指していく、どちらにも移動しようとはしなかつた。

カナは頭がおかしくなりそうだつた。まるで下半身をネバネバしたぬるま湯に浸されているようだ……熱く心地よいお湯でもなく、自分の体温が感じられる水でもない、ただひたすらに気持ち悪いぬるま湯……それは氷水よりもカナから体温を奪つていき、言いようのない不快感をこびりつかせた。

カナは泣き叫んで男から離れたい衝動にかられたが、男は腰の動きを変えることなく、凄い力でカナを押さえつけている。

カナは嗚咽をもらしそうになつたが、声を出して感じているように思われるのも絶対に嫌なので、必死になつて耐え続けた。

男は最後までまったくリズムを変えることなく腰を動かし続けた。永久に続くかと思われた地獄のような不快感をひたすらに耐えていたカナは、男が射精した後にもカナの体を離さなかつたので、遂に気が狂いそうになつた。そして男の力が弛んだ一瞬の隙をついて

脇腹に肘打ちを食らわせ、何とか脱出に成功した。

知らず知らずの内に涙がこびりついた目で男を睨みつけると、男は淡々とコンドームの処理をしていった。永久に続きそうなピストン運動の摩擦でコンドームが破れてしまつという悪夢を見ていたカナは、男のコンドームが正常だったのを見て息をついた。

何の準備もなく挿入されたせいで、膣が炎症でも起こしているようには痛む。

カナは男がもう一度やると言つたら男を殺してでもこの部屋を出る氣でいたが、男は相変わらず情欲の欠片もない目でカナをチラリと見ると、そのままカナに背を向けてベッドを降りた。

ベッドの端に移動して枕元の置き時計をつかみ、いつでも男に投げつけられるように身構えていたカナは、男が服を着始めたので緊張を解いてベッドの上に横たわった。

これでもし、男がカナに笑いながら「気持ち良かつたか？」とでも尋ねていたなら、カナは男を本当に殺してしまっていただろう。カナはクミも言う通り、非常にプライドが高いのだ。それを守る為なら何でもするだろう。カナはそう自覚していた。

しかし男は何も言わず、知らずに一命を取り留めた。

男は椅子に座つてテレビのスイッチをつけた。

カナはぼんやりと画面を眺めていたが、やがて自分を抱き締めるように体を折り曲げた。

カナは天井に映る自分の体を眺めていた。

窓から細く射し込んだ光はカナの張りのある左の乳房にかかり、その白い肌を更に白く輝かせている。すつきりと浮かび上がつた鎖骨から腹部への流れを眺めながら、カナはぼんやりと考えていた。あの男は、一体何なのだろう？

最悪なセックス……カナは十数回目の同じ結論を下した。

確かに彼とは行きずりの関係でしかないし、愛情のこもった繊細な……満足できるセックスを望むことは最初から間違っている。終わればそれつきりで問題はない。

あの言い知れぬ不快感は、まだべつたりとカナの体の内側にこびりついていた。まるでガン細胞のようにじわじわと繁殖し、体を侵食してゆくような気がする。

……何が気持ち悪かったのだろう?

カナはさつきからこの疑問の答えを探していた。その時、男の見ているテレビから「お前なんか人間じゃない」との台詞が飛び出し、カナに答えを与えた。

そう、男はカナのことを人間として扱つていなかつたのだ。

今までにも、カナをただ単に性欲の対象としてしか見なかつた者は多い。彼等は滅多にありつけないご馳走のようにカナの若い体に飛びついた。時にはその欲求が暴走し、乱暴な行為に走らせることもあつたが、そういう客はむしろカナとしては扱いやすかつた。買い手の欲望が大きいければ、売り手であるカナは精神的優位に立ちやすいからだ。

相手がカナの体を求めれば求めるほど、カナの商品としての価値は上がり、相手の欲望をコントロールすることは容易くなる。

しかし、この男はカナの存在そのものを否定した。彼はカナの人格を否定し、一個の人間として自分と交流することを拒絶した。

……つまり彼は、私のことをダッチャウイフか何かのように扱つたわけだ……。

カナはそう結論づけ、同時に激しい憤りを感じた。

カナは、セックスというものは皮膚の擦りあいではなく『交流』の一形態だと考えている。勿論、客とカナとの間には金の取引が横たわっているが、それでもカナは客との交流を大切にしてきたつもりだった。

実際、ことが終わつたらさつさと帰つてしまふ同業者が多い中で、

カナはおじさん達の世間話や愚痴を辛抱強く聞くといつ、彼等の家族でさえ行つていらない崇高な行為をサービスとして提供していた。

人生に疲れたおじさん達は、十七歳の可憐な天使が自分の話を熱心に聞き、しかも時折「それは大変ですね」とか「がんばって下さいね」などという言葉を与えてくれるというだけで、規定の料金の何倍もの金を当然のことく支払ってくれた。

カナは冷静な実業家ではあつたが、常に計算で動いているわけでもない。彼女は話を聞いて自分が大変だなと思うから「大変ですね」と声をかけているだけなのだ。相槌を打つことに金がかかるわけでもなく、大した時間の浪費になるわけでもないのでだから、幾らサービスしてもかまわない。その考え方が、カナを実業家として成功させていた。

ふつふつと湧き上がってきた怒りは、しかしそれ以上の疑問によつて打ち消された。

……でも、何でそんなことするんだろう？　それで気持ちいいのかな？

ダツチワифを人間に近づけるというのなら……まだわからぬもない。しかしその逆をして何の意味があるのだろう？

勿論、無反応のマグロでも人形よりは気持ちいいだろうとの自信はある。でも、折角こうして生身の人間とセックスできるのだから、どうせだったら人間らしい反応を楽しむべきではないだろうか？

少なくとも自分が男だつたらそうするだろうな、とカナは考えた。

「……ねえ

男はカナが声をかけてきたことに驚いたのか、痙攣したような動作で振り返つた。

「ねえ、どうしてこんな朝早くからこんなことしてるの？」

カナは昨夜から抱いていた疑問を口にしてみた。すると男は、何だそんなことかといった嫌そうな表情をし、無言のままテレビの方に目を戻した。

テレビでは昼のニュース番組をやっていたが、男は特に熱心に見ているわけでもなく、時間潰しでもするように大きな冊子を見ている……それは全国の鉄道の時刻表だった。

どうやら彼は、本当に帰りの電車の時間までの時間を潰しているようだ。

彼は小さな声で昼過ぎの列車で帰るんだと言った。

力ナはせつかく女の子と一緒にいるのだから、もつと有意義な時間の過ごし方があるのでないかと思ったが、男はもう力ナには何の興味も示さず、自分一人の世界に閉じ籠ってしまった。

テレビではニュースが流れ続けていたが、不意に画面が切り替わり、アメリカで起きた事件の速報に変わった。

それはとあるアメリカの地方都市の更に外れの荒野で、ある男が爆死したという事件だった。話によると、その男は勤め先の軍需施設から爆薬を盗み出し、荒野に積み上げて、その中に立てこもったらしい。

男は全國のあらゆる所に自分の考えを書いた手紙を出し、集まつたマスコミと軍と野次馬の前で演説を行つてから、積み上げた爆薬を銃で撃ち抜いた。その爆発は、男を中心として半径数百メートルを吹き飛ばしたといつ。

幸いなことに、集まつていた者は皆、男の忠告に従つて遙か彼方に逃げていたので、野次馬とマスコミと軍の関係者の鼓膜が破れかけたことを除けば、被害は数キロ離れた町の老婆が爆発の音に驚き、椅子から落ちて腰を痛めたくらいだった。

凄まじく派手で大がかりで……その割に被害の小さな自殺だ、と解説者は語る。

だが、それは被害の範囲を人間とその従属物に限定した場合の話だ。現地のレポーターも解説者も、一瞬にして命を奪われたであろう荒野の植物や小動物については、一切触れていなかつた。

騒動の中心となつた人物は、軍需施設で長年に渡り爆薬の製造と

管理を行つてきたという四十代の独身男性だった。

男の最後の演説を要約するところだ。

「私は長年爆薬を扱う仕事をしてきたが、これ以上自分の造つた爆弾で人が死ぬのは耐えられない。だからここで爆薬を処理して自分も死ぬ」

そして最後にこう言った。

「全ての人々に愛と平和がもたらされることを！ 戰争のない世界が実現することを私は願う！」

その後レポーターは、男は非常に物静かで同僚と話をすることが少なかつたこと、誰も彼が何を考えているのか知らなかつたこと、女性との浮いた話もまつたくなかつたこと……そして男の部屋から世界中の紛争や対立に関する雑誌や新聞記事の切り抜きが見つかることを伝えていた。

やがて生中継で画面に映し出されたのは、唾を飛ばしながら喚き散らしている軍需施設の最高責任者だった。

彼の話の内容はこうだ。

「誰が爆弾で死のうが知ったことか！ もっと軍は爆弾を落とすべきなんだ。そうしないと在庫が処分できんではないか！ 理由なんかどうでもいいんだよ、爆弾を落とせればそれでいいんだ！ どうせ死ぬのは知らない下等民族どもなんだからな！」

それからしばらくの間、画面には花畠の映像と『しばらくお待ち下さい』の文字が流れることになった。

「何でそなことしたのかな……抗議なら、他に方法は幾らでもあるのに……」

力ナは首をかしげて呴いた。

「大体どうしてそんなこと、そのおじさんがしなくちゃいけないんだろう？」

「……やるしかなかつたんだ。彼にはそうするしかなかつた」

返事を期待していたわけではなかつたカナは、男がいきなり反応したので驚いて起き上がつた。男はテレビから目を離すことなくじつとたたずんでいる。

「……どうして？」

カナは質問した。出会つてから初めて、彼と『会話』ができるかもしれないと思つたのだ。

「どうして彼はこんなことをしたんだと思うの？」

「……多分……本当に世界の平和を望んでたんだろう……」

「どうして？」

「彼は……人を愛してたんだ」

「……どうして？」

カナは同じ質問を繰り返した。

「どうして、この人がそんなことを思つてたつてわかるの？　この人は今までほとんど人付き合いをしたことがなかつたつて言つてたじゃない。もしかしたら、本当は人を殺したいと思ってた可能性だつて」

「彼はどうすればいいかわからなかつたんだ……ずっと」

男が呟く。その声は今までの中で最も掠れた小さな声だったが、不思議と胸に響くものがあった。それから男は信じられない台詞を……少なくともカナはこの男が言うことは絶対にないと思っていた台詞を吐いた。

「結局、人は独りでは生きられないんだ……誰かと関係しないと生きていけないんだ」

カナは驚いていた。いきなり目の前に宇宙人が現れて「やあ、あそここのコンビニのパンつて美味しいよね」と言われたくらいに驚いていた。

つまりこんな例えを思いついてしまつほど、カナは驚き、混乱したのだ。

カナの視線に含まれた驚愕と懷疑を感じ取ったのか、男は初めてカナの目を見た。

男の目は大きく見開かれ……まるで初めて力ナという存在に気づいたようだつた。男の手が震え、ビニール製の安っぽいソファーの肘置きに爪が突き刺さつた。

「……僕が悪いんぢやない……」

男の声に込められていた感情は、一瞬にして爆発した。

「僕が変なんぢやないんだ！　この世界が変なんだ。皆、嘘つきで傲慢で……気持ちの悪い奴らばかりなんだ。大体お前は何だ！」力ナはどうして男が叫び出したのかわからなかつた。そもそも、力ナはテレビの男について喋つていたはずなのだ。

男は立ち上がりて力ナを睨みつけた。

「体なんか売つて、そんなことが許されると思つていいのか！」買つたのは自分ぢやないか。そう思つた途端、男の両手が迫り、力ナはベッドの上に押し倒された。

喉が押し潰され、気道を通る空気が奇妙な音をたてる。

ぼやけた視界の中で、男の頬の傷が奇妙に赤く浮かび上がつている。

力ナは震える指先で男の腕を搔き剥つた。だが男の力は想像以上に強く、指は今にも皮膚を突き破りそつた程にきつく食い込んでいる。

「体を売るなんて最低だ！　そんなことで愛なんか得られるものか……お前らのような奴がいるからこの国は悪くなつたんだ！」

男は泣き叫んだ。

涙を流していたわけではない。だが男は、間違ひなく『泣いて』いた。

「人と人はもつと深く結びつぐべきなんだ！　お互いがお互いを愛し合い、傷つけることなどあつてはいけないんだ！　お互いを信頼し合い、裏切るようなことは起こつてはいけないんだ……世界には愛が必要なんだ！」

彼の最後の言葉は、『世界』ではなく『僕』と置き換えて良かつたかもしねない。

しかしカナは、男の言葉など聞いてはいなかつた。

男は腹部に衝撃を感じ、カナの喉を離して腹を押さえ、床に這いつくばつた。胃液を吐き出しながら何度も床を叩き、やつとの思いで顔を上げる。

そこにはベッドの上に立つ少女の姿があつた。両の瞳に怒りの炎を宿し、自分を見下ろしている。

少女は一糸纏わぬ姿だったが、男の目には神々しくすら見えた。この少女なら自分を救ってくれるんじやないか……そう考えた。しかし、カナにそれを期待するには、気づくのがあまりにも遅過ぎた。

「貴方が私を買つたんでしょー? セツセと金を払つて帰りなさい!」

少女の唇の隙間から、天啓のじとき言葉が放たれた。

AM・11・45

カナは床に這いつくばつた男が立ち上がるのを見つめていた。

男は燃え尽きたような表情でコートを纏い、財布を取り出し中からまとめて紙幣を引つ張り出した。そしてそれが何枚なのか確かめようともせず、全部をカナの足下に放り投げた。

男は地獄行きの判決を下された亡者のような足取りで部屋を去つた。

部屋を出る時、男は振り返つて呟いた。

「お前なんか嫌いだ……死んじまえ……」
と。

部屋を出た男は何故かエレベーターを使わず、狭い非常階段を使

つて下に降りようとして途中で足を滑らせ、一階まで転げ落ちた。男はボロボロになつたコートを気にすることもなく、掠れる声で呟いていた。

「……僕は君のことが怖いんだ……」

AM・11・46

カナはシーツの中で自分の体を抱き締めていた。

乳房のやわらかな感触と、皮膚の下の細い骨が感じられた。

カナは誰かに抱き締めてキスして欲しかつた。本当にカナのこと理解してくれる誰かに……抱き締めて欲しかつた。

カナは男から声をかけられること多かつた。数人の男性とは付き合つた経験もある。その関係は肉体関係にまで発展することもあつたし、プラトニックなものもあつた。ただ全てが同じような終わり方をした。

男は皆、大体一ヶ月くらいで「」と言つた。そんな女だとは思わなかつた……と。

そして大抵、その直後にカナのもとを去つて行つた。

かつて、クミに言われたことがある。

「確かに、貴女を理解できる男がいたとしたら、それはかなりの変わり者でしょうね」

いつでも憎まれ口を叩く背の高い親友を思つて、カナは少し微笑んだ。クミは自分が同情されていると思つていいようだが、それは違う。

クミがいなかつたらどうなつてしまつだらつ？ 彼女との友情を中心の支えにしているのは自分も同じだ。

だがその時、クミの言葉を思い出し、カナは更にきつく自分の体を抱き締めた。

貴女にとつては恋愛だつて束縛なんでしょうね

それは違う、と力ナは思った。

力ナには誰かが必要だった。

それはありのままの力ナを抱き締めてくれる者でなければならなかつた。力ナは可愛いだけの御人形になるつもりはなかつた。

力ナはベッドの中で考えた。

こういう気分を『孤独』と言つのだらうな……と。

AM・11・58

力ナは服を着ると部屋を出た。追加料金を取られたくなかったのだ。

力ナはいつまでも落ち込んでいるのはやめにしようと考へ、それから週明けに数学のテストがあることを思い出した。

空は綺麗に晴れていた。

力ナは気分直しに別の男のことを考へ始めた。予備校でいつも窓際の席に座つて外を眺めている、少し年上の男のことだ。

力ナは彼の何処か寂しそうな目が好きだつた。いつも窓から何を見つめているのか知りたいと思つていた。

半年程前、街で知り合つたリヨウという男に紹介されて、力ナは彼と知り合つた。相手もどうやら力ナのことは予備校で知つていたようだつた。

リヨウは彼を呼んで力ナの『ビジネス』のことを話した。力ナはどうしてそんなことを言うんだとリヨウを怒つたが、彼は少し黙つてから「それは凄い」と呟いた。それは興味本意な言い方ではなく、力ナのことを軽蔑したようでもなかつた。彼は力ナのことを、本当に『凄い』と思つたようだつた。

その後、彼と親しくなればなるほどに、力ナは彼の知識の広さと深さに驚かされた。彼はまた、纖細な感受性と鋭い洞察力を持つていた。ただ残念なことに、その纖細さに邪魔をされて、十分に能力

を発揮できていないように感じられた。

「まあ、あんな変わった人を理解できるのは、やっぱり相当の変わり者だつてことよね」

呟いて、カナは少し意地悪く笑つた。

クミは性懲りもなく、今度はリョウのことを気に入つていいらしい。

確かにカナもリョウのカリスマは凄いと思つていた。彼に『ビジネス』のことを勝手に話したことを除けば、自分のことを見下さずに対等な関係を持つてくれているリョウのことを、必要以上に嫌う理由はない。

しかしカナは、リョウとこれ以上の関係になるつもりはなかつた。何と言つうか……根本的な所で、リョウがカナに対して敵意を抱いているような気がするのだ。

それにリョウは、仲間と共に夜の街で好き放題に暴れてい。そしてカナは、彼がリョウの仲間に引き込まれていてことを知つていた。

できることなら、カナは彼がそんなことをするのをやめて欲しいと思つていた。

しかし、そうなるとリョウと対立することになるかもしれない。流石のカナも、あのリョウと敵対するのは危険だろうなと考へざるをえなかつた。

カナは背伸びをして嫌な感じを振り払い、光に満ちた街に一步目の足を踏み出した。

こんなにいい天気なのだ。もしかしたら思いがけない出会いが待つてゐるかもしれないじゃないか……。

「エンタープライス号、発進！」

カナは子供っぽく呟いた。

AM・6・07

カナはベッドの上で目を覚ました。

辺りは暗く、カーテンのかかっていない窓から見える空に太陽の姿はない。空は淡いすみれ色を呈しており、夜明けが近いことを告げている。

カナはパリッとした堅いシーツの上で体を動かし、ここが何処かを探ろうとした。

自分の体温のこもった蒲団をどけて上体を動かそうとした時、右腕に鋭い痛みが走った。見ると何重にも包帯が巻かれている。カナは自分が病院にいることを思い出した。

……そうだ、自分は腕をリョウに切られて病院に担ぎ込まれたのだ。

それからカナは、傷を縫う為に病院の中を運ばれていく気配を薄れてゆく意識の中で感じていたことを思い出した。

確かに医者は、隣にいた誰かに傷はそんなに深くないし出血も少ないから大丈夫だと言っていた。それから医者は応急処置が良かつたのだろうと言った。

最後にクミの声を聞いたような気がしたのだが……氣のせいだろう。

そう思つたカナは、自分の足下に突つ伏すようにしてクミが眠つているのを見て吃驚した。どうやらクミの言つ通り、情報の伝達速度は上がっているらしい。今度、パソコンの使い方を教えてもらおう。

カナはクミが穏やかな寝息をたてているので、起こさないよう慎重にベッドから抜け出した。立ち上がった時に一瞬目眩いがしたが、何とか大丈夫だった。

スリッパがなかつたので、直接素足で堅い床の上に降りた。足の裏からしつとりとした冷たさが伝わってくる。力ナの意識は次第に覚醒し、冴えていった。

ピアノの高いキーを叩いたような不思議な静けさが病室を満たしていた。夜明け前の空気が白い病室を青く染めている。

力ナはクミの頬をそつと撫でた。クミは少し呻いて体を動かした。力ナは微笑み、今度は頬に軽くキスをし……ふと、クミのスカートの裾が破れていることに気がついた。

病室を出ると、薄暗い廊下が延々と続いていた。所々には、窓からの光が青白い筋を投げかけている。そんな中、目を引く赤いものがあつた。それは力ナの病室の前に置かれた長椅子に寝転んだミンクだった。

ミンクは筋肉質な腕を投げ出していびきをかいていた。派手な服はくしゃくしゃになり、化粧の落ちかけたゴツゴツとした頬に無精髭が生え始めている。力ナはそんなミンクを見て微笑み、ありがとうござります、と小さな声で言つた。

それから力ナは何を思うでもなく歩き出した。

病室と同様、廊下も静まり返つていた。

と、パタパタという足音と共に、廊下の遠くの方を白い看護婦の姿が走り去るのが見えた。何処かの病室から呻くような声が聞こえ、病室内がにわかに騒がしくなる。そして、またパタパタという足音と共に看護婦達が駆けつけてきた。

冷えきつた病院の中で、そこだけパツと火がついたように慌ただしくなり、誰かが叫ぶ声が聞こえた。

力ナは少し離れた暗闇の中からそんな様子を見ていたが、また歩き出した。

廊下で赤ん坊を連れた夫婦とすれ違つた。一人は声をひそめて赤ん坊に話しかけていたが、力ナに気づくと幸せでたまらないといつ

た笑顔でお辞儀をしてきた。

カナはぼんやりと赤ん坊を見つめていたが、慌てて微笑み、お辞儀を返した。

二人は幸せそうにカナの隣を通り過ぎた。
カナは親子を見送つて、しばらく立っていた。

……あの赤ん坊が、幸せな人生を送れればいいのだけれど。

しばらく歩くと、とてもとても静かな場所についた。その一帯には、今まで微かにしていた人の活動の気配というものがまったく感じられなかつた。

ある病室の前の廊下に、壁に背をつけて座る一人の男の姿があつた。

男は革のズボンに包まれた長い右脚を投げ出し、折り曲げた左脚の膝の上に腕を乗せ、じつと病室のドアを見つめていた。

細かい皺の刻まれた精悍な顔の中で、濡れたようなエメラルド色の瞳が光つている。

男は一瞬でも病室のドアから目を離すと何かが失われてしまうかのように顔を動かさなかつたが、カナが近づくとチラリとカナの方に目を向けた。

「…………何だ……君か…………」

流れるような発音でカウボーイは言った。眠つていらない為か声に力はなく、疲れ果てた感じだ。カウボーイは微笑み、カナが無事で良かつたと言つた。

「この中には……あの女人の人気がいるんですか？」

カナは病室のドアを見ながら言つた。ドアには『面会謝絶』との札がかけられている。カナはパールが、カウボーイを庇つてリョウに切られた瞬間のことを思い出していた。

「あの人、助かるんですか？」

カナはカウボーイの隣に立つて尋ねた。

「難しいところだな……」

沈んだ声でカウボーイは答えた。

「傷は深いし、出血も酷かつた。だが、大丈夫だ」

「本ですか？」

「……多分ね」

カナはカウボーイの言葉が不謹慎だと思ったので気を悪くした。
「恋人なんでしょう？ そんな言い方つてないですよ」

カウボーイは不機嫌なカナの顔を見て少し微笑んだ。

「パールは……ああ、パールというのは彼女のことだが……僕の恋人じゃないよ。逆に僕のことを憎んでるくらいだ」

「……そんな……どうしてですか？」

カナが尋ねると、カウボーイは寂しそうに言つた。

「それはね、彼女が自殺しようとするのを止めるからだよ
「自殺？ どうして……」

カウボーイは少し口籠つたが、ふつと息をつくと話し始めた。
本当は、ずっと誰かに聞いて欲しかったのかもしれない。

「彼女は僕の友人の恋人でね。結婚の約束もしていた。彼は売り出し中の新人のカメラマンで、彼女はモデルだった。幸せそうだったよ。何処から見てもお似合いのカッフルだった」

カウボーイは何処か遠くを見るように病室のドアに目を向けた。
「だがある日、二人は事故に巻き込まれた。一人が歩道で立ち話をしている所に車が突っ込んできたんだ。彼は咄嗟にパールを突き飛ばしたが、自分は車を避けることができなかつた。即死だつた」「悲しい……事故ですね」

「偶然の事故だよ。事故の理由は運転手の心臓発作によるものだつた。そして運転手もまた死んだ。せめてもの救いは、パールが助かつたことか……」

カウボーイは少し皮肉っぽく続けた。

「しかし、彼女はそうは思わなかつた……それから彼女は突然的に自殺を試みるようになった」

「どうしてですか？」

「さあ、どうしてだろうね。でも多分、彼女は優し過ぎるんだ。彼女は自分が生き残ってしまったことに負い目を感じている」

「……そんなこと……」

「僕だってそう思つよ。あいつがパールを突き飛ばしたのは彼女に生きて欲しかったからだ。しかし彼女は、どうしても自分に生きる価値があるのかわからないらしい。だから自殺を試みて自分に生きる価値があるのか試しているんだ。何度も、何度も……」

カウボーイは自分の隣に座つた力ナを見ながら言った。

「彼女にとつて自殺行為は自分の価値を測る賭けのようなものだ。だから彼女は誰かがそばにいないと自殺を企てない。病院に運ばれるまでが、彼女の賭けの時間となるんだ」

「どういうことですか？」

カウボーイは少し微笑んだ。花崗岩のような肌の向こうで、翠の瞳が優しく揺れる。

「彼女は死にたいんじゃない。本当は生きていきたいんだ。生きていてもいいという証拠が欲しいんだ……君は、奇跡ってやつを信じるかい？」

いきなりの質問に、力ナは少し戸惑つた。

「あんまり信じません……けど？」

カウボーイは頷いて言った。

「僕も運命とか奇跡とかいう考え方嫌いだ。だが十一回だよ？」

力ナは眉をひそめた。

「何が、ですか？」

「パールがこれまでに行つた自殺未遂の回数さ。彼女は手加減といふものを知らなさ過ぎる。本当に自分を生と死の境目に追い込んでしまう。一度は高速道路でドアを開けて車から飛び出そうとしたし、ある時は瓶一杯の睡眠薬を飲み干した。この前、浴室の扉に鍵をかけてから手首を切つた時にはもうダメだと思ったよ。何せ骨まで見えてたんだから……」

思わず想像してしまい、力ナは気分が悪くなつた。

しかしカウボーイは続けた。それは何処か自分に言い聞かせているようだった。

「だが彼女は生き残った。生と死のギリギリの境界まで行って、それでも帰ってきた。僕は信じているんだ、彼女は生きる為にここにいるんだと。そして、彼女がいつかもう一度恋をすることができる、本当に奇跡だって起こるだろうと」

カナはじつとカウボーイを見つめた。

「パールさんのこと……本当に愛してるんですね」

カウボーイは少し照れ臭そうに笑った。

「よしてくれ、僕はそんなに偉い人間じゃない。実業家というのは最も人を信用しない人種なんだから……ただ……」

「ただ？」

「誰かの為に生きるってのも悪くないかな？ って最近思ってる……」

ハハ、年だなあ

カウボーイの笑顔は、まるで子供のように純粋だった。

「そうだ。この病院に着いてすぐに、君の友人から番号を聞いて君の家に電話をしたんだが、誰もいなかつたんだ。もし出かけている先を知っているなら、早く連絡をとつた方がいい」

カウボーイの言葉に、カナは少し表情を固くした。

「家には……私の家には誰もいません」

カウボーイはカナの顔を見て失礼なことを聞いたかと尋ねた。

「いいえ」

カナは病室のドアを見た。それから独り言でも言つように話し始めた。

「私の父は七年前に亡くなりました。母はまだ元気ですが家にはいません。いつも若い男と一緒に遊び回っています。別に、悪い人じやないんですけどね」

カナは少し微笑んで言った。

「ただ……何て言つんでしょうね？ いつも誰かと一緒にいないと

ダメな病気……誰かに尽くしていないとダメな病気……そんな感じの人なんです。いつも何処かのろくでもない男を見つけてきて、バカなくらいにのめり込んで。まあ、すぐに別れちゃうんですけどね。まるで恋をして自分が傷つけられるのを楽しんでいるみたい。きっと、ああいうのを『自虐的』って言うんでしょうね』

カナは薄い寝間着の上から自分の体を抱き締めた。

「そのくせたまに帰つてきたら、私に女らしくしろとか勉強しろとか言うんですよ？ 嫌になりますよね。そう思いません？」

返事を期待していたわけではなかつた。カナは床に視線を落とし、呟いた。

「私は母みたいにはなりません……バカな女なんかになるつもりはないですから」

「成程ねえ……」

カウボーイが思わずぶりな口調で呟く。自分が笑われたような気がして、カナはキッとカウボーイを睨んだ。

「何か可笑しいですか？」

「いや……ね」

カウボーイは少し微笑みを浮かべてカナを見た。

「君は自分の価値がわかつていいないなと思ってね」

「私の……価値ですか？」

「そうだよ、君はかなりつまらないことに自分を縛られてしまつている。もっと自由に、我慢になるべきだ」

「……我慢だつて言つんだつたら毎日言われてます」

言つてから、カナは少し黙り……試すような目でカウボーイを見た。

そしてカナは、自分の『ビジネス』のことを話し始めた。カウボーイは黙つて聞いていたが、話が終わるとクスクスと笑い出した。

「何が可笑しいんですか？」

カナが強い口調で言う。

「いや、君の話がとても素晴らしいかったのでね。君はいい実業家に

なれるよ。保証してもいい」

カナはバカにされているようで面白くなかったが、不意に真剣な目で見つめられて言おうとしていた文句を飲み込んだ。

「君の恋愛に対する考え方は正しいと思う。普通我々は、経済は非人間的な行為であり恋愛は人間的……いや本能的な行為だと考えてしまう。だがそれは違う」

カウボーイはゆっくりとした口調で言った。

「実際には経済とは非人間的な行為ではない。昔の学者が言つているが、経済は平等に一人の人間の欲望を満たすことができる唯一の仕組みだ。例えば、海辺に住む者が塩を作り、平原に住む者が穀物を作る。どちらも人間にとつて必要な物だ。だが、常に両方が充分に手に入るとは限らない。だから両者がそれを交換することによつて……海辺の者は穀物を得て、平原の者は塩を得ることによつて、お互いの生活を成り立たせる。これが経済の基本理念だ。

勿論、いざこざが起こつて誰かが傷つくかもしれない。しかしそれでも、武力によつて足りない物を手に入れようとするよりは遙かに犠牲は少ない。経済とは一人の者が生きる為、そしてお互いの安全と自由を守る為に、それぞれ少しづつの努力をすることなんだ。これは君の言う理想的な恋愛の形と同じだね」

カウボーイの言葉に、カナは知らず知らずの内に頷いた。

「だが、これはあくまでも理想だ。世の中には、ただひたすらに自分の利益だけを追い求めることが経済だと思っている者が多い。自分の欲望を満たす道具だと思っているんだね。そしてこれは、恋愛にも当てはまる」

カウボーイは少し笑つて続けた。

「現に僕だってそうしてきた。例えばパールのことだつて……僕は博愛精神から彼女を助けたわけじゃない」

「どうということですか？」

カウボーイは少し言いにくそうに言った。

「最初はね。僕もパールのことは嫌いだつたんだ。何しろあいつは

恋敵だつたからね

「？？？ 恋敵？」

カナは目を丸くした。

「実はね、相手の男の方を僕が好きだつたんだよ。まあ肉体関係はなかつたが……この国はバイセクシャルというのものを一方的に否定するから困るね」

少し戯けて言い、カウボーイがペロリと舌を出す。カナはじう反應していいのかわからず、ただ黙つているしかなかつた。

「最初は思ったよ。どうしてあいつが助けた命を粗末にするんだ？ それなら最初から、お前が死んでいれば良かつたんだってね。あいつは本当に才能ある男だつたのに……」

カナが何も言えずにいるのを気にすることもなく、カウボーイは話し続けた。

「恋愛というものには、とてもエゴイステイックな感情がつきまとつ。それは経済より遙かに複雑でねじれているので、簡単には理解できないことが多い。例えば、誰かに傷つけられているように見えても実は本人がそれを求めていたり、逆に愛している相手を支配して傷つけることしかできなかつたりする者もいる。思うんだが、君のお母さんもそんな人なんじゃないかな？」

「そんな……」

「君の父親は、どうして亡くなつたんだい？」

その質問を受けた途端、カナは勢いよく喋り始めた。そこには、少し自慢するような響きがあつた。

「私の父は私の家に養子に来て、祖父の始めた会社で働いていました。ある時会社が潰れかけて、それで父は必死に努力して。会社は持ち直したんですけど、父は無理が祟つて体を悪くしてしまいました。そしてそのまま……」

そこでカナは少し口を噤んだ。

「……母は死んだ父の遺骸の前で泣いていました。私が悪かつた、つて……でも」

「夫が死んだのは自分の家の会社のせいだ。そう思ったのかもね」「そんなこと……」

「だが、それも可能性の一つだ。君のお母さんは夫が死んだのは自分の会社……いや自分の家が無理をさせたせいだと思つた。だから今度は自分自身を誰かの為に傷つけさせることを選んだ」

「どうしてそんなことわかるんです？　違うかもしないじゃないですか」

「そうだね、違うかもしない」

カウボーイはじつとカナの目を覗き込んだ。

「私に本当のことはわからない。私はただの部外者だ。だがそれは君も同じだ。君は君の母親とは別の人間だ。だから本当のことなんかわからない」

「でも」

カウボーイは目を伏せたカナの肩を軽く叩いた。

「憎むのなら話を聞いてからにしたまえ。外見だけで物事を判断するのは実業家として最も恥ずべき行為だ。それに、君の母親が本当に男好きなだけだったとしても、それはそれでかまわない」と僕は思うね。未亡人になつたんだ、死んだ人間に遠慮して人生を楽しまないのは経済的じやない。例え、君が死んだ父親をどんなに愛していたとしてもだ」

カナは少しムツとして言つた。

「私、そんなありふれた人間じやないです！」

「どうだか？」

カウボーイは病室のドアを見つめた。

「そう言え、あのリョウとかいう男も……」

「何ですか？」

「……いや、困つた男だと思ってね」

カウボーイは笑つた。カナは何が何だかわからなかつた。

「君はもつと恋をした方がいい」

もう行こうとして立ち上がった力ナは、やぶから棒なカウボーイの台詞に戸惑い、足を止めた。

「君は、パールと僕の関係の中で、僕が損をしていると思つだろ？」

「……………そうですね」

「最初は僕もそう思つてた。君の言葉を借りれば、自分は経済的に考えて損をしているってね。だけどそれは違つんだ。実際には、僕はパールから多くのものを貰つてている。とても多くのものをね……貰い過ぎじゃないかつてくらいだ」

「本当ですか？」

「本当さ。彼女に会つまで、僕は本当にエゴイスティックなことを考へる男だつた。自分がどうすれば有利になるかばかり考へていた。自分がどうすれば愛されるのかばかり考へていたと言つてもいい。……だがね、最近わかつたんだ。本当に経済で儲けたかつたら、まづ自分から相手に何かを与えた方がいいつてね

「……………本当ですか？」

一度目の強い問いかけに、カウボーイは真剣な眼差しで応えた。
「嘘は言わない。まずどんな相手でも愛すること、そうすれば相手は君が思つてもいなかつたものを与えてくれるだろう。そしてそれは、表面的で薄っぺらな繋がりなんかじゃなく、確かな絆となつて君を支えてくれる。中には思い上がり調子に乗る奴もいるだろうが、そんな奴は切り捨てればいい。この方法は、そんな人間を短期間で的確に見分けることができる方法でもある。君がまず愛することで、相手は君のことを愛してもいいと思うんだ。大人の社会でも『関係』というのは結局はそんなものだ、みんな怖がつてる。だからこそ、まずは愛してあげることだ。そうすれば君は、もつと多くのものを得ることができる。もつとも、それは金銭的な基準で測れるものではないかもしないがね」

カウボーイは胸の中央の辺りを叩き、少し充血した目でウインクをした。

「……………そうですね」

カナは微笑んだ。

「ああ、そうだ」

カウボーイも微笑んで言った。

「もし君の都合が良ければ、僕の会社に来ないか？ 別に社員になれとは言わないうが、君に世界を見せてあげられるよ」

カナは丁重に断り、礼を言って頭を下げた。こんなことをしたのは久し振りだ。それに大人の男性に正直に礼を言えたのも。

カウボーイはにつこり笑つて……あぐびをした。相当眠いらしい。カナは笑い、コーヒーでも買つてくると言つて歩き出した。

カウボーイはカナの後ろ姿を見送り、また病室のドアを見つめた。

「……早く戻つてこいよ、真珠。ここはまだまだ楽しい所だぜ？」

A M : 7 : 0 3

夜が明けてから間もないといつのに、病院のロビーは非常に混雑していた。

そこを埋め尽しているのは怪我人でも病人でもなく、手にカメラとマイクを持った情報の飢餓に陥った者達……つまりマスコミの大群だった。

どうやら昨夜の一件が知れ渡つたらしい。カナは腕に包帯を巻いていたので早速マスコミに取り囲まれたが、「私、彼と喧嘩して階段から落ちちゃったんですよ！ ねえ、彼ったら酷いと思いません！？」と言つたら波が引くようにカナの周りから消えた。

それからマスコミは、昔テレビで見た大学紛争のように病院側の人々と押し合い、ついに建物の外に閉め出されてしまった。

「何なんだか……」

カナは咳き、気を取り直して自動販売機でコーヒーを買おうとしたが、お金を持っていないことに気がついた。

仕方なく、カナはロビーのソファーに座つて備えつけられたテレビを見ることにした。どうやら昨夜の事件はかなりの注目を浴びたらしく、ワイドショーに呼ばれた数人の評論家が意見を交わしている。

彼等はこの事件のことを『時代の象徴』とか『青少年犯罪の凶悪化』といった言葉で表現していたが、カナは何か違うなと思った。

やがて何処から持ち出してきたのやら、リョウの経歴が写真と共に紹介された。神野涼（20）……無機質な文字が画面上に張りついている。この番組を見ている限りでは、誰の目にも凶悪で手のつけられない不良と映るだろう。やはり何かが違う。

それから数人の者にインタビューした映像が流れたが、皆一様に

リョウのことを精神異常者や誇大妄想家のように語っていた。それらの者の映像にはモザイクがかかっていたり、首から下のみが映つていたりしたが、喋り方（勿論音声も変えてあった）や服装の特徴から、カナは大抵の者の正体を容易に推察することができた。中にはリョウのグループのメンバーもいたが、皆リョウのことを他人のように話している。そして事件の関係者の話が生中継で入ってきたとの解説者の言葉と共に、スケアクロウの支配人、オカダの顔が映つた。

マスコミはスケアクロウの中に入っているらしく、オカダの後ろでは『K』が黙々と機材の片づけをしている。

最初、オカダはレポーターの質問に緊張した面持ちで答えていた。しかし、レポーターの不躾な質問がきっかけとなつたのだろう、いきなり感情を爆発させた。

「そりやよお！ 僕だつて店を漬茶苦茶にされたんだ、リョウには腹を立ててるよ！ 今すぐにでもここに引きずつてきて土下座でもさせてやりたいよ！ パールとカナちゃんに絶対に謝らせてやるよ！ 頭が割れるくらいに怒鳴りつけてやるよ！ でもなあ、だからつてアイツのことを一足三文の『わけのわからない奴』として扱うのはやめるよな！ アイツには色々と文句を言いたいけど、アイツはアイツで人間なんだ！ テレビの見せ物じゃねえ！ お前らリョウのことを何にも知らない癖に偉そうに語つてんじゃねえよ！ お前らに何がわかるつてんだ！ ファ————ク！」

ク！」

それは多分、ワイドショー史上最長の『ファック』だった。

すぐさま画像が切り替わり、アナウンサーが大変お聞き苦しい所があつたと視聴者に謝つていたが、カナは今までの意見の中で一番聞きやすかつたと思つた。何故ならオカダが本心のままに喋つていたからだ。

……もしかしたら、リョウと自分は似たタイプの人間かもしだい。

ふと、カナはそう思つた。だが……何だろう？　何が似ているのだろう？

カナは背もたれに体を預けて天井を眺めた。

……何だろう？

「何て言つか……貴方達は『特別』な感じよね」
かつて、クミがカナとリョウについて言つたことがある。しかし、カナはいまいちピンと来なかつた。

裏表がある性格だから？　これは確かにそうだ。リョウもカナも、常に複数の顔を使い分けている。それは多分、二人共が世界に違和感を抱いているから……世界に違和感……うん、これは何かぴったりとくる。

カナはリョウが、いつも何処か冷めた表情をしていることを知っていた。

あれはいつだつたか、スケアクロウのパーティーにつき合わされたことがある。バカ騒ぎに疲れてぼんやりとしていたカナは、同じくリョウがイスに座つてぼんやりしていることに気がついた。リョウはカナの視線に気づくと、カナを見てニヤリと笑つた。

それは同類の犯罪者に向けられた、ある種の連帯感を感じさせる笑みだつた。

「まったく、やつてられないよな？」

彼の表情を、カナはそう解読した。

……彼は孤独だつたのだろうか？

何処か寂しそうだつたのは確かだ。いつも他人を見下しているようで……それでいて頼りなさそうな目をしていた。

多分、そこが人を惹きつけたのだろう。

ただし、そんなリョウも唯一人の者に対しては非常に無防備な表情を見せることがあつた。カナも同じ男には不思議と無防備なままで接することができた。

少なくとも、そこだけは似ているかもしれない。

「あ、すいません……」

ソファーの背もたれに軽い衝撃が走り、少し慌てた声がした。

カナが振り返ると、そこには車椅子に座った初老の男がいた。どうやら車椅子がソファーにぶつかつたらしい。

「いいえ。それより、大丈夫ですか？」

カナは立ち上がって男に尋ねた。男は車椅子の向きを変えようとしていたが、腕にも怪我をしているらしく、思うように動かせないでいる。カナが見兼ねて手伝おうとした時、少しかん高い声と連續するスリッパの音が聞こえてきた。

「まったくもう！　お父さんたら無茶するんだから！」

それは小学校高学年くらいの女の子だった。長い髪が頭の上で二つに分けられ、小動物の尻尾のように伸びて跳ねている。

「どうして一人で動こうとするのよ！　私が押してあげるって言つてるのに！」

「いや、すまないね……だが、レイナに迷惑をかけるのも何だしね

……

「何言つてるのよ。体まだ治つてないんだから！」

少女はブツブツ言いながら車椅子を動かすと、カナに気づいて慌てて頭を下げた。父が御迷惑をおかけしまして、と大人びた口調で言い、父親の方に目を向ける。男は恥ずかしいような照れたような顔で微笑むと、改めてカナに謝つた。

その時、カナは男の胸にかかつた名札から、彼が『田島』という名字であることを知つた。

カナと田島親子は一緒に病院の中を散歩していた。少女一人で車椅子を押すのは大変だろうと思ったので手伝いを申し出たカナは、田島を残して自動販売機にジュースを買いにいった時に、少女から意外な話を聞かされることになった。

「お父さんね……これここだけの話なんだけど。さつきテレビに出

てた男に怪我をせられちゃったの」

少女……田島の娘で名前はレイナと言ひひじい……は、カナが父親の怪我のことを尋ねるといつ答えた。

「さつきのつて……リョウのこと？」

「言つてから、カナはリョウと言つても通じないかと思つたが、レイナの方はちゃんとわかつたらしい。」

「多分それ！　お姉さん知つてるの？……はまあい」として、お父さんね、おとといの夜にあの男に殴られて怪我したんだって！他にもいつぱいいたらしいんだけね」

「へえ……世間は狭いなあ」

カナは咳き、包帯の上から右腕を押さえた。リョウが暴力事件を起こしているのは知つていたが、何もあんな人の良さそうなおじさんを襲うことはないではないか。もしかしたら先輩もそれに参加していたら嫌だなあ、と考えていたカナは、レイナが何か言つたので驚いて返事をした。

「ねえ、お姉さんは何が欲しい？　お父さんがお姉さんにもつてお金くれたから」

カナは礼を言つてから、別に喉が乾いていないからと断りつつ思つたが、気を取り直してコーヒーを一本買った。

「ねえ、レイナちゃん？　お父さんは訴えたりするのかな？　そのリョウつて男を」

それから、カナはいつつけ加えた。

「……リョウだけじゃなくて、その他の仲間も……」

するとレイナは、自分の分のジユースを買ひながら不機嫌そうな顔で言つた。

「お父さんたら、訴える氣とかほとんどないんだよ？　だつてさあ、あんな酷いことされたんだもん訴えるのが当然じゃない！　それからお金も……賠償金つて言うの？　それも払つてもらつて当然じゃない！　そう思うでしょ？　お姉ちゃんも！」

カナは田島が訴えない方がいいなと思っていたので、レイナの言

葉に少し動搖し、曖昧な返事をした。その時、

「レイナ。このようなことをお金で解決するのはどうかと思うよ？」

突然背後から落ち着いた声がしたので、カナは驚いて缶コーヒーを落としそうになった。

振り返ると、そこには車椅子に乗った田島の姿があった。

「お父さんたら！ お人好し過ぎるんだから！」

レイナが唇を尖らせる。それから彼女は、カナに向かつて同意を求めるように言った。

「お父さんたら、夢みたいなことを考えてるんだよ？ いつかきっと、あの時に襲ってきた人達が反省して謝りに来るって。そんなことがあるわけないじゃない」

ひどく大人びた口調で、レイナが父親に説教する。

「それくらいわかつてよね？だからお父さんは人が良過ぎるってバカにされるんだよ。私だつてそれくらいはわかつてるんだから……こないだ学校で盗られたハーモニカだつて結局出てこないし！」

最後の台詞でいきなり小学生に戻ってしまった娘に、田島は落ち着いた声で言った。

「だがね、レイナ？ 彼等は若いんだし、そんなに厳しくするのもどうかな？ 彼等にはまだ長い人生が残ってるんだ、いつかわかつてくれるよ。それに、私はもう元気だし……ねえ？ レイナ？」

するとレイナは、唇をギュッと噛み、小さく呟いた。

「その『若い人達』って、お父さんの何分の一の価値があるの？」

「…………レイナ…………」

田島が困った顔をして、レイナの肩に手を伸ばす。その時、高いハイヒールの音と共に、誰かが廊下の角から姿を現した。

「まあ田島さん、ここにいらっしゃったのですか？ それにレイナちゃんも！」

それは細身の体に明るい色合いのスースを着込んだ、華やかな雰

団気の女性だつた。年は二十代後半だろう、長くまつすぐな黒髪の

間からピアスをつけた白い耳が見える。

「病室にいらっしゃらなかつたから心配したんですよ?」

「これは桜田君、じやなかつた桜田課長」

田島が車椅子の向きを変えようとして、苦しそうに体を折り曲げる。桜田と呼ばれた女性は慌てて駆け寄ってきた。

「大丈夫ですか? 田島さん」

「御心配なく課長、気を使わんで下さい。課長こそお仕事の方は大丈夫なのですか? 私なんぞの為に……」

「御心配なく、午後から出社いたします」

田島はひたすらに低姿勢だつたが、桜田は有無を言わせぬ迫力で田島を押し切つた。

「それから課の者も時間が空き次第見舞いに来ると言つております」

「頼みますから気を使わんで下さい……」

「いいえ! 田島さんあつての第一課ですよ?」

そして桜田は田島の車椅子を押して病室に向かい始めた。

「……私、あの人嫌い」

尚も遠慮する父親を見ながらレイナが呟いた。

「いい人じゃない?」

カナが正直な感想をもらすと、レイナは露骨に顔をしかめた。

「嫌いだよ。だつてあの人、死んだママと同じ香水をつけてるんだもん」

それからレイナは田島の後を追つて走り出そうとした……が、クルリと向きを変えてカナの方を見た。

「ねえ、お姉ちゃん?」

「何?」

レイナはじつとカナを見つめて言った。

「お姉ちゃん、犯人の男の人と知り合いでしょ?」

それは違う……言いかけて、カナは思い直した。

「……うん、まあ知り合いかな？」

カナは自分の右腕を指で示した。レイナはそれを見て頷いて言った。

「おとといね、お父さんが怪我させられた時に救急車を呼んだ人がいるのね。警察の人の話なんだけど、今までの事件だつたら、犯人はそんなことしないらしいの。それはもしかしたら、お父さんが今まで一番酷い怪我をしたから恐くなつたのかも知れないけどね」

レイナはしばらく黙つてから言つた。

「まあ、それでも私は救急車を呼んでくれて嬉しいと思うわけ。もし、お姉ちゃんが救急車を呼んだ人に会つたら言つといてくれないかな？」

「何て？」

カナが尋ねると、

「裁判の時は手加減してあげるって！」

レイナはそう言つて大きく手を振り、田島を追つて走つていつた。

「頭のいい子ね……」

カナは咳き、缶コーヒーを持ってカウボーイの所に戻ろうとした。その時、カナはロビーに一人の男が立つていてことに気がついた。

AM・8・17

それは不思議な男だった。

まるで慌ただしい周囲の時間の流れから切り離されたように、彼は静かだった。

表情も、気配も、瞳の色も……全てが静かだった。

「先輩？」

「……やあ、カナちゃん」

いつもと同じ少し戸惑ったような沈黙の後に、彼ははにかみ、返事をした。

「先輩、何処に行つてたんですか？ 大変だったんですよ、パールさんもカウボーイさんも……リョウさんも……」

「うん……知ってるよ」

彼は咳き、じっとカナを見つめた。

「腕、大丈夫？」

「えつ……だ、大丈夫ですよ！ ほらっ！」

彼の不思議な雰囲気に呑まれていたカナは、我に返つて慌てて腕を振つた。

「そう、それは良かつた」

彼は優しく微笑んだ。

それから彼は備えつけのテレビに目を向けたが、カナは彼を見つめ続けた。

彼の体からは潮の匂いと……別の女の匂いがした。

カナは彼が何処か遠くに行つてしまつたような気がした。胸に大きな穴が開いたようだ。

……そんなことには慣れっこだ、と力ナは考えようとした。

「ドロシーさんは何処ですか？」

「行っちゃったよ。何処かへね」

彼は口元に指を当てて小さく笑つた。

「ふーん。やつぱりあの人、人間じゃなかつたんだ」

力ナはロビーの長椅子に座つた彼の隣に腰かけ、わざと強気な口調で呟いた。

「確かに……確かにそうだね」

樂し氣に笑う彼の横顔は綺麗だった。

元々端正で纖細な顔立ちだったが、怯えや卑屈さといった影がなくなり、目は輝いている。力ナはいつの間にか、彼に見惚れている自分に気がついていた。

彼は変わつてしまつたのではない。力ナは考えた。多分、これが本当の彼なのだ。まだ弱々しくて不安定だが、彼はやつと自分の殻から抜け出して、新たな一步を歩み出そうとしている。

……私がそれを手助けできたら良かつたのに。そして、彼にとつて特別な存在になれたなら……。

でも、彼は私の手の届かない所に行つてしまつた。

力ナは自分がひどく冷たい所に取り残されたような気がした。

「リョウ……」

テレビを見いてた彼が、不意に呟いた。

それは朝のニュース番組で、内容は先程力ナが見ていたものと変わらなかつたが、力ナのいる病院の前から中継が入つっていた。

テレビに映つている建物の中に自分がいるというのは、何となく奇妙な気分がする。

「リョウは無事なのか？」

「怪我は酷いけど、そんなに悪い状態じゃないそうです。この病院の何処かにいるはずですよ」

「そうか……」

その時、カナは不意にリョウの行動の理由がわかつたような気がした。

「先輩」

「何?」

カナは彼にもたれかかりながら咳いた。

「リョウさんは……先輩のこと……好きだつたんでしょうか?」

彼の体が一瞬緊張するのが感じ取れた。しばらくの沈黙の後、長々と息を吐ききり、咳ぐ。

「……多分、そうだつたんだろうね」

「…………愛してたと思います?」

カナは彼の顔を覗き込むようにして尋ねた。

彼は落ち着いた目でカナを見た。

「そうかもしけないけど……肉体関係を望んでたとは思えないな。何て言つうか……」

彼は少し考えてから言つた。

「何て言つうか、リョウは寂しかつたんじやないかな? リョウは誰かを求めてたんだ。でもそれは、愛情とか欲情とかいうものとは少し違うと思う。……言いにくいけど、わかる?」

「わかります……とても」

カナが言つと、彼は少し寂しそうに笑つた。

「そう……でも僕は、それを受け止めてあげられなかつた」「そんなことないですよ」

カナは咳いた。

「あの人は他人を独占することでしか愛情を示せない人です。ただの我慢です」

「でも人は一人では生きられない。誰かと関係しなければ生きていけないんだ。例え、それがどんな方法でもね」

彼は誰かと似た台詞を言つた。その台詞は、カナの頭の中に嫌な記憶を呼び起こした。

「先輩も……そう思いますか?」

「何を？」

「人は誰かと一緒にないと生きていけないって」

「…………ああ」

彼はカナの体を優しく抱き締め、囁くように言った。

「さつきね。ドロシーと別れてから、ある人に会つたんだ。その人は□では嫌なことばかり言うけど、本当はとても纖細な人なんだ。僕はその人を駅まで送つてあげただけど……車の中ですつと泣いてたんだ」

「どうしてですか？」

彼の力ナを抱き締める力が少し強くなつた。

「それはよくわからない。ただ、今まで自分が傷つけてきた人に謝りたいって言つてたよ。今まで自分が愛していたのに心を打ち明けられなかつた人に……つて。それからこんなことを言つていた」

彼は一息ついてから言つた。

「世界中に愛と平和がもたらされることを……人と人などが本当にわかり合える世界が実現することを」「

「変な人……」

カナは吐き捨てた。それとよく似た台詞にも嫌な気分がつきまとつていたからだ。

「そうでもないよ」

彼は呟いた。

「その人は、ただ他人が恐いだけなんだ。本当は誰かを愛しているのに、素直にそれを伝えることができないんだよ」

「そんなこと……あるんでしょうか？」

カナは彼の顔をじつと見つめた。彼はカナを見つめ返した。

「僕も人が恐くて仕方がなかつた。実を言つと、カナちゃんのことも恐かつたんだよ」

「…………それ、本当ですか？」

カナは少し驚き、

「うん、ずっと誰もが恐かつた。ずっとね。でも心中ではわかつてたんだ。僕は一人では生きられない。でも誰も僕と共にいてくれない……愛してなんかくれないと思つてた」「そんなこと……そんなことないですよ！」

体を起こして彼の目を見つめた。

「……そうだね。そんなこと、ないんだね」

彼はゆっくりと目を閉じ、掠れる声で呟いた。

「何を怖がつてたんだろう、僕は……誰かに愛されたかつたら、自分から愛せばいいだけなのにね」

そして彼は、何処か遠くの方を見つめるようにして言った。

「力ナちゃん、前に君はエンタープライス号に乗りたいって言つたよね？」

「ええ。でも冗談ですよ？」

力ナが言うと、彼は本気ともつかない表情で言った。

「思うんだけど……僕達はもう、スタートレックの世界にいるんだよ」

「???? どういうことですか？」

力ナの疑問の眼差しに微笑みを返し、彼は穏やかな口調で続けた。
「この世界は星の海……一人の人間は一つの星だ。僕は『僕』といふ星のたつた一人の住人で、星と共に宇宙を旅するんだよ。人間は一人一人、宇宙人だ。皆、自分の星に住んでいる。一人が一つの文化や歴史を持つていて、それぞれ別の考えを持つている。同じ星は一つとしてないんだ。星は旅の途中に別の星と巡り会う。星と星は仲良くなつて交流したり……うまくいかなくて戦争をしたり……たゞすれ違うだけの時もある。ただ、どんなに仲が良くなつても、どれだけの時を共に過ごしても、二つの星は同じになつたりはしない。だって、星は一つ一つ違うんだからね」

「悲しい考え方ですね」

力ナは呟いた。

「そうでもないよ

彼は言った。

「僕達はスタートレックの世界にいる。僕達は自分の星を動かして宇宙を旅するんだ。ワクワクしない？ 宇宙は広いんだ。これからどんな星の住人と出会えるかってね」

彼の瞳に綺麗な光がともつた。

「『宇宙は最後のフロンティア』だよ……僕らの旅は、まだ始まつたばかりなんだ」

カナは少しうつむいて黙っていたが、不意に顔を上げると彼の手を取つた。

そしてそのまま彼の手を自分の胸に押しつけた。

彼が一瞬動搖し、困惑した表情を見せる。

「いつか……私の星に来て下さい。正式に御招待します」

彼の手のひらの温もりを感じながら、カナははつきりとした口調で言つた。

「そして一緒に旅をしましょう。……宇宙を」

その時、ロビーの横を賑やかに騒ぎながら、田島親子と桜田が通つた。

「あの人は」

彼が長椅子から立ち上がつた。

「いけません、先輩！」

カナは彼の手をつかんで止めた。

「いけません、先輩。あの人は……」

彼は振り返り、少し戯けた口調で言つた。

「謝つてこなくちゃ。リョウの分もね」

「そんな……」

彼はカナの手を握り返し、穏やかに微笑んだ。

「さつきの言葉、嬉しかったよ。いつかきっと、カナちゃんも僕の星に来てよ。あんまり居心地のいい所じゃないと思うけどね」

彼はカナの制止を振り切り、田島の方に歩き出した。

力ナは歩き去る彼の後ろ姿を見つめていた。

彼からは別の女の匂いがした。多分、心もその女のものだ。今更自分が何をしても無駄かもしない。力ナは自分が交渉の場に出遅れることを悟った。

しかし。

……しかしだ。

力ナの心の中で、何かがまだ諦めてはいけないと言つていた。例え不利な交渉であろうとも続けるべきだと。そして交渉が成立すれば、きっと大きなものを手に入れられるだろうとも。

それが何なのか、はつきりとはわからない。

いや、多分簡単な単語で言い表すことができるのだろうが……言葉にしてしまうと、きっとつまらなくなってしまうだろう。

力ナは自分のボキヤブライターの中から、その言葉を探すのをやめた。

「あ～あ、本気で好きになっちゃったかな？」

力ナは大きく伸びをして呟いた。

Hピローグ&プロローグ

OUT OF TIMES

結局、偉そうな自己犠牲精神にのつとつて歩いて行つた僕は、田島さんの娘さんが望んだように裁判にかけられることはなかつた。リョウが全ての事件の主犯は自分であり、他の者は自分が巻き込んだだけだと言い張つたからだ。

おかげで僕は、しばらく警察の厄介になつただけで釈放された。僕は田島さんを何度も訪ね、謝罪を繰り返している。娘のレイナちゃんは未だに僕のことを許してくれていないが、田島さんとは結構良い関係を築くことができていると思つ……多分。

数週間後、パールさんは意識を取り戻した。

十三回目の生還を遂げたパールさんは、僕らを見て「くだらない……」と咳き、少しだけ涙を流した。

カウボーイはリョウの刑事裁判における証人の役を買って出たが、別に重い罰を望んでいるわけではないようだ。結局は周囲の動きに押される形で賠償請求に踏み切つた田島さんも、必要以上の請求はしなかつた。

力ナと僕は、世間で言うところの『恋人同士』の関係を行つている。『行つていい』と言つたのは、彼女が最初に条件を出したからだ。その条件は、一年ごとに関係を継続するか終了させるか話し合つ、というものだつた。

彼女は自分にとつて不利益になる者と付き合つても意味がない、どちらか一方でも好きでなくなつたらすぐさま関係を終了させるべきだと言つた。でも絶対に私と付き合つて損はさせませんから、と言つた力ナの照れたような表情は、とても可愛らしかつた。

僕はこれまで人と関係することを恐れていたが……彼女との関係だけは壊したくないと思っている。

僕はカナに、努力する、と答えた。

先輩は、努力する、と言つてくれた。

私はこれまで数人の男性にこの条件を出したことがある。でも皆、うるさいことを言う女だと思ったのか、真剣に取り合おうとはしなかつた。酷い時には、それ以上話することもなく別れを突きつけられたこともあった。まあ、その時はそんな男と長く関係を続けて正解だったって思つたけど。

私としては先輩との関係はこれまでになく真剣なものだったから、関係を悪化させる可能性のある条件を出すのには少しためらいがかったのだけれど、これだけは譲れない条件だった。そして先輩は、私の出した条件に少し戸惑いながらも、照れたような微笑みを浮かべて、努力する、と言つてくれた。

「うまくできるかどうかわからないけど、努力するよ

……と。

そう言つた時の先輩の表情は、本当に綺麗だった。

リョウは刑務所の中で退屈しない生活を送つていて、僕を含めて数人の者がひつきりなしに面会に来ているからだ。

この前はジンの姿も見た。彼は毎回、リョウに会つてもられないらしいが、それでも懲りずにやつてきている。一度話しかけた時、顔の傷は大したことはない、と言つていた。その瞳からは僕に対する敵意は消えていなかつたけれど、もう、僕たちが対立するようなことはないだろうと思う。

カナの友人のクミという女の子ともよく会つ。彼女のことは一度だけ見て知つていたが、再会した時は見違えるほど綺麗になつていて驚いてしまつた。彼女は差し入れのお菓子の詰まつた袋を握り潰しそうになりながら、お願ひだからカナにだけは自分がここに来ていることを言わないので欲しいと言つた。

僕はカナから、しばらくはクミに私が彼女の行動を知つていて

とを言わないでいて欲しいと意地悪な表情で頬ま率先ていたので、黙つて同意しておいた。

私は自分の我慢を押し通す為にあんな条件を出したわけじゃない。ただ、やっぱり恋愛つていうものは、どちらか一方から『えるだけではいけないと思つ。

私は先輩にできる限りのものを『えよつと思つ。先輩の方から私との関係を終了させると言い出す可能性もあるんだから。

そうそつ、私は春休みを利用してアメリカに行こうと計画している。できれば先輩にも一緒に来て欲しいけど……そうすると、クミはダメだらうな。まあ、そんなに気にする必要もない。お互いに、もうそろそろ独り立ちしてもいい頃だと思つし、彼女とは世界中の何処にいてもネットを通じて話ができるんだから。

……母とは少しづつ話し合つ機会を増やしていくと思つてている。

リョウと僕は短い面会時間の中で取り留めのない話をする。最近の街の様子とか、流行つてることとか……カナのこととか……やはり女の子のことについては彼の方が色々と詳しいようだ。

裁判の時、リョウは田島さんやその他の被害者の人達に向かって頭を下げる謝つた。いつになるかわからないが、必ず償いをすると。リョウについては様々な意見が飛び交つて、僕は彼のことを本当に格好いい男だと思つていて。

……あつと、これからも。

面会時間が終わつて僕達が別れる時、僕は決まって指で銃の形を作り、リョウを撃つ真似をする。リョウは笑つて心臓の辺りを押さえ、撃たれた真似をしてみせる。

僕らにはそれで十分だ。

僕らの旅も、まだ始まつたばかりだ。

田島亮介は数杯目のグラスを少しづつ傾けながら、隣に座つてゐる男を横目で見た。

三年前に妻が亡くなつて以来、幼い娘と一人暮らしになつた田島は、仕事が終わつたらまつすぐ家に帰るようにしてゐる。しかし今日は何となく、昔馴染みの飲み屋に顔を出してみる気になつたのだ。隣の男は別の町から出張して来たらしい。早い時間から浴びるようにならへて、誰彼かまわざ当たり散らしていた。

「わかりますか？ こんなことじゃダメなんですよー。 こんなことじゃ、この国は本当にダメになつてしまつ」

田島はあまり真剣に男のことを相手にしていなかつたが、遂に手に持つたグラスを振り回して割つてしまい、その破片で左の頬を切つてしまつたのを見て、仕方なく男の体を支えて声をかけた。

「どうしたつていうんです？ ほら、血が出てる」

田島は店の者に掃除用具と医療用具を持つてくるように頼むと、男を椅子に座らせた。

「ダメなんですよ……こんなことじゃダメなんです」

酔いの為か、男はさして痛みを感じてゐる様子もなくブツブツと咳き続けてゐる。

「何がダメなんですか？」

田島は男の三日月形に裂けた頬の切り傷を見ながら尋ねた。運良く薄皮一枚を切り裂いただけのようだ。これならじきに塞がるだろう。

「僕はね、信じてるんですよ。人と人との間には確かな信頼関係が必要だつて……いや、違う。そつあるべきなんですよ。人間というのはね」

「それは私も思いますね」

田島は店員を待ちながら呟いた。

「彼ら社会が情報化されたと言つても、結局は社会といつもの人は人

間が動かしているんですから……」

「違う！ そうじゃないんだ！」

男は突然叫び出し、血走った眼で田島を睨みつけた。

「そうじゃない。僕が言っているのはそんなものじゃなくて、もつと根幹的な繋がりなんだ。本当にお互いを必要とする関係、二一つに別れた磁石が引き合うような……打算や計算のない関係が僕らには必要なんだ」

最後の『僕ら』は、『僕』に置き換えても良かつたかもしれない。男は掠れた声で喋り続けた。

「僕らには……本当の心の平安が必要なんだ。一時しのぎの快楽や、金で買つたような愛情なんかあつてはならないんだ」

「ごもっとも、ごもっとも……」

田島は少しうんざりしながら相槌を打つた。

「貴方の言いたいことはよくわかりますよ。私にも小さな娘がいますがね。やはりしつかりとした人間関係の中で育つて欲しいと思いますよ」

しかし男は田島の話を聞いている様子もなく、うつむいて低く咳き続けていた。

「僕だって人並みの恋愛や人生を楽しみたいんだ……それなのにあいつらときたら僕のことをまるで珍しい動物か何かのように見やがつて……僕はお前らみたいな奴らと親密な関係なんか持つ必要はないんだ。お前らが僕のことをどう思つているか知らないが、僕だってちゃんと人を愛せるんだ。ただお前らと関係を持ちたくないだけなんだ。いつか誰かが現れるんだ……誰かが。そして僕らは完璧な関係を築くんだ……完璧な……」

男はそこまで言つて、急に怒りに顔を歪めた。そして今までの考えを振り払つように腕を振り回した。田島が慌てて腕を避ける。

「畜生！ どうして、どうして僕らは誰かを必要としなければならないんだ！？」

男は叫び、立ち上がり……バランスを崩して床に倒れた。

「……まったく……」

田島は男を床に座らせた。

「何を言っているのかよくわかりませんが、人と人との関係なんて妙な縁で繋がっているものですよ。私の死んだ女房とは見合い結婚でしたが、結構うまくいっていましたし……まあ、こんなことは貴方にはどうでもいいことですかね」

田島は店員が救急セットを持ってきたのを見て、ではお大事に、と黙つて店から出ようとした。

「……なあ、どうして人は誰かを必要とするんだろうな？」

小さな声で男が呟いた。

「さあ、それが人間つてものなんじやないですか？」

田島は振り返つて答えた。

「それに、貴方がどう思つているかは知りませんけど、私はまだこの世界に失望しきつてはいないんですよ」

店員は男の傷の手当てをしようとしたが、冷たく敵意を感じさせる目でじろりと睨まれたので、仕方なく割れたグラスの掃除にとりかかつた。

男は床から立ち上ると、よろめきながら近くの席に座つた。そしてコートのポケットから紙切れを取り出した。

そこには、『明日、午前十時に駅前で。K&K』と書かれていた。
「僕だつて、運命的な出会いつてものを信じてるんだ……」

男は咳き、金を払つて店を出た。

夜空には月もなく、雨が降りそうだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1609d/>

僕達の惑星へようこそ

2010年10月8日11時58分発行